
機動戦士ガンダム00 DESTINY 『灰色の運命』

ミーティ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム00 DESTINY 『灰色の運命』

【Nコード】

N8621Q

【作者名】

ミーティ

【あらすじ】

オーブ攻略戦でシンはアスランと相撃ちになり、そして、シンはデステイニーと共に異世界に来ていた。

そこでシンが見たものとは、破壊と再生、そして変革の物語だった。

プロローグ 運命の光

C・E・73

オーブ

ロゴスのリーダー、ロード・ジブリールを匿い、身柄を明け渡さないオーブと、武力を行使してでもジブリールの身柄を確保しようとするザフトとの戦いは、『フリーダム』と『ジャスティス』の登場で更なる混乱が起きていた。

シン「クソッ！ 邪魔すんな！ 裏切り者ッ！！」

シン・アスカの駆る機体、デステイニーはビームサーベル形態のフラッシュエッジ2を目の前の深紅の機体——インフィニットジャスティス（以後∞ジャスティス）に降り下ろした。

アスラン「クッ！」

∞ジャスティスはビームシールドを展開し、デステイニーの攻撃を防いだ。

アスラン「シン！ お前は一体何を撃とうとしているのか、分かっているのか！？」

シン「ああ！ 分かっているさ！ 俺が撃とうとしているのは、ロゴスのリーダー、ロード・ジブリールと、その身柄を明け渡さないオーブだ！！」

パリーイイイイイイイイイ…！！

シンは『SEED』を発現。

デステイニーのスラスタ出力を上げ、∞ジャステイスを押しした。

アスラン「ぐう？！　だが、ジブリールは今、カガリ達が捜している！」

シン「ハッ！　どうせ取り逃がす癖に！」

アスラン「何！？」シン「それ以前にな、ジブリールをさつさと此方に明け渡しとけばこんな事にはならなかった筈だ！！　オーブには頭の中におが屑が詰まった奴しか居ないのか？！」

アスラン「なっ…！？」

アスランはシンの言葉に怒りを覚えつつも、同時に納得もし、動きをほんの少しだけ止めてしまった。

シン「てやあ！！」

ドガッ！！

アスラン「ぐあっ！？」

デステイニーは∞ジャステイスの頭部に蹴りを入れ、蹴り飛ばした。

シン「…！」

シンは蹴りの直前に∞ジャステイスのシールドを見た。

∞ジャステイスのビームシールド発生機には、先程デステイニーのフラッシュエッジ2での攻撃で付けた傷があった。

シン「（これならイケる！）墜ちろ！！」

デステイニーは蹴りと同時にビーム砲を展開し、ビームライフルと同時に∞ジャステイスに狙いを付け、シンはトリガーを引いた。

ダウンッ！！

アスラン「ハッ！？」

∞ジャステイスは咄嗟にビームシールドでビームを防いだ。
だが、シンの狙いは別にあった。

シン「そこッ！」

ダウン！

デステイニーのビームライフルからビームが放たれ、∞ジャステイスのビームシールド発生機の傷に直撃し、更にビームは貫通し、左肩も貫通した。

アスラン「えっ…！？」

余りの出来事に驚愕するアスラン。

ドガアアアアアアアアアアアン！！！！

アスラン「ぐあああああああああッ！！！？」

シールドと左腕が爆発し、∞ジャステイスは吹っ飛んだ。

キラ「アスラン!？」
レイ「隙だらけだ!」

レジェンドの攻撃は、ストライクフリーダム（以後Sフリーダム）
の左足を撃ち抜いた。

キラ「し、しまっ…!？」

ドガア!!

キラ「うわあああああああああッ!!??」

左足が爆発し、吹っ飛ぶSフリーダム。

実はこのSフリーダム、デステイニーのアロンドイトを白刃取りで
受け止め、レールガンで攻撃した際、デステイニーは攻撃を受けつ
つ、ビームライフルでSフリーダムの右腕を撃ち抜いたのだ。

デステイニーはこの戦闘でフラッシュエッジ2とアロンドイトを失
った為、補給する為にミネルバへ一時帰艦したが、Sフリーダムは
ザフトのオーブへの侵攻を阻止する為にそのまま戦わざるを得なか
った。

シン「フリーダム!？ いや、今はアイツを撃つ!」

シンは一瞬Sフリーダムの方を見たが、直ぐ様目の前の∞ジャステ
イスの方を見た。

シン「止めだ!」

デステイニーはビーム砲を構え、∞ジャステイスをロックオンした。

シン「これで終わりだ!!」

シンはトリガーを引いた。

ドゥンッ!!

放たれた業火。

アスランにはそれがスローモーションに見えた。

アスラン「（終わるのか…？ 此処で…？ いや、俺達は議長の野望を止めなければならない。だから、俺はやられない!!）」

アスランは其処で『SEED』を発現した。

アスラン「うおおおおおおおおおおおッ!!」

∞ジャステイスは有り得ない動きでビームを避けた。

アスラン「え…？」

だが、アスランは視界の端で『ビームの先』を見てしまった。
ビームの先には、『国防本部』があった。

アスラン「あっ…うわああああああああ!!??」

アスランの叫びも空しく、ビームは吸い込まれる様に国防本部に向かい、そして――

ドガァアアアアアアン!!!!!!!!!!

ビームは国防本部に着弾、国防本部は爆発した。

アスラン「あ…ああっ…!？」

国防本部にはカガリがいた筈では？

アスランはそう考えれば考える程、悲しみに暮れた。

シン「あれは…？ オーブ軍がバラバラになっている…？」

一方のシンは爆発炎上する国防本部を見ていたが、周囲の状況を見て、理解した。

シン「そうか、そういう事か。」

シンは妖しい笑みを浮かべた。

シン「まさかオーブ軍の国防本部を撃ったとは…。」

ドドドドドドドドドドド…

シン「！ 何の音だ？」

シンは音のする方を見た。

シン「…シャトル…？…ハッ！ まさか！？ ジブリール！」

オーブから宇宙^{そふ}に向かって発進したシャトル。
その中にはジブリールが乗っていた。

シン「チッ、往生際の悪い奴だ！ だけど！」

シンはビーム砲のリミッターを解除した。

ビーム砲の砲口にはビームの光が漏れて陽炎が立ち込め、砲身には過電流によって電気が流れ、高熱によって煙が出ていた。

シン「チャンスはたったの一度。撃てば確実に壊れる。それでも！」

デステイニーはシャトルをターゲティングした。

ピピピピピピピピ...

シン「ハア...ハア...ハア...ハア...」

シンは息を整えながら慎重に狙いを付けていた。

他のMSや艦艇からビームやミサイルがシャトルに向けて放たれていたが、シャトルには掠りともしなかった。

シン「（落ち着け...！ これで外せば全部終わりだ...！ 一か八かの一発勝負だ！）」

ピピッ！

遂にシャトルをロックオンした。

シン「ロード・ジブリール！ これで終わりだ...！」

シンはそう叫び、トリガーを引こうとした。

ビービービービー...！

シン「!？ 下?!」

ロックオンアラームが鳴り、シンは下を見た。

アスラン「うおおおおおおおおお!!!!!!!!!!」

連結したビームサーベルを持ち、デステイニーに迫る。ジャスティスがあつた。

アスラン「お前が！ カガリをおおおおおお!!!!」

シン「クッ！ 邪魔すんな！」

デステイニーは後退しながらビームライフルで撃つが、ジャスティスを止めることは出来なかった。

シン「チッ！ レイ！」

レイ「どうした？」

シン「この裏切り者を任せた！ 俺はジブリールを！」

レイ「分かった！」

レジェンドはデステイニーとジャスティスの間に割り込んだ。

アスラン「邪魔をするなああああああああ!!!!」

レイ「戦場で私情など！」

レジェンドは時間稼ぎの為にビームシールドでジャスティスの攻撃を受けた。

レイ「シン！ 終わらせろ！ 全てを!!!!」

シン「ああ！」

シンはそう言って再びシャトルをロックオンした。

シン「そつさ……！　こんな戦争なんて……！　終わらせてやる……！」

シンはトリガーを引いた。

アスラン「おおおおおおおお……！！！！！！！！！！」
レイ「ぐっ？！」

∞ジャステイスはレジェンドを弾き飛ばし、デステイニーに向かった。

レイ「シン……！」

シン「……！」

この時、シンには二つの選択肢があった。

∞ジャステイスを迎撃するか、自らの命を省みずにシャトルを撃つこと。

そして、シンが選んだ選択肢は――

シン「コレでえッッ……！！」

キィィィィィ……ドオオオオオオオオオ……！！！！

ビーム砲から極大のビームが放たれ、ビームが向かった先は――

ジブリール「……！！？」

極大のビームは瞬時にシャトルを飲み込み――

ジブリール「せつ…世界は…我々の手で…――」

ドガアアアアアアアンツツ！！！！

シャトルは爆散した。

シン「うおおおおおおおおおッッッ！！！！」

デステイニーはビーム砲を下に傾けた。

シン「アスラアアアアアンツツツ！！！！！！！！」

極大なビームは∞ジャステイスに向けられた。

アスラン「シイイイイインツツツ！！！！！！！！」

∞ジャステイスは僅かな動きでビームを避けた。

だが、機体の左半分は熱線で溶け、コクピットが丸見えになった。
だが、それでもその勢いは止まる事はせず――

ザンツ…！！

∞ジャステイスはビーム砲を斬り、そして――

バチィツツ！！！！

∞ジャステイスのビームサーベルがデステイニーの胸部を貫いた。

アスラン「これでツツ！！！！」

シン「まだ、俺はツツ!!!」

「アスランッ!？」

シン「俺はまだ死んでいない!!!」

アスラン「ハッ!？」

アスランはデスティニーの右腕が動いたのに気が付いた。が、時既に遅かった。

[illegible]

デスティニーは右手の掌底を∞ジャスティスのコクピットに押し当てた。

アスラン「しっ……しまっ!？」

デスティニーの掌底に装備しているデスティニー最強の武器、**パルマ・フィオキーナ**が放たれた。

ドゥンッ！！

デステニーの一撃は ∞ ジャステイスのコクピットを貫き、爆散した。

シン「ぐっ
…?！」

デステイニーは∞ジャスティスの攻撃で胸部ごとバックパツクのバ
ーニアを貫かれた為、海中に落下した。

レイ「シン?! どうした!?! 早く脱出しろ!」

シン「ゴメン…、どうやら無理みたいだ…。」
レイ「何!？」

シンは正面のモニターを見た。

∞ジャステイスの爆発は核爆発であり、その強大な爆風と熱線は、中心部にいたデステイニーの装甲に大ダメージを与えるには十分過ぎた。

モニター、即ちコクピットハッチはその熱線と爆風によって歪み、脱出不可能となった。

シン「チツ、此处までか…。」

シンはノイズの走るモニター、火花が飛び散り、スパークの走る計器を見ながら、そう呟いた。

だが、その顔には絶望や後悔など無く、満足げな表情だった。

シン「まあ…出来るだけの事は出来たんだ…、これで戦争が終われるなら俺の命なんて安いモンだろ。」

通信機器が完全に壊れ、通信が取れなくなった状態で呟くシン。

シン「まあ…できればこの世界がどうなっただけでゆくか見てみたかったな…。」

『出来るよ。』

シン「え?」

シンの目の前に光の粒子が集まり、人の形になった。

シン「…ステ…ラ…?」

ステラ『シンにはね、『新しい世界』に行ってもらいたい。』

シン「新しい世界…？　どうやって行くんだい？」

ステラ『大丈夫、信じて。』

すると、ステラから光が出て、コクピットを包み込んだ。

シン「うわっ！？」

ステラ『シンはその世界の行く末を『革新者』と一緒に見てほしいの。』

シン「世界の…行く末？　革新者？　一体どういう意味なんだ？　どうしてステラは此処まで俺に生きていて欲しいんだ？」

ステラ『シンはステラに明日をくれた。だからステラ、守るから。シンを。』

ステラから更に光が出て、コクピットから次第にデステイニーを包み込み始めた。

シン「ステラ…。」

ピカアアアアアアア…

レイ「何だ！？　あれは…？」

光はデステイニーを完全に包み込み、更に海の上まで出て、幻想的な光景を生み出した。

レイ「爆発ではない…？　しかし…何だ…この温かさは…？　シン…お前は…」

レイはその光が消えるまで見ていた。

「成る程、そういう事か。」

とある場所にモニターでこの戦闘を見ている者がいた。

「あの『ガンダム』は『この世界』のMSだったのか。まあ、そんな事はいい。この世界から導こう。誰にも邪魔はさせない。いや、出来はしない。誰もこの僕に勝てないのだから。しかし……」

その者はモニターを拡大させた。

画面にはSフリーダムが映っていた。

「キラ・ヤマトか……。彼とラクス・クラインは利用のしがいがある。『彼』は僕が宇宙^{そら}に上がる為の手段でしかないからもう用済みだ。だから次は彼らを使い、ザフトを潰す。そして頃合いを見て、彼らを消し、僕がこの世界を導こう。」

その者は邪悪なまでの微笑みを浮かべた。

この戦闘で、ロード・ジブリール、カガリ・ユラ・アスハ、アスラン・ザラが戦死し、シン・アスカはM I Aになった。

果たして、ステラがシンを導いた『別世界』とは――

西暦2308年

ソレスタルビーイング（以後CB）の『裏切り者』によって国連軍に譲渡された擬似太陽炉（GNドライブ「T」）と、それを搭載したMS、ジンクスによって、CBは壊滅状態にまで陥った。

ティエリア「ぐっ…うつ…！」

ティエリアは大破したナドレのコクピットで目を覚ました。

ティエリア「ま…未だだ…、未だ、計画は継続している…！」

ティエリアは太陽炉（オリジナルのGNドライブ）が無事なのを確認すると、それをナドレから切り離そうとした。

ピカアアアアアアア…

ティエリア「！？ 何だ！？」

ティエリアは目の前に突然光が出た事に驚いた。

ティエリア「…ん…？」

ティエリアは光の中心部に何か『物体』があることを確認した。

ティエリア「…MS…なのか…？」

その形は確かにMSによく似ていた。

ティエリア「……………！」

そして、光が消え、中心部にあったものは――

ティエリア「…翼のある…ガンダム…？」

それは、VPS装甲が解除されたデステイニーだった。
これが、出会う筈のない、二つの世界の出会いだった。

木星

木星の軌道上に浮かぶ木星探査船、エウロパ。

だが、その実態はオリジナルのGNDライヴの開発、製造を目的としたCBの偽装船だった。

そして完成したGNDライヴを地球に送った後、事故を偽って乗組員諸とも爆破された。

そのエウロパの残骸から発射されたロケット。

その中には一基の『オリジナルのGNDライヴ』が搭載されていた。
まるでこの世界にきた『異邦人』を迎え入れるかの様に…

第1話 異邦人

数日後

ソレスタルビーイング（CB）秘密基地

生き残ったプトレマイオスのメンバーはナドレとデステイニーを回収し、この秘密基地に逃げ込んだ。

デステイニーはイアン達によって解析中である。

そして、そのパイロットのシンは∞ジャスティスの攻撃で負傷した為、現在治療中である。

ティエリア「……………」

ティエリアは医療カプセルに入っているシンを見ていた。

フェルト「ティエリア、此処にいたんだね。」

ティエリア「もう大丈夫か？」

フェルト「うん…もう大丈夫。悲しんでばかりじゃられないから。」

ティエリア「そうか。」

フェルト「スメラギさんは？」

ティエリア「……………」

ティエリアは何も言わずに首を横に振った。

フェルト「そう……」

ティエリア「で、何だ？ あのMSの事か？」

ティエリアはシンを見ながらそう言った。

フェルト「ええ、イアンから機体データを貰ったけど……これ……」

ティエリア「ん？ どうした？」

フェルト「いや……見てくれれば判るから……」

ティエリア「？」

ティエリアはフェルトから携帯端末を受け取り、コピーしたデステイニーのデータを見た。

ティエリア「……………ッ！？ これは本当か?!」

フェルト「……………」

フェルトは黙ったまま頷いた。

ティエリア「しかし……これは『核動力』とはな……」

フェルト「やっぱり別世界のMS……」

ティエリア「そうとしか考えられないな。核は全て『封印』されているからな。」

フェルト「ええ。でもどうして突然……？」

ティエリア「それは彼に聞くしかないな。」

ティエリアとフェルトはシンを見た。

シン「……ん……」

と、ここでシンは目を覚ました。

シン「…ここは…？」

ティエリア「目覚めたようだな。」

シン「アンタは？」

ティエリア「僕はティエリア・アーデだ。」

フェルト「私はフェルト・グレイスです。」

シン「…シン・アス力です。」

ティエリア「では、単刀直入に言おう。君は『異世界の人間』か？」

シン「えっ…！？」

ティエリア「あのMS…デステイニーの動力源である核は、『我々の世界』では完全に封印されてあるからな。」

シン「我々の世界…！？ どういう意味なんだ！？」

ティエリア「これを見る。」

ティエリアは携帯端末を操作し、『この世界』に関する情報をシンに見せた。

シン「軌道エレベーター…、太陽光発電…、3つの超大国…。」

シンはここでステラの言葉を思い出した。

シン「ああ、そうか…。」

ティエリア「？」

シン「分かった。俺がいた世界の事を話すよ。」

シンは自分がいた世界の事を話した。

遺伝子操作によって能力を高めた人間、コーディネーターの事。

コーディネーターと普通の人間であるナチュラルとの確執。

それによって起きた連合軍とザフトによる二度の戦争の事。

シン自身もコーディネーターである事。
家族を一度目の戦争で亡くした事。
力を欲し、ザフトに入り、二度目の戦争に参加した事を話した。

フェルト「コーディネーター…。」

ティエリア「DNA操作の技術はこの世界にもある。だが、それを人間に使ったという例は無い。」

シン「まあ、違う世界ですからね…。」

但しソーマ・ピリス（マリー・パーファシー）とトリニティはデザインベイビーとして生まれた為、実際には『例』は存在する。

ティエリア「ん？ 確か君は軍に入ったと言ったが、もしかして、撃墜されたか何かでこの世界に来た、ということにならないか？」

シン「相打ち…ですね…。」

ティエリア「相打ちか。だが、何らかの『奇跡』が起きない限り、君は死んでいたとなるが？」

シン「…俺は、『導かれた』んです。」

フェルト「導かれた…？」

ティエリア「誰にだ？」

シン「ステラって子です。」

ティエリア「面識は？」

シン「有ります。」

ティエリア「どんな子だ？」

シンは顔を俯いたが、直ぐに顔を上げた。

シン「…エクステンデッドです。」

ティエリア「エクステンデッド？」

シン「連合軍がコーディネーターに対抗するために精神操作や薬物

等を使つて強化した人間…。」

シンは両手を握り締めながらそう言った。

フェルト「酷い…。」

ティエリア「成る程、どの世界も愚かな事をやる様だ。」

シン「愚かな事…?! まさかそつちの世界にも!？」

シンは思わず立ち上がりながら叫んだ。

ティエリア「そうだ。だが、既にその施設は解体されて存在しない。」

シン「そうか…。」

シンは医療カプセルに座った。

因みにシンが着ているのは医療カプセルに入る時の服である。

ティエリア「だが、君とステラはどう出会った? 敵同士の筈だが?」

シン「最初に出会った時は休暇の時だったから、敵とは思っていなかった…。」

ティエリア「成る程、次に出会った時は敵同士だったか。」

シン「はい。」

ティエリア「では、最終的には自らの手で撃つたと?」

シン「違います。説得しようと思いました。ですが…『アイツ』さえいなければ…!」

シンは険しい顔で言った。

ティエリア「アイツ?」

シン「フリーダムというMSです。」
フェルト「フリーダム……」

フェルトは携帯端末を操作し、デスティニーのデータバンクを調べた。

フェルト「有りました。このMSですね。」

フェルトは携帯端末をシンに見せた。

シン「そうだ、コイツさえいなければ……ステラを救えた筈……いや、救えた！ 確実に！」

ティエリア「だが、例え救えたとしても、上はステラをどう扱うかが問題だ。何せ様々な人体実験によって造られた存在だ。ステラの身体はそれでボロボロになっている可能性がある。連合軍兵士として処理されるか、或いは強化された人間のサンプルとなるか、だな。」

シン「……………」

シンは黙り混んだ。

ティエリア「まあいい、次は僕達の番だな。」

フェルト「ティエリア。」

ティエリア「大丈夫だ。例え失敗しても問題ない。こう言うのも何だが、どうせ彼はこの世界の人間ではない。だから射殺されても文句は言えない。」

フェルト「ティエリア……。」

ティエリア「さて、今度は我々だな。」

シン「……………」

ティエリア「我々はCBという組織だ。」

シン「ソレスタル…ビーイング。」

ティエリア「我々CBが何をしているのか、これを見れば判る。」

ティエリアは携帯端末を操作し、ある映像をシンに見せた。

『地球で生まれ育った全ての人類に報告させて頂きます。私達はCB、機動兵器ガンダムを所有する私設武装組織です。私達CBの活動目的は、この世界から戦争行為を根絶させる事にあります。私達は自らの利益の為に行動はしません。戦争根絶という大きな目的の為に、私達は立ち上がったのです。只今をもつて全ての人類に向けて宣言します。領土、宗教、エネルギー。どのような理由があろうと私達は全ての戦争行為に対して武力による介入を開始します。戦争を幫助する国、組織、企業なども、我々の武力介入の対象となります。私達はCB、この世から戦争を根絶させる為に創設された武装組織です。』

シン「これは…!?!?」

ティエリア「そのままの意味だ。この人物はイオリア・シュヘンベルグ。CBの創設者だ。」

シン「…武力による…戦争根絶…!?!? これが、アンタ達の目的か!?!?」

ティエリア「この演説が全てだ。」

シン「これじゃ、軍に対するテロ宣言じゃないか…!?!?」

ティエリア「そうだ。我々はテロリストだ。」

シン「それが分かっているのに何でコイツに従う!?!?」

ティエリア「…イオリアは今から200年も前の人間だ。」

シン「え?」

ティエリア「それに、今の我々は『イオリアの意志』ではなく、『自らの意志』で戦争根絶を行う事を決めたのだ。」

シン「自らの意志で…。なら、人を殺した罰は受けるのか?」

ティエリア「ああ、受けるさ。全ての戦争を根絶させてな。」

シン「…！？　ちよつと待て！　それじゃ、死ぬまでどころか永遠に戦わなきゃならないか！？」

ティエリア「その通りだ。C Bは『存在する事に意味がある』のだから、全ての戦争を根絶するまで、我々C Bの戦いは終わりなど無い。」

シン「……………」

ティエリア「さて、君は我々C Bの事を知りすぎた。」

ティエリアは拳銃を取り出し

ティエリア「シン・アスカ、君の答えを聞こう。」

銃口をシンに向けた。

シン「……………」

ティエリア「……………」

シンは少し俯いて沈黙し、ティエリアも銃をシンに向けたまま沈黙した。

それから、何分もの時間が流れた時、シンはゆっくりと立ち上がり、顔を上げ、ティエリアを見た。

ティエリア「！」

シンのその眼差しは、決意の眼差しであり、その眼差しにティエリアは一瞬怯んだ。

シン「俺は…俺も戦う。この世界の全ての戦争に！」
ティエリア「…そうか。」

ティエリアは拳銃を下ろし、しまった。

ティエリア「分かった。だが、君の機体では修復しても『GNドライヴ搭載機』と戦えるのかどうか怪しい。」

シン「GNドライヴ？」

ティエリア「太陽炉とも言う。元々は我々CBが持っている動力源だ。CBが世界と戦えたのは、そのGNドライヴのお陰だ。」

シン「それは凄い……！」

ティエリア「だが、『裏切り者』がGNドライヴの情報を流し、最終的には我々は壊滅的なダメージを受けた。」

シン「そんな凄い物なのか？」

ティエリア「ああ、我々が持っているGNドライヴはオリジナルで『半永久機関』だ。裏切り者が流した情報で造られたGNドライヴ「T」は擬似太陽炉とも呼び、有限で、電力をGN粒子に変換するバッテリーみたいな物だ。因みに我々が持っているオリジナルのGNドライヴは『五基』しか存在しない。」

シン「……貴重なんだな。……って、ちょっと待て。GNドライヴは全部使われているのかよ……！」

ティエリア「残念だが、その通りだ。」

シン「そんな……!？」

ティエリア「今度造られる予定の新型のトレミーには武装が搭載する予定だから、シンは砲撃士で我慢する——」

ピピッ！　ピピッ！

フェルト「イアン、どうしたの？」

イアン「ああ、実は『太陽炉のブラックボックスを経由して』こんなデータが送られてきたんだが、見てくれんか？」ティエリア「どういうのだ？」

ティエリアはそのデータを見た。

ティエリア「……………これは…!？」
シン「？」

シンは気になったのでティエリア達の間から覗いた。
そのデータは、『2311・XX・XX・ニコノ座標』XXXXXX
XXX』ニ来イ、ソコニ求メシ物有リ』という内容だった。

ティエリア「イアン、このデータは太陽炉のブラックボックスから
だったな？」

イアン『ああ、そうだが？』

ティエリア「まさか…このデータ…『ヴェーダ』からか…？」
皆「!？」

シン「ヴェーダ？」

その場の全員がティエリアのヴェーダという言葉に反応したが、シンは知らない為、当然の様に疑問符を立てた。

ティエリア「…ヴェーダはGNドライブと共にイオリアが基礎理論
を確立した量子型演算処理システムで、我々CBの計画の根底をな
していた。」

シン「へ…へえ…。」

シンはイオリア・シュヘンベルグに改めて感心した。

シン「…ん？ 『なしていた』…？ どういう事なんだ？」

ティエリア「…ヴェーダは『裏切り者』によって掌握された。」

シン「えっ?! じゃあこのデータは!？」

ティエリア「だが、イオリアはヴェーダが掌握、或いは破壊された

時の為に幾つものトラップシステムを仕込んでいた様だ。恐らくはこのデータはそのトラップシステムを使ってオリジナルのGNドライヴに送られた。これが正解に近い仮説だろう。」

このティエリアの仮説はほぼ正解である。

事実、このデータはヴェーダを『完全に』掌握したりボンズ・アルマークには一切知られていないのだ。

これはヴェーダがボンズに『掌握させた様に見せ掛けていた』のだが、リボンズがこれを知るのはかなり先の話になる。

イアン『って、事は、ヴェーダは何か重要な『何か』をワシら『オリジナルのGNドライヴの所有者』に送る為にこのデータを送ったという事か。』

ティエリア「そういう事だな。」

シン「…えっと…、ちよつと後ろ見せて貰えますか？」

シンはイアンの後ろにある物が気になっていた。

イアン『おっ？ 目が覚めたか。お前さんのMSなら今は解析している。』

そう言っただけでは親指後ろに指しながら後ろを見せた。

其処には、装甲を取り外され、各所に無数のコードやケーブルが繋がれたデステイニーがあった。

シン「……あ…ああ……」

シンは愛機の惨状にただただ顔を引きつらせるしかなかった。

イアン『すまないねえ、知らない技術が満載だからつついっつい熱中し

ちまってな。ハハハハハハハ…」

シン「…何だこれ…。」

シンはイアンの笑い声を聞きながらその場にへたり込んだ。

ティエリア「イアン、その機体の状態は？」

イアン「ああ、胴体はビーム攻撃でバックパックとバーニアごと貫通したのと、彼処のビーム砲と装甲以外は比較的良好だ。」

ティエリア「なら、『GNドライヴ対応型』に改修してくれ。」

イアン「…どういう意味だ？ それ？」

フェルト「これを見てください。」

ティエリア「ヴェーダが送ったデータを計算し、解析したデータだ。」

イアン「いつの間に… ツ！？ これは…まさか！？」

フェルト「そうです、日付、場所等を計算し、『何か』を放出した最適な場所を特定した結果がこれです。」

イアン「これは…『木星』じゃないか…！ まさか…！？」

ティエリア「恐らくは、『第六基目の太陽炉』…。」

皆「…！」

皆はティエリアの言葉に息を呑んだ。

ティエリア「何はともあれ、必ず回収しなければならない代物である事にはかわりない。さて、シン・アスカ。」

シン「はい！」

ティエリア「君はこれから、『ガンダムマイスター』としての訓練を受けなければならない。覚悟はいいか？」

シン「勿論！ どんな訓練だって受けてやるさ！」

ティエリア「良い自信だ。後、CB用の制服を作るべきだ。」

イアン「制服？ どうしてだ？」

ティエリア「C Bを一からやり直す為だ。協力してくれないか？」
イアン『分かった。早速取り掛かるう。』

ティエリア「さて、シン・アスカ。早速だが訓練を始めよう。何が起きてもいいようにだ。」

シン「ああ！」

こうして、シン・アスカはC Bのガンダムマイスターとしての戦いが始まるうとした。

そしてこれが、物語に多大とは言えないが影響を与える事になるとは、誰も思っではいなかった。

第1話 異邦人（後書き）

次回は3年後の話になります。

第2話 木星から来た流星

3年後

某宙域

ティエリア「…ロケットを回収した。」

ティエリアは修復したデユナメスで、とあるロケットを回収した。

ティエリア「これから帰投する。」

デユナメスは輸送艦にロケットを入れ、静かに秘密基地に帰投した。

CB 秘密基地

イアン「来たか！」

イアンは待つてましたとばかりに作業を開始した。

「まあまあ、そんなに慌てなくても逃げやしないぜ？ おやっさん。」

「

そう言いながら紅と黒のＣＢの制服を着た男がイアンに近付いた。

イアン「お前さんも待ち望んでいたんだろ？ アレを。」

「まあ、そうですね。」

男は苦笑いをしながらそう言った。

そして、デュナメスと輸送艦が秘密基地に到着した。

「来たか！」

男は制服から紅いパイロットスーツに着替えていた。
だが、そのヘルメットは、ＣＢのそれとは全く異なる形状をしていた。

デュナメスは輸送艦からロケットを取り出し、男とイアン達はロケットを分解した。

「…！ これは…！」

イアン「おお…！」

ロケットの中には、『06』と刻まれたコンテナがあった。

イアン「早速開けよう！」

イアンは興奮した様子でコンテナのハッチを開けた。

「これが…！」

イアン「そうだ、これが『太陽炉』だ。」

コンテナの中にあったのは、『オリジナルの太陽炉』だった。

イアン「早速作業を開始しよう！」

イアンは数人の作業員と共に作業を開始した。

ティエリア「第6の太陽炉か…。」

「ティエリア、お疲れさん。」

ティエリア「フ、気遣い感謝する。『シン』。」

そう、この男は20歳になったシンなのである。

シン「やつと思う存分デスティニーを使える！」

ティエリア「ああ、そうだな。だが、『アロウズ』に対抗するにはマイスターもガンダムも足りない。」

シン「アロウズ…。」

ティエリア「刹那はエクシアごと行方不明、アレルヤは太陽炉を放出した後、消息不明だ。」

シン「だけど、二人とも生きている事を想定してガンダムを開発してるじゃないか。アリオスガンダムと、ツインドライヴシステムを搭載したダブルオーガンダムを。」

ティエリア「そうだな。」

シン「しかし…アロウズは何でああも簡単に虐殺を行えるんだ…。」

ティエリア「統一世界の邪魔を行う者は全て排除する。それがアロウズのやり方だ。」

シン「許せない…！」

ティエリア「既に数千人がアロウズの被害にあっている。だが更に増えるだろう。」

シン「俺達が止める…。」

ティエリア「世界を変えた罪は、再び世界を変える事でしか償えない。」

シン「……………」

シンはイアン達によって運ばれる太陽炉を見ていた。

太陽炉はイアン達によって小型化し、GNドライヴ対応型に改修したデステイニーに搭載する事になる。

そして、更に1年後、物語が始まる――

第2話 木星から来た流星（後書き）

次回は生まれ変わったデステイニーの機体解説です。

デステイニーの機体解説

デステイニーガンダム

型式番号、GNUN-ZGMF-X42S

動力源、GNドライブ、ハイパーデュートリオン（但し封印中）

装甲材、Eカーボン

武装、GNバルカン×2、GNビームシールド（GNビームガン）×2、GNシールド、GNハンドバスター×2、GNクロウ、GNビームライフル、GNビームブーメラン（GNビームサーベル）×2、GNバスターソード改、GNバスターランチャー

GNドライブ対応型に改修したデステイニーである。

VPS装甲は全てEカーボンに換えてあるが、機体色はVPS装甲展開時と同じ色である。

GNドライブはバックパックのスラスターの部分に搭載しており、上部にはGNコンデンサーがある為、バックパックは大型化している。

ハイパーデュートリオンは核動力は封印された状態で搭載している。これは核の処理に困った為である。

型式番号のGNの横のUNのUは、『異世界のMS』若しくは『アンノウン』、Nは『核を搭載したMS』という意味である。

通常、プトレマイオス2に格納する時は第一格納庫に格納してある。コクピット、センサー、肘の部分等は他のガンダムと同じ物になっている。

背中のウイングユニットはグラビカルアンテナとしての機能を持ち、セラヴィーのそれに匹敵するGNフィールドを発生させる事が可能である。

また、ヴォワチュール・リュミエールは搭載してあるが、これを起動するには『ハイパーモード』を起動する必要がある。また、ハイパーモードとトランザムの併用は可能である。

上部ウイングには前後一ヶ所、合わせて四ヶ所にハードポイントがあり、追加武装を装備する事が可能である。

頭部のGNバルカンは大型化している。

GNバスターソード改は解析を終えたジンクス?のバスターソードを伸縮式に改修して装備している。

因みに、収納時でも改修前のバスターソードの長さと一緒にである。

GNバスターランチャーは折り畳みと伸縮の複合型であり、最大展開時には25mにもなる大型GNビーム砲であり、その威力は一撃で大型艦艇を易々と撃破する程である。

背中のウェポンラックのアーム部分は、一部が蛇腹状になっており、更に一ヶ所、軸回転する部分もある。

GNハンドバスター使用時には前腕部に内蔵したGNバーニアが展開し、指先のGNクローと合わせて非常に高いGNフィールド突破

能力を持つ。

デステイニーの機体解説（後書き）

次回から本編開始です。

第3話 天使再臨（前書き）

空白の時間は想像や妄想をしてください——（ドガッ！

第3話 天使再臨

1年後

ラグランジュ4付近の宙域

プトレマイオス2はセラヴィー、デステイニーをコロニーブラウドに向けて出撃させた。

シン「…彼処にエクシアが…？」

ティエリア「カタロンがアロウズに捕まった仲間を救出する為に行動を開始した。だが、アロウズもその行動をキャッチしている筈だ。」

シン「だったら、行くしかない！」

ティエリア「ああ。」

デステイニーとセラヴィーはスピードを上げた。

因みにシンのパイロットスーツのヘルメットはシンが着ていたザフトの物をCBのスーツの規格に合わせ、バイザーをサンバイザー（色は青）にしている。

そして、21歳になったシンの身長は175？で、顔は精悍さを増していた。

ピピッ

シン「！ テイエリアー！！ エクシアが！！」

シンは望遠モニターでエクシアリペアがアヘッドに蹂躪されている所を見た。

ティエリア「刹那！！」

そしてアロウズ仕様のジンクス？の1機がエクシアリペアに止めを刺そうとした。

シン「やらせるかぁッ！！！！」

デステイニーはGNバスターランチャーを撃ち、エクシアリペアに止めを刺そうとしたジンクス？はGNランスを失った。

「ぐあっ？！」

「新手か！？」

「応戦しろ！」

GNランスを失ったジンクス？はセラヴィーに、もう1機のジンクス？はデステイニーに向かった。

シン「一撃で決める！」

デステイニーはGNバスターソード改を持ち、ジンクス？に接近した。

ジンクス？もGNランスをランスモードにし、デステイニーに接近した。

「食らえ！」

シン「そんな攻撃！」

デステイニーは左手のGNビームシールドを展開し、ジンクス？のGNランスを防いだ。

「！？」

シン「てやあ！！！」

ドガッ！

デステイニーはGNランスを蹴り飛ばした。

「しっ…しまっ…！？」

シン「ハアアアアッ！！！！」

「うっ…うわあああああああ！！！？？」

デステイニーはGNバスターソード改を振りかざし、ジンクス？を真っ二つにした。

同時にセラヴィーはもう1機のジンクス？を撃破していた。

「クッ…！ 撤退する！」

アヘッドはもう1機のジンクス？を引き連れて撤退した。

ティエリア「ご苦労シン。」

シン「この程度じゃご苦労とは言いませんよ。」

ティエリア「そうか。」

セラヴィーはエクシアリペアに近付いた。

ティエリア「やはりアロウズの動向を探っていたか…、久しぶりだな、刹那・F・セイエイ。」

刹那「ティエリア・アーデ…？」

ティエリア「こんな所も何だから、一度コロニーで話そう。」

刹那「…ああ。」

セラヴィーはエクシアリペアを連れてブラウドに向かい、デスティニーはその後を付いていった。

コロニーブラウド内部

ティエリア「4年ぶりか、ずいぶん雰囲気が変わった。」

刹那「そういうお前は何も変わっていない、あの頃のままだ。」

ティエリア「よく言われる。」

刹那「フツ、…このガンダムはCBなのか？」

刹那はセラヴィーとデスティニーを見ながらそう言った。

ティエリア「そうだ。…ああ、折角だから紹介しよう。CBの新たなガンダムマイスター、シン・アスカだ。」

シン「シン・アスカです。宜しく。」

刹那「ああ、宜しく。」

この時の刹那は、新たな仲間が増えた事に内心喜んだのか、少しだけ微笑んだ。

「刹那・F・セイエイ！ 君はガンダムに乗っていたのか！？」
シン「！？」

シンは声のした方を向いた。
其処には自分と同じ年ぐらいの男が刹那に向かって叫んでいた。

刹那「沙慈・クロスロード。」

沙慈「答えてくれ！」

刹那「ああ。」

沙慈「それじゃ、5年前から武力介入を！？」

刹那「ああ、していた。」

沙慈「わかってるのか！？ 君達がやったことで多くの人が死んだんだ！ 君たちがそうしたんだ！」

シン「……………」

沙慈「…君達のせいで僕の好きだった人は、傷付いて、家族や親戚を殺されて…僕の唯一の肉親だった姉さんも、C Bに関わったばかりに、殺されてしまった。ルイスも、姉さんも、いなくなっただんだ！」

刹那「……………」

だが、刹那は何も言わなかった。

沙慈「くっ！ 何とか言えよ！ ぐっ！」

刹那「んっ。」

シン「あっ！？」

沙慈は刹那の懷から拳銃を奪い取った。

シン「せつ——えっ！？」

シンは刹那を守ろうと拳銃を取り出そうとしたが、ティエリアに制止された。

シン「ティエリア…？」

ティエリア「……………」

シン「……………」

シンはティエリアの無言の圧力で拳銃をしまい、刹那の顔を見た。

シン「（……あっ！）」

刹那の目には『撃たれることへの覚悟』が滲み出ていた。

シン「刹那…。」

シンは見守る事にした。

沙慈「言えよ！…返せ！！返してくれ、二人を…返してくれよおおおお！！！」沙慈は拳銃の引き金を――

ガシャッ！

引かず、沙慈は拳銃を落とした。

沙慈「うううう…！あああああああ…！！！」

沙慈は膝と腕を地面に付いて泣いた。

刹那「沙慈…。」

刹那は拳銃を拾いながらそう呟いた。

シン「…で、あの人はどうするんだ？」

刹那「このままいてもカタロンとしてアロウズに殺される可能性がある。保護しよう。」

ティエリア「分かった。シンはエクシアを頼む。」

シン「ああ。」

シンはデステイニーに乗り、エクシアリペアを抱え、刹那は沙慈を連れてティエリアとセラヴィーでブラウドから離脱した。

刹那「新しい艦か。」

ティエリア「プトレマイオス2。武装を施したプトレマイオスの後継艦だ。」

刹那「そうか。」

ティエリア「そして、新たなガンダム、『ダブルオーガンダム』。これが刹那の新たなガンダムとなる。」

刹那「ダブルオーガンダム。」

セラヴィーとデステイニーはプトレマイオス2に帰艦した。

「よお、生きてたか。」

刹那「！？ ラッセ！ 生きてたのか！」

ラッセ「ま、何とかな。ん？ コイツは？」

ラッセは沙慈を見てそう言った。

刹那「彼はアロウズに捕まっていた所を俺が保護した。」

ラッセ「って、事は巻き添えか。」

ティエリア「そうなる。後は僕がやる。刹那は休んでいる。」

刹那「分かった。」

ティエリアは沙慈を連れ、刹那は自室に向かった。

シン「……………」

シンは自室のベッドに寝転がり、ピンクの携帯を見ていた。
この携帯はシンの妹のマユの携帯であり、そして、遺産でもある。
この携帯はシンがこの世界に來た時にデステニーのコクピットに
あった。

シン「…刹那のあの目…あの覚悟の目は…やっぱり5年前の武力介
入をしてなきゃ出来ないか…。そうすると俺も未だ未だだな。世界
を変える覚悟を、罪を負う覚悟を…。しかし、あの人の気持ちも
分からなくはないな…。俺もあんな感じだったからな…。尤も、俺
はあの引き金を引いた方だけだな。」

ピピッ

シン「ん？ 通信？」

シンは携帯をしまい、通信を入れた。

刹那『シン・アスカ。』

シン「刹那？ どうしたんだ？」

刹那「俺はこれから仲間を集めに行くが、シンはどうだ？」

シン「仲間を集めにつて…、地球にか？ 大丈夫なのか？」

刹那「問題ない。」

シン「…分かった、俺も行く。小型艇で行くのか？」
刹那「そうだ。」

シン「じゃあ小型艇で待ち合わせよう。」

刹那「ああ。」

ピッ

シン「さてと、行くか。」

シンは自室から出て、小型艇のある格納庫に向かった。

格納庫

シン「あ、先に来てたのか。」

刹那「ああ、行くぞ。」

シン「早速すぎるだろ。…まあ、いいけど。」

刹那とシンは小型艇に乗り、まずは軌道エレベーター中継所に向かった。

そして、シンはC.B.の新たな仲間とかつての仲間に出会い、そして、『世界を変革するガンダム』の力の片鱗を見る事になる。

第4話 ツインドライヴ

アイルランド

刹那は仲間になりたい人がいるということで、シンと共に来ていた。

シン「（一体どんな人なんだ？ C Bの仲間になれるって…。）」

刹那「此处だ。」

シン「ん？」

刹那とシンはとある広場に着いた。

シン「…十字架。」

シンは広場に立つ巨大な十字架を見た。

刹那「此所はかつてテロがあつた所だ。」

シン「！」

刹那「此方だ。」

シン「あ…ああ…。」

シンは刹那の後を付いていった。

シン「（それにしても、新たな仲間って一体どんな人なんだ？）」

刹那「彼だ。」

シン「え？」

シンは刹那の視線の先を見た。
其処には、車の側でタバコを吸う男がいた。

シン「あの人が…？」

刹那はその男の所へ歩いた。

シンは少し離れてはいるがお互いが目に見える位置で待つ事にした。

「あんたか、俺を呼び出したのは。」

刹那「カタロン構成員、ライル・ディランディ。」

シン「カタロン？」

ライル「保安局か！」

ライルと呼ばれた男は少し身構えた。

刹那「お前を迎えにきた。」

ライル「ん？」

刹那「俺の名は刹那・F・セイエイ。CBのガンダムマイスターだ。」

「

ライル「CB？」

刹那「そしてお前もガンダムマイスターとなる。」

ライル「……………」

シン「……………」

刹那「ライル・ディランディ…いや、ロックオン・ストラトス。」

ライル「何なんだお前。人を呼び出しておいて、いきなりCBだと

「

刹那「ニール・ディランディはガンダムマイスターだった。」

ライル「兄さんがガンダムマイスター？」

刹那「そうだ。彼はガンダムに乗っていた。」

ライル「のつていた？ まさか、兄さんは死んだのか？」

刹那「4年前の戦いで。」

ライル「俺に兄の意思を継げというのか。」

刹那「そうはいわない。だが、お前もニール・ディランデイと同じように、この世界を変えたいと思っているなら、そのために戦う覚悟があるなら。」

そう言つて刹那はUSBメモリーを取り出した。

ライル「あ？」

刹那「ここに俺たちの情報が入っている。」

ライル「いいのかい？ これを俺が保安局に渡したら。」

刹那「保安局はまもなくヨーロッパ中のカタロンのアジトに鎮圧作戦を行う。」

ライル「なんだと！？」

刹那「奴らは本気だ。シン・アスカ。お前はライルと一緒にいろ。

俺は『かつての仲間』を迎えにいく。」

シン「分かった。」

刹那は立ち去った。

ライル「……………」

シン「……………」

ライル「…お前も、CBなのか？」

シン「ええ、ガンダムマイスターです。」

ライル「そうか…。俺はこれから連絡をする。」

シン「そうですか。じゃあ向こうにいます。」

ライル「ああ。」

ライルは車の中に入り、シンは広場に入った。

シン「……………」

シンは壁に寄り掛かり、空を見上げ、前いた世界の事と、この四年間を思い出していた。

シン「(マユ…ステラ…。俺は生きているぞ。)」

「…いい、聞いているのか？」

シン「…ん？」

ライル「ん？　じゃねえよ。連絡し終えたから声かけたら全然無視してしてたぞ。」

シン「あ、ゴメン。ちょっと思考の奥行ってたから。」

ライル「ハア…。ま、いいさ。俺もCBに入る事した。」

シン「…マジ？」

ライル「ああ、マジさ。」

シン「そうか…。じゃあ上の方で待ってるか。」

ライル「そうだな。(まあ、これでCBをカタロンに引き入れる可能性が出たな。もし引き入れられなくても共闘して連邦政府と叩く位は出来そうだな。)」

シンとライルは軌道エレベーターに向かった。

軌道エレベーター、リニアトレイン

シン「……………」

ライル「……………」

シンとライルは黙ったままだった。
会話する切欠が無いからだ。

だが、その沈黙をライルは破った。

ライル「なあ、お前はガンダムマイスターって言ってたよな？」

シン「はい、そうですね何か？」

ライル「だったら、ガンダムマイスターになった兄さんの事を知っているんじゃない？」

シン「言つときまずけど、自分はC Bが壊滅した後に入りましたからニールさんの事は殆ど知りませんよ？」

ライル「そっか、…いや、すまねえな。」

シン「…まあ、俺は元々『この世界の人間』じゃないしな。」

ライル「は？ どういう意味だそれ？」

シン「データを見れば判りますよ。」

そう言つてシンは携帯端末を取り出し、USBメモリーを差し込んだ。
だ。

このUSBメモリーの中にはデスティニーの全データがコピーしてあり、戦闘記録も勿論コピーしている。

シンは戦闘記録の方をライルに見せるつもりだ。

シン「これです。」

シンは携帯端末をライルに渡した。

ライル「……………ッ！？ ……マジでかよ…！？」

シン「ええ、マジです。」

ライルは戦闘記録を見て、驚愕した。

ライル「こりゃ…まあ…」

ライルは驚いた表情のまま戦闘記録を見た。

この戦闘記録、何故かインパルスの戦闘記録もデスティニーのデータに入っていた。

ただ、シンの手で編集が加えてあり、ステラに関する情報の大半は封じてある。

ライル「なっ!？」

そしてライルはある場面で更に驚愕した。

ライル「…これって、まさかお前…!？」

ある場面とは、シンのデスティニーが∞ジャスティスと相討ちになる場面だった。

シン「まあ、本当なら俺は其処で機体が爆発して死んだ。けど、何か『奇跡』が起きて、この世界に来たんだ。もう4年前、CBが壊滅した直後だったな。」

ライル「…そうだったのか…。」シン「世界を変える覚悟も、罪を背負う覚悟もまだそんなに無いけど、CBのガンダムマイスターになった以上、世界と向き合おうとする皆を見習い、世界を向き合おうと思う。」

ライル「そうか…。」

シン「……………」

ライル「……………」

結局は沈黙になり、静止軌道ステーションに着いた。

シン「まだ来てないみたいだな。って当たり前か。」

ライル「ま、そうだな。」

シンとライルは刹那を待つ事にした。

ライル「…まあ、俺もちよつとは身の上話でもするか。」

シン「え？」

ライル「お前が自分の事話して俺だけ喋らないのもあれだからな。」

シン「そうか。」

ライル「俺と兄さんは双子の兄弟で、後妹が一人だ。」

シン「……………」

ライル「けどな、俺と兄さん以外は全員自爆テロで死んじまった。」

「

シン「自爆テロ…!?!」

ライル「その後、俺は兄さんの援助を受けてAEUの商社マンをしてたが…、まさか兄さんがCBのガンダムマイスターだったなんてな…。」

シン「……………」

ライル「……………」

再び沈黙し、時間だけが流れた。

シン「（早く来ねえかな…。）」

シンがそう思った時、到着ロビーから女性を連れて刹那が現れた。

シン「やっと来ましたか。（…ってあれ？ あの人…まさか…？）」

ライル「そうみたいだな。」

シンとライルは刹那達の所に向かった。

ライル「よお、遅かったな。」

女性はライルを見て、驚いた表情をした。

「ロックオン?! そんな、生きて…」

ライル「そんなに似てるかな、俺と兄さんは。」

「お兄さん?」

刹那「紹介しよう。彼はライル・ディランディ…」

ライル「違うな。俺の名はロックオン・ストラトス。CBのガンダムマイスターだ。」

ライル改め、ロックオンはそう言った。

刹那「そうか。彼女はスメラギ・李・ノリエガ、CBの戦術予報師だ。シン。」

シン「いや。スメラギさん、お久しぶりですね。」

スメラギ「…あなたは、シン・アスカ…」

シン「ああ、覚えてくれてたんですね。……ってかどうやって引き戻したんですか?」

刹那「話はこのぐらいにして、トレミーに行くぞ。」

シン「おい、人の話ぐらい聞けよ。」

刹那達は小型艇に乗り、プトレマイオス2に向かった。

ピピッ

刹那「緊急暗号通信、トレミーからか。」

ラッセ『^{ワシ・ユーミン}王留美からの情報だ。アロウズにこっちの位置を知られた。

「^{〴〵}シン「何だって!? ハッ!?!」

シンはモニターを拡大した。

モニターには巡洋艦から発進するアロウズのMSが映っていた。

刹那「敵の編隊。」

ロックオン「アロウズのMSか。」

スメラギ「刹那、こっちの戦力は?」刹那「ティエリアとシンの機体だけだ。だが、ロールアウト間近の新型がある。」

スメラギ「3機だけ...。」

ロックオン「ずいぶんと寂しい組織なんだな。」

シン「5年前なんかガンダム4機で性能差がかなりあるといっても世界と戦ってたんだぞ?」

ロックオン「ああ、そういえばそうだな。」

スメラギ「.....」

スメラギはこの状況を見て、戦術プランを考え、そしてスメラギは
ブトレマイオス2に緊急暗号通信を送った。

シン「スメラギさん? トレミーに通信を?」

刹那「戦術プランか。」

シン「戦術プラン...。」

ブトレマイオス2から機雷が射出し、敵の動きを止めた。

スメラギ「ST27のルートを通って。」

刹那「了解。」

シン「(大量の機雷...足止め...セラヴィーの火力。...ハッ! まさ

か！」

ロックオン「なるほど、そういうことか。」

シンとロックオンはスメラギが何を考えたのか分かった。

ティエリア「セラヴィー、目標を迎撃する。高濃度圧縮粒子充填、GNバズーカ圧縮粒子解放！」

セラヴィーはGNバズーカ？を背中のGNキャノンに接続し、圧縮粒子解放による高濃度粒子ビームを放った。

ドドドドドドドド…ッッ！！！！

高濃度粒子ビームは大量の機雷を爆発させ、敵MSを巻き込んだ。

シン「す…凄い…！」

ロックオン「ヒュー♪やるね。」

シンはスメラギの戦術プランに驚き、ロックオンは関心した。

刹那「いや、まだだ。」

シン「えっ？」

ロックオン「おい！」

シン「!？」

数機のMSが爆発から出た。

シン「チッ！あの数のMSじゃセラヴィーでは止められない！」

刹那「イアン、ダブルオーを出す。」

イアン「ちょ、ちょっとまで刹那！こっちはまだ…！」

刹那「時間がない。操縦を頼む。」

シン「チッ、分かった。」

ミレイナ「小型艇着艦準備、およびダブルオー発進シークエンスに入ります。第1デッキ、ハッチオープンです。」

ロックオン「あれがCBの……」

ミレイナ「ダブルオー、カタパルトデッキに搬送です。」

シン「後ろ！」

シンは敵MSの攻撃を回避し、刹那は小型艇から出て、ブトレマイオス2のカタパルトデッキに向かった。

刹那「ダブルオー、0ガンダムとエクシアの太陽炉を乗せた機体。俺のガンダム……」

刹那はカタパルトデッキに搬送したダブルオーのコクピットに乗り込んだ。

刹那「ツインドライブシステム、いけるか？」

イアン「刹那、ダブルオーはまだ――」

刹那「トランザムを使う。」

イアン「無茶だ！ 刹那よせ！」

刹那「トランザム始動！」

ダブルオーはトランザムによって紅く輝いた。

イアン「やりやがった！」

フェルト「ダメです！ 粒子融合率73パーセントで停滞！」

イアン「トランザムでもダメか。」

ミレイナ「敵MS2機、急速接近中です！」

一方、セラヴィーはアヘッドに蹴りを入れられた。

ティエリア「ぐう！ ダブルオーは！？」

刹那「目覚めてくれ、ダブルオー。ここには、0ガンダムとエクシアと――」

プトレマイオス2に接近したアヘッドは、ダブルオーにビームライフルを向けた。

シン「刹那！」

刹那「俺がいるッ！！」

そして、その刹那の叫びに同調するかの様にツインドライヴの同調率が安定領域に達した。

その直後、アヘッドはビームを撃った。

ガシャン！ キイイイイイイイイ！！

ダブルオーはGNドライヴを前方に向け、GNフィールドでビームを掻き消した。

イアン「き、起動した！ 二乗化のタイムラグか！」

フェルト「ツインドライヴ安定領域に達しています。」

「や、やったのか？」

「なんだあの光は！」

ロククオン「はっ……」

ティエリア「おっ……」

シン「……………」

シンはダブルオーから放たれる膨大なGN粒子に見とれていた。

「なんだ、あのシステムは？」

何処かの場所でその光景を見ている者がいた。
そつ、その者こそ、ヴェーダを掌握したりボンズ・アルマークである。

刹那「ダブルオーガンダム、刹那・F・セイエイ、出る！」

ダブルオーはGNドライブを今度は後ろに向け、出撃した。

「新型！」

「アヘッドで叩く！」

1機のアヘッドと2機のジンクス？による包囲攻撃を、ダブルオーは簡単に回避した。

刹那「ダブルオー、目標を駆逐する！」

ダブルオーはGNソード？をライフルモードにし、アヘッドに一撃を与えた。

「な、なんだと！」

ドガアアアアアアンツッ！！！！

爆発するアヘッド。

「やられた！？」

「クソッ！ ガンダム！！」

ジンクス？2機はダブルオーに攻撃を加えた。

「ッ!？」

「なっ…何イ?!」

ダブルオーは、前に向けたGNドライブを高速回転させてGNフィールドを発生させ、ジンクス?の攻撃を防いだ。

刹那「そこッ!」

ダブルオーはジンクス?を攻撃し、撃破した。

「なんだあの性能は!?! なら、こいつで!」

ジンクス?は粒子攪乱幕の入ったグレネードを投げ、爆発させた。

刹那「!」

粒子攪乱幕によって拡散する粒子ビーム。

「これでビーム兵器は役に立たない! 接近戦では、こっちが有利!」

そう意気込むアロウズ兵士。

だが、彼はとんでもない間違いを冒していた。

ダブルオーの性能、GNソード?の能力と威力、ダブルオーのパイロット(マイスター)。

いくら知らないとはいえ、粒子攪乱をした時点で『逃げ』の選択をすれば生き残った可能性があった。

だが、彼が取った行動は、『格闘戦』だった。

刹那「これがッ！ 俺たちのッ！ ガンダムだッッ！！」

ダブルオーはGNランスごとジnkス？を真っ二つにした。

ティエリア「刹那…。」

ロックオン「あれが、ガンダムの力か…。」

シン「世界を変える力…。」

スメラギ「刹那…。」

ミレイナ「敵MS、撤退していくです。」

沙慈「ガンダム…。」

「リボンス、あのGNドライブはなんだい？ わからない？ レベル7まで掌握している君が。」

と、リボンスに語りかけている者——リジエネ・レジエッタの容姿は、髪型と声以外は全くティエリアと酷似していた。

リボンス「イオリア・シュヘンベルグ…。」

リボンスはCBの創設者の名を呟いた。

プトレマイオス2

フェルト「スメラギさん、お帰りなさい。」
ミレイナ「お久しぶりですノリエガさん。」
イアン「相変わらず無茶な戦術だ。」
スメラギ「わ、私は…」

プシュー

シン「新しいマイスターを連れてきました。」

シンはロックオンを連れてきた。

ラッセ「は？ ロックオン！？」

ハロ「ロックオン生キテタ。ロックオン生キテタ。」

ロックオン「熱烈な歓迎だな。」

ラッセ「どういうことだ？」

スメラギ「弟さんなんですって。」

フェルト「ロックオン・ストラトス…。」

ティエリア「（違う。あの男は彼じゃない。）」

ロックオン「やっぱり似てるか？」

シン「双子だから当たり前じゃないですか。ってか俺に聞かないでください。」

ロックオン「ま、それもそうだな。」

こうして、ダブルオーの起動により、破壊と再生と『変革』の物語が始まるうとした。

第5話 アレルヤ奪還作戦

プトレマイオス2

シンは刹那と共に沙慈のいる部屋に来ていた。

刹那「確かに、記録にある通り、スローネと俺たちは別の立場で武力介入を行っていた。」

沙慈「仲間じゃないと？」

刹那「ああ。」

沙慈「それでも、君たちも同じようにガンダムで人を殺し、僕と同じ境遇の人をつくったんだ。君たちは憎まれて当たり前のことをしたんだ。」

シン「……………」

刹那「わかつている。」

沙慈「世界は平和だったのに。当たり前の日々が続くはずだったのに。そんな僕の平和を壊したのは君たちだ！」

刹那「自分だけ平和なら、それでいいのか？」

沙慈「はっ…そうじゃない。でも、誰だって不幸になりたくないさ。」

シン「…沙慈、アンタが言う事も分かる。けどな、今も昔もその当たり前な事を過ごせない人達が必ずいた事を忘れるな。」

沙慈「……………」

刹那「行くぞ、シン。」

シン「ああ。またな。」

シンと刹那は部屋から出た。

この後、艦内放送で『アレルヤ発見』の報が流れ、CBメンバー達はブリッジのブリーフィングルームに集まった。

シン「反政府勢力収監施設……」

ティエリア「カサンドラ。」

刹那「此所にアレルヤが。」

ロックオン「……………」

するとスメラギがブリッジに入ってきた。

スメラギ「アレルヤが見つかったって本当なの？」

ラッセ「ああ、王留美からの確定情報だ。」

イアン「これから救出作戦を始める。」

スメラギ「救出って、どうやって？」

刹那「あんたに考えて欲しい。」

スメラギ「え？」

刹那「スメラギ・李・ノリエガ、俺たちに戦術予報をくれ。」

スメラギ「そんな……」

ティエリア「彼が戻れば、ガンダム『5機』での作戦行動が可能になります。」

ロックオン「それでも心許ないが。」

ティエリア「ん！」

ロックオン「おっと……。」

ラッセ「手を貸してくれ。アレルヤを助けるために……。」

スメラギ「……………」

フェルト「スメラギさん、これを。」

フェルトはCBの制服を持ってきた。

スメラギ「は…やめてよ、そうやって期待、押し付けしないで。私の予報なんて、何も変えることはできない。皆を危険に晒すだけよ。」

刹那「後悔はしない！」

スメラギ「なっ…！」

刹那「たとえミッションに失敗しようとも、あんたのせいなんかにしない。俺達は、どんなことをしてでも、アレルヤを、仲間を、助けたいんだ！ 頼む、俺達に戦術をくれ。」

スメラギ「……………」

シン「…俺はアンタの事はあまりよく知らない、アンタのする戦術予報もだ。でも、スメラギさん、アンタにしか出来ない事なんだよ、これは。」

スメラギ「……………」

スメラギは皆に背を向け、ドアに向かった。

スメラギ「…フェルト、後で現状の戦力と状況のデータ、教えてくれる？」

スメラギはそう言い残し、ブリッジから出た。

フェルト「スメラギさん。」

ラッセ「そんじゃ、各自持ち場に付け！」

C Bメンバーは全員持ち場に付いた。

目的はただ一つ、アレルヤ救出の為に。

スメラギ「この空母の粒子ビームを押さえさえすれば…。それにしても、ライル・ディランディのこの能力値の高さは一体どういうこと…？ そして…」

スメラギはシンのデータを出した。

スメラギ「シン・アスカのこの身体データ、免疫力を中心に常人よりは高い程度の身体能力…。これが、シンの世界ではコーディネーターと呼ばれる者達の特徴…。改めて見るとやっぱり凄いわ…。」

スメラギは次にデステイニーのデータを出した。

スメラギ「デステイニー…。運命の名を冠し、核動力を搭載するMS…。今は、核動力は封印され、新たに木星から来たオリジナルのGNドライブで動いている、か…。」

スメラギはシンとデステイニーのデータを閉じ、戦術プランの構築に専念した。

第1格納庫

シン「さて、俺の出番はなんだろうな。」

刹那「それはスメラギ・李・ノリエガが考えている。シンは戦術プラン通りに動けばいい。」

シン「分かった。」

イアン「刹那、ツインドライブは起動したはいいが、安定には程遠い。トランザムは使用するなよ。」

刹那「了解。」

フェルト「スメラギさんからミッションプランが届きました。」

ラッセ「おいおい、なんだよ、このプランは…。」
ミレイナ「大胆ですう〜。」

このプランはマイスター達にも送られた。

シン「うわっ!? 何だこりゃ?! 凄すぎるだろこれ!」

ティエリア「わずか300秒の電撃作戦。フツ、それでこそ、スメラギ・李・ノリエガ。」

シン「俺の役割は、と。……セラヴィーの援護を受けつつ、敵MSを迎え撃て、か。……兎に角やるしかないみたいだな。」

ミレイナ「プトレマイオス、大気圏突入シークエンスに移行するです。」

フェルト「ダブルオー、デスティニー、セラヴィー、ケルディム、出撃準備。0043をもつて、ミッションを開始します。アリオスは射出体勢のまま、待機です。」

シン「さてと、始まるぞ。常人ならまず思い付かないミッションが。」

フェルト「GNフィールド最大展開。大気圏突入を開始します。」

プトレマイオス2はGNフィールドを展開し、大気圏に突入した。

シン「……………」

アリオス以外のガンダムはプトレマイオス2とは別ルートで大気圏突入をしていた。

ミレイナ『トレミーは後00XXで大気圏を突入し終えるです。』
シン「分かった。（…しかし無茶苦茶な速さだな…、流星はGN粒子っていった所か…。それにしても…）」

―」

デステイニーはGNバスターソード改を構えた。

シン「（背後から敵MSを攻撃する！）」

ピピッ

シン「ダブルオーは施設に突入成功。セラヴィーは防衛に入った。
よし！」

シンは自らを奮い立たせる様に叫び、デステイニーは収監施設に向かった。

セラヴィーはGNフィールドを展開してダブルオーを護りつつ、GNバスターカ？とGNキャノンを乱射していた。

「なんて粒子量だ！」

ティエリア「ここは死守する！」

「もつと接近すれば！」

ティエリア「テコでも動かん！」

「クッ！」

ピピッ！

「！？」
」

「後ろ?!」

ジnkクス?の背後にはデステイニーが迫っていた。

「新手だと!?!」

シン「うおおおおおッ!」

「クソッ! 応戦す——」

ドウンッ! ドガン!!

「ぐあああああ!?!」 「な、なんだ! 別方向からの攻——

——」

シン「隙ありッ!」

「ッ?! しまつ——」

ザン…ッ!

「そ…そんな…!?!」

ドガアアアン!!

ケルデイムの狙撃で1機を撃墜し、デステイニーはもう1機をGNバスターソード改で真つ二つにした。

シン「まだまだ!」

「クッ!」

この時、MS隊はたった3機のガンダムに追い詰められていた。デステイニーがMS隊を掻き回し、デステイニーに集中すればセラヴィーの砲撃orケルデイムの狙撃にあい、セラヴィーを攻撃しよ

うにも、GNフィールドに阻まれ、ケルディムは遠距離にいる為、攻撃が届かず、更にその2機に意識を少しでも傾ければ忽ちデステイニーの餌食になる。

数の上ではMS隊が上にも関わらず、『四面楚歌』状態に陥っていた。

ピピッ

ティエリア「アレルヤを発見した！ アリオスを！」
ミレイナ「ばつちりです。アリオス、射出です。」

プトレマイオス2は半身を海上に出し、無人のアリオスを射出した。

ラッセ「トレミー、再潜行。GNミサイルで牽制しつつ、合流ポイントへ移動する。」

スメラギ「残り120秒…」

シン「そこッ！」

デステイニーはGNビームブーメランを投げ、ジnkクス？を撃破した。

「隙あり！」

シン「！」

ジnkクス？はGNビームサーベルを振りかざし、デステイニーに迫った。

シン「やられるか！！」

デステイニーは投げたGNビームブーメランを手に取り――

バチイイツ!!

GNビームブーメランをビームサーベル形態にしてジンクス?の攻撃を受け止めた。

「なっ…何イ!!? ハッ!？」

兵士は気付いた時には既に遅かった。

ダウンッ!!

セラヴィーの砲撃はジンクス?を飲み込み、爆散した。
その直後、アリオスが施設に激突した。

シン「ダイナミックすぎるだろあれ。…おっと!」

デステイニーはジンクス?の攻撃を躲しながらGNバルカンで牽制した。

シン「刹那とアレルヤさんが離脱するまで暴れてやるッ!!」

デステイニーはそのままジンクス?を切り刻んだ。

「うわああああああ!!!!」

最後にデステイニーは離れながらGNバルカンをジンクス?に付けた損傷に撃ち込み、ジンクス?は爆発した。

シン「次ッ!」

デステイニーは次の獲物に向かった。

ティエリア「残り30秒をきった！」

シン「30秒!? 刹那達は!？」

ジンクス?を弾き飛ばしながらシンは叫んだ。

ティエリア「まだだ! 刹那、アレルヤ、限界時間だ!」

刹那「了解。」

刹那は直ぐに返事をしたが、アレルヤからは返事が無かった。

ティエリア「アレルヤ、どうした? アレルヤ! アレルヤ!」

アレルヤ「...了解。」

やっとアレルヤから返事が来た。

そして動き出すダブルオーとアリオス。

ティエリア「二人とも無事の様だな...。シン、離脱する!」

シン「分かった!...。ッ!？」

シンはアリオスの方を見て、驚愕した。

アリオスは目の前のジンクス?の攻撃を躲し、GNビームサーベルでジンクス?を撃破したのだ。

シン「...あれが...『超兵』の力...。」

シンは施設から離脱しつつも、アリオスに向けてこう呟いた。

シンはティエリアから他のマイスター達の事を聞いていた時にアレ

ルヤの事も聞いていた。

アレルヤは旧人革連によって肉体改造を受けた人間、超兵である事、アレルヤが自らの過去を払拭する為に、そしてもう自分の様な存在を生み出さない為に超兵特務機関を破壊した事等を聞かされていた。

シン「…だけど、仲間である事にはかわりないし、こういう時は笑顔で迎え入れなきゃな。」

シンは微笑みながらそう言った。

シン「…！ 虹。」

ブトレマイオス2が海に突入した際に発生した膨大な水蒸気が虹を発生させた。

それはまるで全員が揃ったガンダムマイスター達を祝福しているかの様である。

だが、この虹はCBに更なる戦いをも告げていた。

ブトレマイオス2

シン「初めましてアレルヤさん、シン・アス力です。」

アレルヤ「ああ、初めまして。」

アレルヤは座ったままシンと握手をした。

アレルヤ「もしかして、あの赤い翼のガンダムのマイスターかい？」
シン「はい、そうです。」

ティエリア「アレルヤ、シン。」

ティエリアはアレルヤとシンにコーヒーを渡した。

シン「ありがとう。」

アレルヤ「ありがとう、ティエリア。」

ティエリア「アレルヤ、どうして連邦政府に捕まっていた？ 超人機関の情報を…」

と、そこにロックオンが入ってきた。

ロックオン「いやはや凄いなこの船は。水中航行すら可能とは…。」

アレルヤ「ろ、ロックオン！ どうして！」

ロックオン「そのリアクション、飽きたよ。」

アレルヤ「す、すまない…。」

シン「ハハッ。」

ティエリア「変わらないな、君は…。」

アレルヤ「そうかい？」

ティエリア「無為に変わる必要はないさ。おかえり、アレルヤ。」

アレルヤ「フッ…ああ、ただいま…。」

シン「……………」

シンは多少の孤独感に苛まれていた。

シン「（もう4年もこの世界にいるけど、やっぱり異世界の人間だからか、人付き合いが全然慣れないな…。）」

シンはそう思いながらコーヒーを飲んだ。

第6話 戦う理由

ブトレマイオス2

トレミークルーは刹那がアレルヤの次に救出したアザディスタンの第一皇女のマリナ・イスマイルと対談をしていた。

マリナ「助けていただいたこと、そして、5年前アザディスタンの内紛を止めていただいたこと、本当にありがとうございました。戦いを行わずに戦いを止めた、あの行為はとても素晴らしいものだと私は考えます。」

刹那「そんなことはいい、これからどうする？」

マリナ「アザディスタンに戻ります。」

ラッセ「無茶だろ。」

刹那「保安局がくる。」

ティエリア「あなたを口実に連邦が介入してくる可能性もある。」

マリナ「連邦に参加しなかったアザディスタンは世界から見捨てられています。経済は破綻し、保守派の指導者であるラサーが亡くなられ、改革派との争いも泥沼化の様相を呈している。でも、だからこそ私は…」

刹那「わかった。トレミーの進路をアザディスタンに向ける。」

ティエリア「刹那。」

イアン「了解した、刹那。」

ラッセ「ブリッジに行く。」

シン「さて、俺は暇だからシューティングでもするか。」

ミレイナ「つかぬ事を聞きます。二人は恋人のですか？」

刹那「違う。」

マリナ「違います。」

ミレイナ「あ、乙女の勘がはずれたですう。」

イアン「ハア…。」

シン「いや、普通に考えて違うだろ。」

イアン「ああ、シン。シューティングが終わったらエンジンの点検を手伝ってくれないか？」

シン「ああ、…いや、今手伝う。シューティングはその後でいいや。」

イアン「すまんねえ。」

シンとイアンはエンジンの点検に向かった。

エンジン室

シン「えっと…、何で沙慈まで？」

シンは作業をしながらそう言った。

イアン「人数は多いに越したことはない。しかも宇宙技師の2種免許持ってるんだろ？」

沙慈「あ、まあ…」

イアン「それにな、働かざるもの食うべからずってな。」

シン「うわっ、ひどっ。」

沙慈「わかりましたよ、えっと…」

イアン「イアンだ、イアン・ヴァステイ。」沙慈「イアンさん、あなたは どうしてここに いるんですか？」

イアン「イヤという程、戦場を見てきて、戦争を無くしたいと思っ たからだ。ここに いる連中も同じだ。戦場の最前線へ送られた者、 軍に身体を改造された者、家族をテロで失った者、ゲリラに仕立て 上げられた者、みんな戦争で大切なものを失ってる。世界にはそう いう現実があるんだ。」

沙慈「でも……」

イアン「そうさ、ワシらは犯罪者だ。罰は受ける。戦争を無くして かな。」

シン「……………」

シンはイアンの言葉に心を打たれた。

シン「（やつぱし皆それ相応の覚悟を持って戦っているのか……。俺 にも持てるかな……。その覚悟……。）」

イアン「ホラ、さっさと作業しろ。飯抜きにするぞ。」

沙慈「あ……はい。」

シン「アンタ悪魔かよ。」

イアン「悪魔も何も、ワシは当然の事を言っているだけだが？」

シン「はいはい、そうですか。」

イアン「何だよ今の棒読み。」

シンとイアンのこんな会話が何分も続けられていた。

――が

ドドオオオオオオオオオオ！！

沙慈「あっ！　なんだ！」

イアン「敵襲！？」

シン「まさか待ち伏せ！？ クツ！」

シンはそう言つて格納庫に向かつて走り出した。

第一格納庫

シン「アレルヤさん、状況は！？」

アレルヤ「分からない。」

刹那「兎に角ガンダムで待機しよう。」

シン「分かった！」

アレルヤ「了解！」

シン達はガンダムに乗った。

シン「ガンダムは出られるのか！？」

刹那「まだ出撃可能深度には達していない。」

シン「クツ…！ このまま何も出来ないでやられるのは勘弁だぜ！」

その頃のブリッジ

フェルト「生体用音波樹脂で、砲門が開きません！」

ラッセ「操舵もだ！ くそー、敵はどこだ！？」

ミレイナ「Eソナー使用不可です！」

ラッセ「打つ手なしかよ！」

と、そこにスメラギが入ってきた。

スメラギ「落ち着いて！ 手はあるわよ。」

フェルト「スメラギさん。」

スメラギ「もうすぐ爆雷が止む。」

そして、爆雷が止んだ。

スメラギ「そして、海中の敵がこちらに接近し、直接攻撃を仕掛けてくる。」

ドガアアアアアアンツッ！！！！

ミレイナ「きゃああああ！」

フェルト「敵が、船体左舷に突撃しました。被害甚大！ このままでは圧壊する恐れも！」

スメラギ「ラッキーね、私たちは。」

ラッセ「何を！」

スメラギ「索敵不能の敵がそこにいて、トレミーはガンダム出撃深度まで到達している。しかも敵は、下部コンテナの給水時間まで短縮してくれたわ。」

その頃のシン達

ドガアアアアアアンツッ！！！！

シン「ぐうつ！？」

アレルヤ「でかい！……まさか接近された！？」

シン「クソツタレが……！」 刹那「……………」

シン「早く出撃要請を……！」

フェルト『ガンダム各機、出撃可能になりました。セラヴィーから、下部コンテナから直接出撃をしてください。』

シン「ッ！ やつとか！」

ティエリア「了解。セラヴィー、出る。」

セラヴィーは下部コンテナから出撃し、新型MA、トリロバイトを押し出そうとした。

「MSの水力で、このトリロバイトに！」

ティエリア「切り札はある！ トランザム！」

セラヴィーはトランザムを使用し、トリロバイトを押し出した。

「な、何だと！ ふん！」

トリロバイトはクローをセラヴィーに何度も突いた。

ドガッ！

ロックオン「水中でも、こんだけデカけりゃ！」

シン「食らえ！」

ケルデイルとデステイニーの射撃がトリロバイトを襲う。

「うぐ！ 距離をとって、魚雷を！」

フェルト「刹那！」

刹那「了解！ ダブルオー、目標を…」

マリナ『私と一緒にこない？ アザディスタンに。』

刹那「クッ！ 目標を駆逐する！」

ダブルオーはトリロバイトを滅多斬りにした。

「ば、バカな！」

「トリロバイトが！」

そして爆散するトリロバイト。

アレルヤ「刹那、海上へ出る！」

刹那「了解。」

アレルヤ「トランザム！」

ダブルオーは変形したアリオスに掴まり、アリオスはトランザムを使用し、海上に出た。

シン「俺達も海上に出よう！」

フェルト「待つて。」

シン「フェルト？」

フェルト「カタロンからの通信です。」

シン「カタロンから？」

ティエリア「どういうことだ？」

フェルト「『そちらが保護しているアザディスタンの第一皇女、マリナ・イスマイルと面会をしたい。』とのことです。」

シン「何でカタロンが…？」

ロックオン「さあな。（…シーリンか。）」

ミレイナ「カタロンのMS隊がダブルオー、アリオスを援護したです。」

ラッセ「成る程な、彼方さんはよっぽど此方と接触がしたいみたいだな。」

スメラギ「ポイントXXXで合流後、カタロンの指定ポイントに。」
ラッセ「了解。」

プトレマイオス2はガンダムを収容し、ダブルオーとアリオスと合流した。

――

その後、刹那達とカタロンが接触し、プトレマイオス2に帰艦した。

プシュー

アレルヤ「スメラギさん。」

すると、CBの制服を着たスメラギがブリッジに入ってきた。

スメラギ「サイズあわないの、キツくて。」

フェルト「あ、直ぐに他のを用意します。」

イアン「ワシはそのままがいいな。」

ミレイナ「セクハラです、パパ！ ムウ。」

シン「エロオヤジだな。」

イアン「おい！ シン！ 何か聞き捨てならんこと聞いたぞ？！」

シン「はいはいエロオヤジエロオヤジ。」

イアン「あつ！ もう許さんぞ！」シン「はい？ やります？」

シンは手をポキポキ鳴らしながら言った。

イアン「いや…すまん。」

シン「……………」

刹那「スメラギ・李・ノリエガ。」

スメラギ「ハハッ…。」

だが、シンは知らない。

ある『意外すぎる人物』との出会いがある事を、そしてアロウズの非情で残忍な手口を。

第7話 再会と咆哮（前書き）

シンが会おうのは、果たして何者なのか…？
後書きにはNGシーンがありますw

第7話 再会と咆哮

カタロン基地付近

C Bメンバーはブトレマイオス2に残る組とカタロンに接触する組に分かれた。

カタロン接触組はV T O L機には刹那、ティエリア、スメラギ、マリナ、沙慈。

沙慈はマリナ同様カタロンに保護してもらう為である。

ガンダムはケルデム、アリオス、デステイニーである。

ティエリア「こんな場所に…よく連邦に見付からないものだ。」

ロックオン「連邦は非加盟国の多い中東にGN粒子を撒いている。

建前では、粒子効果でテロ組織の情報を遮断するつもりだが、実際は中東国家の経済活動を麻痺させるのが目的さ。連邦の言うことをきかない国は痛い目を見るってことさ。尤も、GN粒子のお陰でカタロンの施設も発見されないでいるが。」

ティエリア「詳しいな。」

ロックオン「そうかい？ 常識の範疇だよ。」

シン「…あ。」

シンはロックオンがカタロンにいた事を思い出したが、それは心の奥にしまっておく事にした。

『聞こえるか？ そちらの機体を確認した。ハッチをあける。』
刹那「了解。」

V T O L機とガンダムはカタロン基地に入った。

「これがガンダムか。」

「ああ、アザディスタンを救った英雄の機体だ。」

ケルディムを見てカタロンメンバーはそう言った。

「よく来てくれた。C B。」

「歓迎するよ。顔は見せてくれないのかい？」

ロックオン「ああ、悪かった。」

と、ヘルメットを取るロックオン。

ティエリア「我々には秘匿義務が。」

ロックオン「堅いこと言うなよ。助太刀してもらっただろ。」

アレルヤ「（反政府組織カタロン。）」

シン「……………」

アレルヤはヘルメットのサンバイザーを解除し、シンもヘルメットを脱ぎ、ティエリアも不満げな表情をしつつ、ヘルメットを脱いだ。

「……………」

そして、その光景を影で見ている『少女』がいた。

「なあなあ？ あの赤い翼のガンダム、何か悪人面じゃね？」

「ああ、確かにな。」

「お前は俺か。」

シン「悪かったな！」

三人「ヒイツ?!」

と、こんな会話が あつた事を付け加えておこう。

「会談に応じてくれて感謝する。カタロン中東支部、クラウド・グ
ラードです。」

スメラギ「CBです。自己紹介は……」

クラウド「事情は承知しています。」

シーリン「マリナ姫を助けてくださって、感謝しますわ。以後は我
々が責任をもつて保護させていただきます。」

マリナ「シーリン……。」

シーリン「CBにいたいのか？」

マリナ「あなたこそ、反政府組織に……」

シーリン「いけないこと？」

刹那「もう一人 保護を頼みたい。沙慈・クロスロード、民間人だ。
いわれなくアロウスからカタロン構成員の疑いをかけられている。」
クラウド「それは気の毒なことをした。責任をもつて保護させてい
ただこう。」

沙慈「ちよつと！ 勝手に……」

スメラギ「そうするのが一番よ。」

シン「俺達と一緒にいた方がもつと危険だ。もしかしたら死ぬかも
知れないし、此所なら安全だ。」

沙慈「……………」

シン「（しかし何だ……？ この視線。さっきから俺だけに向けられ
ている様な気がするんだけど……。）」

シンは先程から何者かの視線を感じていた。

シン「（CBの人間が物珍しいのは分かる。だけどずっと俺だけなんだよな。どういう事だ？）」

シンは思考の奥に行こうとした時、突然子供達が入ってきた。

「ねえ、何してるの？」

クラウス「コラ、勝手に入ってきたらダメだろう？」

シン「こんな所に…（あの子達じゃなさそうだな。）」

刹那「子どもが…ハッ！」

刹那は子供達を見て、昔の自分を思い出した。

刹那「まさか、カタロンの構成員として育てているのか？」

二人「えっ？」

シン「刹那？ アンタ何言ってるんだ？」

シーリン「勘違いしないで。身寄りのない子供達を保護しているだけよ。連邦が行った一方的な中東政策、その実害は、このような形で表れている。」

クラウス「尤も、資金が限られていて、全ての子供達を受け入れるわけにはいかないが。」

シン「だってさ。」

刹那「……………」

刹那の表情は堅かった。

「あ！ マリナ様だ！！ ねえ、マリナ・イスマイル様でしょう？」

マリナ「ええ。」

「私もしってる！」

「すごい！ほんとにマリナ様だ！」

シーリン「マリナ様。子どもたちの相手をしていただけるかしら？」
マリナ「ええ。」

「いいの?! じゃあこっちこっち！」

「私も〜うふふ」

子供達に手をひかれてマリナは別室へ行った。

シーリン「さすがシンボルといったところね。」

シーリンは皮肉も込めてそう言った。

クラウス「そろそろ本題に入りたいのだが、我々カタロンは、現連邦政権打倒のため…」

スメラギ「申し訳ありませんが、私たちはあなた方のように政治的思想で行動しているわけではありません。」

クラウス「ですが、あなた方は連邦と対立している。」

刹那「俺たちの敵は、連邦政府ではなく、アロウズだ。」

シーリン「政府直轄の独立部隊を叩くことは、私たちの目的と一致するのではなくて？」

クラウス「そうだと。アロウズの悪行を制するためにも、我々とともに手を取りあい…」

ティエリア「残念ながら、ここにあるMSではGNドライブ搭載型に…」

クラウス「だとしても、我々はあなたたちに協力したい。補給や整備だけでも、力になりたいのです。」

CBとカタロンの対談は、マリナと沙慈の保護と、補給と整備の了承で終わった。

シン「…とはいえ、カタロンはまだ諦めてる訳でもなさそうだな…」

シンは気晴らしにカタロン基地を歩いていた。

シン「…ん？ 刹那？」

シンは通路の向こうに刹那を見付けた。

シン「どうしたんだ？ そんな所にいて？ ……ああ、そういう事か。」

刹那の視線の先にあったのは、子供達と戯れるマリナだった。

シン「（…これが、CBが変えた世界の実情か…。だけど、CBはまた世界を変える為に戦う。こんな世界にしてしまった罪を償う為に…。）」

シンにも漸くCBの罪と償いが分かった瞬間である。

刹那「……………」

刹那は部屋に背を向け、立ち去ろうとした。

その刹那の視線の先には沙慈がいた。

沙慈「あの子供達も君達の犠牲者だ。君達が変わった世界の…。」

刹那「ああ、そうだな。」

沙慈「何も感じないのか？！」

刹那「感じてはいるさ。俺は二度と、あの中に入ることは出来ない。」

シン「……………」

沙慈「それがわかっていて、何故戦うんだ?!」

刹那「理由があるからだ。わかってもらおうとは思わない。恨んでくれて構わない。」

沙慈「刹那…クッ!」

シン「沙慈。アンタの言う、『当たり前』は俺も分かる。」

沙慈「え…?」

シン「当たり前な生活…平和…幸せ…。ずっと続くと思っていた。」
刹那「……………」

シン「けどな、戦争は、そんなものなんて一瞬で、簡単に吹き飛ばしてしまう。人の命も…。どんなにキレイに花が咲いても、人はまた吹き飛ばす。」

沙慈「あ…。」

沙慈はシンの手が強く握り締めているのを見た。

シン「けど俺も、『守る力』を求めて結局は花を吹き飛ばす側に付いたんだよな…。ハハッ、皮肉だろ?」

苦笑いを浮かべながら話すシンに沙慈が掛ける言葉は無かった。

刹那「……………」

刹那はシンの話が終わったのを確認してから立ち去ろうとした。

マリナ「刹那、待って。行ってしまうの?」

刹那「ああ。」

マリナ「その前に、一つだけお願いを聞いてほしいの。」
刹那「分かった。……………」

刹那は通路の角を見た。

刹那「其処の、何故シンだけを見ていた？」

シン「えっ…?!」

刹那は対談の時からシンだけを見ている者の存在に気付いていた。

刹那「出てこい。」

刹那は決して怒っているわけではないが、少し強い口調で言った。

シン「ちよつとそれは幾ら何でも言い過ぎだろ。」

シンは刹那を宥めるように言った。

「あれ？ もしかして『マユお姉ちゃん』？」

シン「ッ!？」

少年の言葉に驚くシン。

シン「（イヤイヤイヤイヤイヤイヤ…！　ちよつと待て俺！
此処は別世界だし、それ以前に……）」

シンは自分を落ち着かせようとて逆に落ち込んだ。

「……………」

そして、そのマユと呼ばれた人物は通路の影から出た。

シン「ッ!?!?　なっ…!?!?」

その人物を見てシンは驚愕するしかなかった。

シン「マ……ユ……?」

「お兄ちゃん……。」

シンは成長した自身の妹、マユ・アスカをただただ見つめるしかなかった。

V T O L 機

シンと刹那はV T O L 機内に戻っていた。

アレルヤ「会談は終わったかい?」

刹那「ああ、だが一つやる事が出来た。」

ティエリア「やること?」

刹那「マリナ・イスマイルを アザディスタンに送り届ける。」

アレルヤ「それって……。」

スメラギ「本当にいいのですか?」

マリナ「無理を言ってますみせん。」

スメラギ「ガンダムは使えないわよ。万が一発見されれば、アザディスタンに危害が及ぶ可能性があるわ。」

刹那「この機体を使わせてもらう。ガンダムでトレミーへ。」

スメラギ「分かったわ。」

ティエリア「何ならそのまま帰ってこなくてもいい。」

剎那「バカを言うな。」

アレルヤ「この4年間に何があったんだい？ 君が冗談を言うなんて。」

ティエリア「本気で言ったさ。」

アレルヤ「え？」

ティエリア「冗談だよ。」

アレルヤはスメラギを見たが、スメラギも分らないと手を広げた。

剎那「シン、お前も何か言う事はあるんじゃないのか？」

シン「えっ？……ああ……。」

アレルヤ「？ シン？」

アレルヤは妙に元気の無いシンを気にした。

スメラギ「どうしたの？」

剎那「シンの世界から来た者がカタロンに保護されている。」

皆「えっ？」

アレルヤ「それって……。」

剎那「それも、シンの妹だ。」

シン「剎那……。」

スメラギ「分かったわ。で、シン、あなたはどうしたいの？」

シン「俺は……。」

シンは迷った。

何よりも大切な妹のマユが生きていたのだ。

これで喜ばないわけはなく、シンは内心喜んでいたのだ。

だが、マユと再会したシンは、何故か動揺してたのだ。

しかもあの場から逃げる様に立ち去ったのだ。

それは何故か。答えは簡単で、シンはCBのガンダムマイスターと

しての覚悟を決め、CBの罪と償いを理解したからだ。
CBの行いはテロであり、シンもそれを理解しない訳がなかった。
だからこそ、テロリストとして世界と戦う自分の事を言えば、確実に傷付く事は間違いない。

最悪、二度と口を聞いてもらえないかも知れない。

シンはそんな思考の渦に飲み込まれていた。

スメラギ「……………」

スメラギはそんなシンに近付き――

バチンッ！

シン「ッ！？」

シンをはたいた。

シン「えっ?! 何を!?!」

スメラギ「あなたは男でしょ? クヨクヨしないで全部言いなさい。」

シン「スメラギさん…?」

ティエリア「例え嫌われても、『守る者』が出来ただけ、良いじゃないか。」

シン「…あ!」

シンはどうしてそんな事を思い付かなかったのか、と思った。

シン「分かった。有難うティエリア。」

ティエリア「ああ、どうも。」

こうしてシンは必ず帰艦するという条件でもう暫くの間カタロン基地にいる事にした。

スメラギ「あ…あれ？ 私は？」

ティエリア「どうやら意味はあまり無かったみたいだな。」

スメラギ「ムウ。」

アレルヤ「子供じゃないんですから頬を膨らませないでください。」

ティエリア「ハア…、これだからダメおばさんは…。」

スメラギ「だーれーがおばさんですってえ?!」

アレルヤ「スメラギさん落ち着いてください！ ティエリアも余計なこと言わないで！」

ティエリア「フツ、悪かったな。」

アレルヤ「ハア…。もうそろそろ行きますよ?」

スメラギ「…分かったわ。」

アレルヤ「(ホント、どうしたんだろう…? ティエリア…)」

VTOLE機とケルデймとアリオスは、カタロン基地から発進しようとした。

シーリン「あら、あなたは行かないの？」

シーリンはシンに話し掛けた。

シン「いえ、もう少し此処にいます。」

シーリン「そう。ところでマリナ姫を見かけなかったかしら？」

シン「マリナさんならVTOLE機でアザディスタンに戻るみたいです。」

シーリン「…えっ?! じゃあ早く発進を止めさせて!」

シン「無理ですよ。あの人は本気です。」

シーリン「何…?」

シン「あの人は自分の事よりアザデイスタンの事を第一に思っていますから。」

シーリン「マリナ…。」

シーリンはカタロン基地から飛び立つVTOL機を見た。

シン「（ホント、『あのバカ』も見習って欲しいな。まあ、もう死んでるけどな。）」

シンはそう心の中で言っただけでカタロン基地の奥に行った。

シンはマユに元いた世界での2年間と、この世界での4年間を包み隠さずに話した。

マユ「そう…なんだ…。」

そう言っただけでマユは俯いた。

シン「……………」

シンは覚悟は出来ていたとはいえ、これはキツイと思った。

シン「（嫌われるかな…？）」

シンはそんな事を思っていた。

マユ「でも、やっぱりお兄ちゃんはお兄ちゃんなんだね。」

シン「えっ…？」

マユは笑いながら言った。

マユ「だって、マユの事をずっと思ってくれてたんでしょ？」

シン「ああ。」

マユ「じゃあ次はマユの番だね。」

マユはこの世界に来てからの事を話した。

今から2年前にこのカタロン基地の付近でカタロンメンバーによって発見された事、発見された当時は連合軍のオーブ進攻時に受けた傷が残ったまま転生されたくしく、右腕は切断されたままだった。

シン「2年前ってことは、14歳（連合軍によるオーブ進攻時の年齢は12歳に設定）になったのか。…て、何で右腕が治って…ああ、再生治療か、義手か。」

マユ「うん、マユは気を失ってたから分かんなかったけど、凄い技術なんだね。あ、義手の方だけだね。」

シン「そうか…。」

シンはマユをそっと抱き締めた。

シン「大きくなったな…マユ。」

マユ「お兄ちゃんも凄く大きくなったね。」

シン「悪いけど、21歳だ。」

マユ「本当は2歳差なのに7歳も離れちゃってるね。」

シン「ああ、そうだな。」

シンはマユの頭を撫で、そして、兄妹は暫しの間、お互いの温もり

を確かめ会う様に抱き締めあった。

マユ「お兄ちゃん…行っちゃうの？」

シン「ああ、そうだ。」

シンはヘルメットを被りながらそう言った。

シン「俺はC Bのガンダムマイスターだ。…C Bが昔やってた事は知ってるな？」

マユ「うん。…えっ？　もしかしてお兄ちゃん…」

シン「いや、さっきも言ったけど俺はC Bが壊滅した後はこの世界に来了。だけど生きる為にC Bに入り、戦う事を決意した。世界を変える、これがC Bの罪であり、償いでもある。俺はこれを知り、背負う事を決意した。例え俺が死んでもマユが幸せにできる世界にする。これが俺が出来る事だ。」

マユ「お兄ちゃん…。」

シン「フ、またな、マユ。クラウドさん、頼みましたよ。」

クラウド「ああ、安全は保証する。」

シンとクラウドは握手をした。

そしてシンは腫を返し、デステイニーに向かった。
その時だった。

「アロウズのMS隊だ！」

シン「何だつて!？」

クラウド「ここを叩きにきたのか?!」

「敵の数は?!」

クラウド「どこから基地の情報が…？」

シン「クソッ！ 水差しまくりだろ！ アロウズ！」

シンはデステイニーのコクピットに乗り込み、プトレマイオス2に緊急暗号通信を送った。

シーリン「急いで子どもたちをシェルターに。」

「は、はい。」

クラウド「マユちゃん、君も早くシェルターに。」

マユ「は、はい。」

マユはシェルターに向かった。

シン「チッ、こうなったら…！」

デステイニーはGNバスターランチャーを展開した。

シン「迎え撃つだけだ！」

シンはGNバスターランチャーのチャージを開始した。

シン「全員、吹き飛ばされなくなったら退避してください！」

シンはカタロンメンバー達にそう呼び掛けた。

クラウド「…ハッ！ 全員、ありったけの煙幕を用意しろ！ 早く！」

クラウドは大量の煙幕をカタロンメンバーに要請した。

ドガアアアアアアアアアアンツッ!!!

「敵基地と思われる構造物を視認しました。」

とカタロンの基地の破壊を報告するアンドレイ・スミルノフ。

「…可笑的い…。」

アヘッドスマルトロフ脳量子波対応型に乗るソーマ・ピーリスが呟いた。

アンドレイ「…？ 煙が消えない？」

「どついう事だ？」

「まさか煙幕？」

アンドレイ「！」

「チッ、待ち伏せか逃げる気かは知らんが、ここで叩く。」

と、2機のジンクス？がカタロン基地に向かった。

ソーマ「待て！ 中の様子も分からないまま近付くのは…！」

ソーマの忠告を聞かないまままジンクス？はカタロン基地に向かい、GNランスの銃口を向けた。

ドウンッ！…！

すると煙幕の中から極大の『桃色』のビームが放たれ、2機のジン

クス？を中破させた。

アンドレイ「なっ…何だ?!」

ソーマ「ハッ!? アレは…!」

ソーマはビームで穿った煙幕の間から『あるもの』を見付けた。

「…デステイニーガンダム、シン・アスカ、『目標を薙ぎ払う』ッ
!」

シンはそう咆哮し、デステイニーは飛翔した。

「が…ガンダム!？」

「待ち伏せされた?!」

シン「うおおおおおおッ!!!」

「クソッ! 墜ちろ!」

シン「当たるか!」

デステイニーはジンクス?の攻撃を躲し、すれ違い様にGNバスターソード改で真っ二つにした。

「そ…そんな…!？」

ドガアアアアンッ!!

更にデステイニーはそのままもう1機のジンクス?も切り捨てた。

アンドレイ「クッ! 中尉はガンダムを!」

ソーマ「了解!」

アヘッドスマルトロンはデステイニーに迫った。

シン「アヘッドのカスタム機…！？ 乗っているのはエースパイロットか！」

実際は脳量子波対応型に改修した機体の為、シンの知るものとは違うが、パイロットのソーマは超兵としての高い能力を持つ為、そこまでの違いはない。

ソーマ「ガンダム！」

シン「だけど！」

デステイニーとアヘッドスマルトロンは、激しい攻防戦を繰り広げた。

先ずはビームライフルで牽制し、ビームサーベルとバスターソード改がぶつかり合う。

後はバルカンでの牽制と剣を交互に使った。

「流石は超兵、ガンダムと戦えている。」

オートマトンを搭載したアヘッドはカタロンのMSを撃破しつつ、カタロン基地に向かった。

「オートマトン射出。」

そして、アヘッドからオートマトンが射出された。

ピピッ

シン「ッ！？ まさかアレは…」

ドガァッ！

シン「うぐっ？！ 新手！？ クソッ！！ 皆は！？」

デステイニーはアヘッドスマルトロンと増援の2機のジンクス？に苦戦した。

シン「クッ！ あのカスタムアヘッド、ただ者じゃない！ だけど！！ 俺は！！」

デステイニーはアヘッドスマルトロンに迫った。

シン「（…？）」

だが、シンはアヘッドスマルトロンの動きが先程より動きが鈍い事に気付いた。

シン「（何だ…？ 何で動きが…）」

ドウンッ！

突如戦場に一筋のビームが横切った。

シン「！ このビームは！」

シンはそのビームが来た方を見た。
其処には、ケルディム、アリオス、セラヴィーがいた。

アレルヤ「シン！」

ティエリア「アロウズ！」

ロックオン「ここは俺が！」

ケルディムはカタロン基地に向かった。

ロックオン「ハッ！？」

其処には、オートマトンがカタロンに対し、虐殺を開始していた。

ロックオン「これが…こいつが！ 人間のやることか…！」

ケルディムはスナイパーライフル2を投げ捨て、GNビームピストル2でオートマトンを破壊した。

アレルヤ「無人兵器による、虐殺行為。自ら引き金を引こうとしないなんて、罪の意識すら持つ気がないのか？！」

アリオスはGNビームシールドとクロー形態にし、ジンクス？を挟み、そして真つ二つにした。

「うわあああああ…！！…？」

そして爆散するジンクス？。

ティエリア「ダブルバズーカ、バーストモード…！」

セラヴィーはGNバズーカ？を合体し、GNキャノン4門と同時使用によって巨大な球状の粒子ビームを発射し、ジンクス？を飲み込んだ。

「初期目標は完遂した。撤退す――」

ダウンッ！　ダウンッ！

「ッ！？」

シン「逃がすかよー！」

オートマトンを搭載していたアヘッドにデステイニーが迫った。

「チー！」

アヘッドはGNビームマシンガンでデステイニーを攻撃した。

シン「そんな攻撃！」

デステイニーはGNビームシールドで防御しつつ、GNビームライフルを腰にマウントし、GNバスターソード改を背中から抜き取った。

「やるか！」

アヘッドも左手でGNビームサーベルを引き抜いた。

シン「はああああああああッ！――！」

「うおおおおおおおッ！――！」

デステイニーはGNバスターソード改を降り下ろし、アヘッドはGNビームサーベルを振り上げた。

ガキンツッ!!

アヘッドはデステイニーのGNバスターソード改を弾き飛ばした。

「よし!…ッ!?!」

だが、デステイニーはそのままのスピードでアヘッドに迫り――

ガギッ!!

「ぐあっ?!」

デステイニーの左手の指先がアヘッドの胴体に突き刺さった。

「GNクロー!?!」

ガンダムにもGNクローが装備している事に驚く兵士だったが、デステイニーにとってGNクローは『本命への繋ぎ』ではない。
では、その本命の武器は――

シン「GNハンドバスターッッ!!!!」

デステイニーの掌底からビームが放たれ、アヘッドの胴体を貫いた。

「な…んだ――」

ドガアアアアアアアアンッッ!!!

アヘッドは爆散した。

ソーマ「こ…これは…?!」

ソーマは周囲の戦闘を見向きもせず、眼下の光景を見ていた。その光景とは、カタロン基地で虐殺を行うオートマトンと、それを破壊するケルディムだった。

ソーマ「あっ…はっ！」

ソーマはケルディムがこちらを狙っているのに気付いた。

ロックオン「許さねえ、許さねえぞ！ アロウズッ！！」

ソーマ「クッ…！」

アヘッドスマルトロンはケルディムの攻撃を躲し、撤退した。

ロックオン「逃げんなよ…！！ 逃げんなよ！！ アロウズウウウウウッッ…！！」

ロックオンはそう咆哮し、ケルディムはGNビームピストル2を乱射した。

シン「！ これは…！」

シンはGNビームピストル2を乱射するケルディムの背後の光景を見た。

シン「これは酷過ぎる…。奥までは行っていないみたいだけど…！」

シンはマユの安否を確認する為にカタロン基地に降りた。

スメラギ「酷い…。ああ…。」

アレルヤ「これが…アロウズ。」

ティエリア「そうだ。あれが、我々の敵だ。」

シン「絶対に倒さなければならぬ…。！」

C Bメンバーはアロウズの脅威を改めて認識した。

第7話 再会と咆哮（後書き）

「よく来てくれた。C B。」

「歓迎するよ。顔は見せてくれないのかい？」

ロックオン「ああ、悪かった。」

と、ヘルメットを取るロックオン。

ロックオン「…あれ？ ヘルメット取れねえわ。」

ティエリア「…バーカ。」

シン「ティエリア!？」

take?

「よく来てくれた。C B。」

「歓迎するよ。顔は見せてくれないのかい？」

ロックオン「ああ、悪かった。」

と、ヘルメットを取るロックオン。

ツルンッ

ロックオン「…ハッ?!」

シン「ツルツルだな、頭!」

ロックオン「俺だって苦労してんだよ!」

シン「…すみませんでした!。」

ティエリア「因みに北欧の男性はハゲ率が高い。」

アレルヤ「へえ。」

シン「うおおおおおいッッ!？」

ロックオン「いや、別にハゲてたってそんなに気にしてないし。」

シン「じゃあ何でカツラ着けてんだよ?!」

ロックオン「……………」

シン「黙るな!」

「オートマトン射しゅ——」

ダウンッ!

「な——」

ドガアアアアアアアアンッ!!!

皆「えっ…?」

シン「はっ?」

ロックオン「フウ…! 間に合ったぜ。」

シン「いや、間に合っちゃダメだろ!! 世の中そんな甘くねえ!
!」

ロックオン「アンタの妹さんが殺されてもいいのかい?」

ティエリア「いや、話の流れで殺されないから何ら問題はない。」

アレルヤ「えっ?」

シン「何のネタバレだあああああッッ!!!???」

第8話 決意の瞳（前書き）

タイトルが…

そんな事より、今回は一気に投稿したいと思います。

第8話 決意の瞳

カタロン基地

シン「マユ!」

マユ「お兄ちゃん!」

シン「ハア…、良かった。無事だったか。」

マユ「お兄ちゃん、外は一体どうなっているの?」

シン「いや…、外は…。」

シンは目線を逸らして言った。

シン「兎に角、子供達をシェルターから出さないで下さい。」

「はい。」

シン「またな、マユ。」

マユ「…うん…。」

シンはシェルターから出た。

マユ「……………」

だが、マユの決意を込めた表情に気付く者は誰もいなかった。

シン「…ん?」

シンは通路の向こうにティエリアに連れられている沙慈を見付けた。

シン「ティエリア？　沙慈？　どうしたんだ？」

シンはティエリア達の後を追った。

シン「……………」

シンは通路の影に隠れてティエリア達の話盗み聞きする事にした。

シン「…………えっ！？」

だが、沙慈が話した内容は、シンを驚愕させるには十分すぎた。
沙慈が話した内容とは、連邦軍にカタロンの情報を話したらそれが
アロウズに流されたという事だった。

そして自分は連邦軍の人間に逃がしてもらったという事だった。

シン「（それじゃ…あれは、まさ…か…！？）」

シンはあのアロウズによる攻撃の一端に沙慈が関わっていた事にた
だただ驚くしかなかった。

パチンツ！

シン「！」

シンは何かをはたく音がしたため、思わず通路の影から出たら、テ
ィエリアが沙慈をはたいていた。

シン「ティエリア…。」

ティエリア「なんという…なんという愚かなことを。」

ティエリアは一瞬視線をシンの方に向けたが、直ぐ様沙慈を見た。

沙慈「こんなことになるなんて 思ってた。僕は、戦いから離れたかっただけで…こんなことに…そんな…僕…」

ティエリア「彼らの命を奪ったのは君だ。」

沙慈「はっ！」

ティエリア「君の愚かな振る舞いだ。自分は違う、自分には関係ない、違う世界の出来事だ。そういう現実から目を背ける行為が、無自覚な悪意となり、このような結果を招く。」

沙慈「僕は…そんなつもりじゃ…ああっ！」

沙慈はその場に座り込んで泣き伏せた。

シン「沙慈…。」

シンも沙慈と似たような峡中だった。

戦争など対岸の火事と思っていた、中立国オーブでの生活。

だが、それが連合軍によるオーブ侵攻によって全てが崩れ去った。

そして、ザフトに入ってから戦いの日々。

シン「…ククッ。」

ティエリア「シン？ どうした？」

シン「いや、俺も沙慈と似たような感じだったからな。それがどうだ、戦争に巻き込まれて、そして軍人になった。そういう自分を笑っただけだ。」

そこへ刹那が来た。

刹那「ティエリア。」

ティエリア「刹那。」

刹那「どういうことだ？ あれは。」

ティエリア「アロウズの仕業だ。そしてその原因は彼にある。」

ティエリアは泣いている沙慈を見た。

刹那「沙慈・クロスロード。」

V T O L 機

シン「で、マリナさんは送り届けたんですか？」

刹那「いや、アザデイスタンが攻撃を受けていたから戻った。」

シン「えっ…？」

ティエリア「アザデイスタンが攻撃を受けたと？ 連邦のしわざか？」

刹那「わからない。だが、攻撃に加わっていたM Sの中にガンダムがいた。」

ティエリア「ガンダムが？」

刹那「恐らく、あの機体は…」

ピピッ

アレルヤ「ん？ 通信？」アレルヤは通信を入れた。

アレルヤ「スメラギさんが倒れたらしい。」

ティエリア「何？」

シン「スメラギさんが？」

刹那「何があった？」

アレルヤ「わからない。トレミーへの帰投命令がでている。」

刹那「わかった。戻ろう。」

ティエリア「君もこい。ここにいたら、何をされるかわからないからな。」

ティエリアは沙慈にそう言った。

沙慈「……………」

沙慈は終始無言だった。

そしてプトレマイオス2に帰艦するVTOL機。

プトレマイオス2

ブリッジ

アレルヤ「スメラギさんの容体は？」

ラッセ「まだ目覚めていない。」

フェルト「もう暫く安静が必要かも。」

シン「そうか…。」

ロックオン「カタロン側の状況は？」

ミレイナ「モニターに出します。」

ミレイナはカタロンの状況をモニターに出した。

ミレイナ「カタロンさんたちの移送開始は、予定通り1200でおこなわれるです。」

ロックオン「アロウズは来るぜ。まちがいなくな。」

ティエリア「わかってる。」

刹那「ガンダムを出す。」

シン「それしかないな。」

アレルヤ「しかし、戦術は？ スメラギさんが倒れたこの状況では

……」

ラッセ「それでもやるしかないだろ。トレミーを海岸線にむける。

敵さんに見付けてもらわなきゃな。」

ミレイナ「了解です。」

フェルト「プトレマイオス、発進。」

プトレマイオス2はカタロン基地から発進した。

「……………」

だが、密かにプトレマイオス2に潜入した者の存在に気付くことな
く……

フェルト「光学迷彩、解除します。」

ミレイナ「監視衛星による、捕捉予定時間は約0037です。」

ラッセ「総員、第一種戦闘態勢！」

マイスター達「了解。」

マイスター達は格納庫に向かった。

シン「ん？」

シンは反対側の通路の影に何か人影の様な物が視界の隅に一瞬見えた。

アレルヤ「どうしたんだい？」

シン「いや、気のせいみたいです。」

シン達は再び格納庫に向かい、ガンダムに乗り込んだ。

ラッセ「そろそろこっちに気づいた敵さんがやってくる頃だ。ガンダムを出すぞ。」

ミレイナ「第1、第2デッキ、ハッチオープンです。」

フェルト「セラヴィー、アリオス、発進準備。リニアカタパルト、ボルテージ上昇。射出タイミングを、セラヴィーへ譲渡します。」

ティエリア「了解。セラヴィー、ティエリア・アーデ、いきます。」

セラヴィー発進。

アレルヤ「（脳量子波がなくても…。）」

ミレイナ「ユーハブコントロールです。」

アレルヤ「アイハブコントロール。アリオス、アレルヤ・ハプティズム、迎撃行動に入る。」

アリオス発進。

フェルト「続いて、ケルディム、デステイニー、及びダブルオー、スタンバイ。」

ロックオン「ハロ。今日は本気モードでいくぜ。」

ハロ「了解、了解。」

フェルト「リニアシステムクリア。射出タイミング、譲渡します。」
ロックオン「ケルデーム、ロックオン・ストラトス、狙い撃つ！」

ケルデーム発進。

シン「（マユ…俺は戦う。どんなに矛盾していても、争いの無い、平和な世界にする為に…！）」

フェルト「射出タイミングをデステイニーに譲渡します。」

シン「了解、デステイニー、シン・アスカ、目標を薙ぎ払う！」

デステイニー発進。

シン「（オーブを脱出する時を思い出す…。いや、そんな事よりも目の前の敵を倒す！）」

シンは目の前の光景に目をやった。

シン「アロウズ…！」

艦艇から次々と発進するアロウズのMS。

シン「アンタらがその気なら！」デステイニーはGNビームライフルを敵MS隊に向け――

シン「薙ぎ払うまでだッ…！」

発砲した。

アロウズのMS隊も発砲を開始し、戦闘は開始した。
セラヴィーはGNバズーカ？でジンクス？のGNランスでの攻撃を受け流し、膝のGNキャノンで撃破した。

その直後にもう1機のジンクス？の格闘攻撃がセラヴィーに襲い掛かるが、GNフィールドで防ぎ、GNバズーカ？で撃破した。

ハロ「命中！ 命中！」

ロックオン「言ったる？ 本気モードだつ、て。」

ケルディムはジンクス？を撃破し、更に畳み掛けた。

シン「クツ！ かなりやる！ だけどー！」

デステイニーはジンクス？をGNビームブーメランサーベルモードで撃破した。

シン「俺にもな、『守るもの』があるんだよー！」

デステイニーは別の敵MSに攻撃した。

アレルヤ「この感覚…！？」

ソーマ「被検体E-57！」

アレルヤ「まさか？ うっ…マリーなのか？！」

アリオスとアヘッドスマルトロンとの戦いは、アレルヤの躊躇によってアヘッドスマルトロンの攻勢だった。

そして、戦況が変わる。

ミレイナ「ダブルオーに向けて突進してくる機体があるです！ とんでも速いです！」

刹那「あの新型は！」

ダブルオーはその新型——アヘッドサキガケに射撃攻撃をした。

「射撃もつまくなった…！」

刹那「うおおおッ！！」

「それでこそだ！ 少年！」

ミスター・ブシドーの乗るアヘッドサキガケの斬撃がダブルオーを襲う。

バチイイイイツッ！！！！

ダブルオーは斬撃を受け止め、アヘッドサキガケに蹴りを入れた。だが、アヘッドサキガケもダブルオーに蹴りを入れた。

刹那「クッ！」

シン「刹那ッ！」

ドガッ！

シン「ぐつつ！？ チッ！ 今は助けるどころじゃないか！」

デステイニーは敵MSに攻撃した。

「甘い！」

バラック・ジニンの乗るアヘッドはセラヴィーの攻撃を躲し、逆に反撃をした。

ティエリア「さすがアロウズ、手練れが多い！」

ブシドー「ううおおおおあああッッ!!!!」

アヘッドサキガケはダブルオーを圧倒していた。

ブシドー「歯応えが無い！」

刹那「クッ！」

ブシドー「手を抜くか、それとも、私を侮辱するかッ！」

アヘッドサキガケはダブルオーのGNシールドを斬った。

刹那「このままではッ！」

ブシドー「ガンダムッ!! 引導を渡すッッ!!!!」

アヘッドサキガケはダブルオーにGNビームサーベルを降り下ろした――

第9話 折れた翼（前書き）

これもタイトルが…w w（自分に笑う）

第9話 折れた翼

アレルヤ「やめてくれ！ マリー！ 僕だ！ アレルヤだ！」
ソーマ「私は、超兵だ！」

アレルヤは自らの躊躇とハレルヤ消滅による脳量子波の欠如により、苦戦を強いられた。

ソーマ「はああああッッ！！！」

そして、アヘッドスマルトロンのGNビームサーベルによる一撃は、アリオスのGNツインビームライフルと右腕を斬り、アリオスの右胸に突き刺さった。

アレルヤ「ぐわっ！ マ…マリイイッ！！！」

アリオスはその状態で左手を伸ばし、アヘッドスマルトロンに組み付いた。

アレルヤ「もう離さない！…マリーッ！！！」
ソーマ「コイツ…ッ！」

そして、そのまま落下した。

ブシドー「ガンダムッ！！ 引導を渡すッ！！！！」

アヘッドサキガケはダブルオーにGNビームサーベルを降り下ろした――

ブシドー「ッ！？」

だが、アヘッドサキガケの斬撃は空を切った。

ブシドー「ハッ！？」

アヘッドサキガケは遠方からきた粒子ビームをGNビームサーベルで防いだ。

ブシドー「これは…！！」

其処には、トランザムによって紅く輝くダブルオーがあった。

ブシドー「そうだ…！！ これとやりたかった！」

ブシドーはそう叫び、アヘッドサキガケはGNビームサーベルを振った。

ブシドー「ッ！？」

だが、またしても空を切り、トランザムダブルオーはアヘッドサキガケの背後を取った。

ブシドー「おおおおああああッッ！！！！」

アヘッドサキガケは背後のトランザムダブルオーに斬撃を繰り出そうとした。

ザンツ…！

トランザムダブルオーはアヘッドサキガケの左腕を切り落とした。

ブシドー「なっ！　これ程とは！」

刹那「貰ったッ…！」

そして、トランザムダブルオーはGNソード？を振りかざし――

ボンッ！

だが、そこでGNドライブのGNバーニアから煙が吹き出た。

刹那「何っ？　オーバーロード？！」

そしてそのままダブルオーは海に墜落した。

シン「落ちた！？」

ブシドー「なんと…、機体が万全ではないとは…。」

刹那「はっ！」

アヘッドサキガケは右手でGNショートビームサーベルを持ち、ダブルオー突き付けた。

シン「せ…刹那ッ…！」

デステイニーはジnkクス？をGNバスターソード改で真つ二つにし、ダブルオーの所に向かった。

ブシドー「ならば斬る価値もなし！」

アヘッドサキガケはGNショートビームサーベルを納め、飛び去った。

シン「逃げた？ 何なんだアイツは…？ いや、刹那！」

デステイニーはダブルオーの所に向かった。

ティエリア「刹那！」

セラヴィーもダブルオーの所に向かった。

ティエリア「刹那、大丈夫か？！」

刹那「ツインドライヴが…」

シン「何だつて？！ハッ！アロウズ！」

ガンダム各機は向かってくるアロウズのMS隊に対して身構えた。と、そこに

『ガンダム全機、後退して！』

刹那「あっ…！」

シン「スメラギさん？！」

ティエリア「スメラギ・李・ノリエガ。」

倒れていたスメラギが目を覚めたのだ。

スメラギ「敵の連携を分断させるわ。魚雷で高濃度粒子とスモークを。」

ラッセ「おやっさん。」

イアン「了解だ！」

ブトレマイオス2から魚雷が発射した。

魚雷は海中を進み、そしてガンダムの前で海上へと飛び上がり、爆発して高濃度粒子とスモークを撒き散らした。

シン「……………」

デステイニーはGNビームライフルとGNビームブーメランサーベルモードを持ち、構えた。

そして、アロウズは撤退した。

イアン「撤退したのか？」

ラッセ「どうやら。」

シン「ハア……。何とか終わったか……。」

ホツとするシン達だが、次の瞬間、驚愕に変わった。

フェルト「アリオスの機体を捕捉できません！」

シン「なっ!？」

ティエリア「アレルヤが！」

刹那「なんだと?!」

スメラギ「アリオスの反応がないですって？」

スメラギは医務室から出て、ブリッジに入ってきた。

フェルト「スメラギさん！」

ラッセ「体は？」

スメラギ「ミッションレコーダーでアリオスの交戦ポイントを特定して！ デステイニーはダブルオー収容後に待機、セラヴィーとケルディムはアリオスの搜索を。」

フェルト「りょ…了解。」

こうして、アリオス搜索は始まった。

「……終わった…かな…？」

そう言つて、声からだろうか、少女はプトレマイオス2の通路で周囲を見回した。

「やっぱり隠れて入ったのはいいんだけど…、ここ、何処なんだろう…？」

少女はプトレマイオス2で迷子になっていた。

「…ハア…。もう疲れた…。ちょっとあの部屋を借りようっと。」

少女は部屋に入った。

「……ん？ 開いてる？」

少女は引き出しが開いてるのを見付けた。

「……………」

少女は最初は見ないフリをしようとしたが、やはり好奇心には勝て

ず、引き出しの中を覗いた。

「…あれ？」

少女は引き出しの中に『ピンク色の携帯電話』を見付けた。

「これって…？」

少女はその携帯を取り出した。

「…もしかして…これ……」

プシュー

「！！？」

ドアの開く音がしたため、少女は酷く驚き、ドアの方を見た。
そこには…

シン「……………」

そう、その部屋はシンの自室であり、そのピンクの携帯はシンが持っている物である。そして、その携帯を持っている…いや、プトレマイオス2に入ってきた少女は――

シン「ま…マユ…？」

そう、シンの妹のマユである。

マユ「お…お兄ちゃん…！」

シン「何でこんな所にいるんだああああああッッ！！」
「!?」

シンの絶叫がプトレマイオス2中に響いた。

ブリッジ

ブリッジは現在、恐ろしいオーラに包まれていた。

「……………」

誰も言葉を発しようとしなない。否、何も言えないのだ。
その恐ろしいオーラを発しているのがシンであり、その視線は、補
助席に座らしているマユに向けられていた。

シン「…で？ 何でこのトレミーに入ってきた？」

マユ「……………」

ミレイナ「あ…アスカさん、怖いですう。」ボソッ

ラッセ「これじゃ、搜索どころじゃねえな。」

スメラギ「ハア…、どうしてこうなったのかしら…。」

フェルト「気付かなくすみませんでした。」

ラッセ「それは今言う事じゃねえだろ。」

シン「どうして入ってきたって言ってるんだ。」

マユ「……………」

シン「俺は…俺達C Bはな、何時終わるのかも、先に死ぬかも分か

らない戦いをしているんだ。そんな所でお前を保護してられないんだよ。カタロンに連絡を入れて引き取らせてもらっ。此処よりカタロンの方が安全だ。だから……」

マユ「……マユはね……」

シン「ん？」

マユ「お兄ちゃんと一緒にいたいんだもん……」

シン「なっ……?! いや、そんな理由でかよ?! そんなもん、アロウズを叩いたら幾らでも——」

マユ「だって!」

シン「ッ!？」

マユ「だって、お兄ちゃんだけなんだよ……? 『この世界』でただ一人の家族なの……」

シン「!……!」

マユ「だから……せめて側に居させて……!」

マユは両手でシンの手を握った。

シン「……………」

シンは何故か何も言えなかった。
何故なら、シンもマユと同じ思いだからだ。

シン「ああ……」

この瞬間、シンは自らの敗北を認識した。

シン「ハア……分かった。俺の負けだ。」

マユ「え?……あつ。」

シンはマユの頭を撫でた。

シン「いいですね？ スメラギさん。」

スメラギ「ええ。そのかわり、しっかり守ってくれると助かるわ。」

シン「はいはい、分かりましたよ。」

シンは苦笑いをしながらそう言った。

マユ「お兄ちゃん…。」

シン「と、いうわけでマユ、改めて宜しくな。」

マユ「うん！」

兄妹は微笑みあった。

ラッセ「やれやれだな。」

ピピッ

フェルト「ケルディム、帰艦します。」

ロックオン「シン、交代だ。」

シン「了解しました。」

マユ「あ…。」

シンはマユの頭を撫で、ブリッジを出た。

フェルト「第1、第2デッキ開放。ケルディム、着艦準備。デステイニー、発進準備。リニアカタパルト、ボルテージ上昇。射出タイミングを、デステイニーに譲渡します。」

シン「了解、デステイニー、シン・アスカ、出る！」

デステイニーはケルディムと交代してアリオス搜索に向かった。

マユ「お兄ちゃん…。」

マユは彼方へと飛んで行く緑色の光を見つめた。

シン「アリオスの反応は確かこの辺りで消えたんだよね？」

デステイニーはアリオスの反応が消えた辺りを搜索していた。

シン「兎に角、アレルヤさんだけでも見付け出さないと…。」

ピピッ！

シン「何？ あれは…！」

シンは連邦軍仕様のジンクス？を見付けた。

シン「正規軍？ アロウズじゃないのか？」

そのジンクス？はデステイニーを見付けると、両手を上げ、光通信を送った。

シン「光通信！？……ッ！ これは…！？」

シンはジンクス？から送られた情報を見て、驚いた。

シン「アリオスの場所……?! これは一体……?」

シンはすれ違い、空の彼方へと飛んで行くジンクス?の背中を見た。
気のせいだろうか、機械でありながらその背中中は寂しく見えた。

シン「……………」

シンはデステイニーを飛ばしつつ、そのジンクス?を見続けた。

シン「……さて、行きますか。」

デステイニーはジンクス?の情報を元にアリオスの場所に向かった。

ピピッ

シン「ッ! アリオスを発見しました!」

情報通りの場所にアリオスはあった。

シン「生体反応は……」

ピピッ

シン「あ! アレルヤさん……って、はいiiiiiiiiッ!?!?」

シンは思わずシートから身を乗り出してモニターを凝視した。
其処には、アレルヤと女性——マリーがキスをしていたのだ。
そして、この様子を見たプトレマイオスクール達とはいうと

ミレイナ「おお〜! なんか彼女さんといっしょみたいですう〜!」

ラッセ「か、彼女?!」

フェルト「どうして?!」

スメラギ「あの子ったら何やってるのよ!」

マユ「?????」

ロックオン「なんだあ? 散々捜し回らせといて、女連れか? は

はっ、やるじゃないの。」

スメラギ「そんな問題じゃないでしょ!」

ロックオン「おお?!」

シン「てか、これ、どうすりゃいいんだし。」

シンは眼下の光景を見ながらそう呟いた。

第10話 宇宙（そら）へ（前書き）

最後の辺りを少し弄りました。

第10話 宇宙（そら）へ

プトレマイオス2

デステイニーはアリオスを回収し、修復が行われていた。

ラッセ「あのマリーって子、超人機関出身なんだろう？ 船に乗せて大丈夫なのか？」

スメラギ「一通りのチェックは済ませたわ。それに、アレルヤには必要なの。」

ラッセ「何が？」

スメラギ「戦うための…理由が…。」

シン「まあ、何にしても何かしらの理由はないと戦いなんてやってられませんからね。」

ラッセ「まあ、そうだけだな。」

シン「ま、色んな意味で俺が言うセリフじゃないけど、随分と賑やかになりますね。」

ラッセ「ホント、そうだな。」

シン「じゃ、ちょっと失礼します。」

シンは部屋から出た。

シン「…ん？」

シンは話し声が聞こえたのでその方向に向かった。
そこには、仲良く喋っているマユとミレイナがいた。

あの後、直ぐ様仲良しになったのだ。

シン「やれやれ、…まあ、ああいうのも必要か。」

そう言つてシンは邪魔しないように彼女達の横を通ろうとしたら、ミレイナはドアに入り

ミレイナ「つかぬことを聞くですう。二人は恋人なのですか？」
シン「は？」

ミレイナがそんなことを言うから、シンはドアの向こうを見た。
そこには顔を赤らませているアレルヤとマリーがいた。

ミレイナ「おおー！ 乙女の勘が当たったですう。」

シン「ハア…。」

マユ「ハハ…。」

ミレイナのそんな行動にシンは溜め息を吐き、マユは苦笑するしかなかった。

ミレイナ「ああ、そういえばまだマユちゃんにトレミーの案内をしてる最中でした。という訳で行くですう。」

マユ「あ…うん、またね、お兄ちゃん。」

シン「あ…ああ…。」

マユはミレイナと一緒にプトレマイオス2を周りに行き、シンは手を振った。

シン「…ん、あ、失礼しました。」

シンはアレルヤ達に手を振り、部屋から去った。

「まさかこの僕がアロウズ入隊することになるとは。」

その頃のアロウズには補充人員として『イノベーター』のリヴァイ・ブ・リバイバルとイノベーターが開発した新型MS、ガデッサと――

コーラサワー「大佐~~~~！ 来ちゃいましたあ~~~~！」

パトリック・コーラサワーがアロウズに入った。

『中東再編計画は、完全統一を目指す地球連邦政府にとって当面の最重要課題です。民族的、宗教的に対立する国家間は、連邦軍によって国境線を確保。事態の安定をはかります。また国内紛争に関しては、対立する民族の一方をコロニーに移住させることも視野に入れ……』

ロックオン「おいおい、無茶苦茶いつてるぞ、この女。」

シン「無茶苦茶どころか一方的すぎる。」

スメラギ「それでも、世論は受け入れるでしょうね。」

アレルヤ「なぜです？」

スメラギ「みんな困らないからよ。太陽光発電と軌道エレベーター

事業、コロニー開発で連邦の財政は安泰。その恩恵をうけて、連邦市民の生活水準は向上し、アロウズと保安局で反政府行動をおさえた。つつある。問題がなければ実害もない。文句なんて出やしないわ。」

刹那「だが、その中で一方的に命を落としている者達がいる。そんな世界が正しいとは思えない。」

シン「自分達と周りさえ良ければ、他は無視する。無自覚の悪意と歪み……。」

刹那「そうだ。」

ロックオン「アロウズを創った野郎だ。そいつが元凶だ。」

シン「確かにそうですね。でも、そいつを倒した所で、そいつが『根元』とは限らないと思うけど……。」スメラギ「なかなかいいことを言うわね。」

シン「どうも。」

ティエリア「……………」

アレルヤ「ん？ どうしたんだい？ ティエリア。」

ティエリア「いや、何でもない。」

アレルヤ「そうかい？ ならいいけど。」

ピピッ

イアンから通信が来た。

イアン『ダブルオーとアリオスの応急修理は一応済ませた。それより朗報だ。支援機2機が完成したらしい。ツインドライブを万全にするためにも、一足先に宇宙に上がり、調整作業をしたいんだが。』スメラギ「了解です。ミレイナ、イアンのかわりに整備を担当してもらえる？」

ミレイナ「はいです！」

ピピッ

ラッセ「王留美からの、暗号通信だ。」

スメラギ「開いて。」

『皆さん、今まで公に姿を見せなかったアロウズの上層部が、経済界のパーティに出席するという確定情報を得ました。後日、その調査結果を…』

ティエリア「僕もその偵察に参加させてもらう。」

スメラギ「ティエリア。」

ティエリア「本当の敵を、この目で見たいんだ。」

ラッセ「相手に俺らの正体が知られている場合も。」

刹那「俺がバックアップに回る。」

スメラギ「仕方無いわね。そのかわり、私の指示に従ってもらわよ。」

シン「…で？ 何で休憩室に？」

ロックオン「俺に聞くな。」

アレルヤ「スメラギさんが何か『やらかす』かもしれないね。」

シン「やらかすって、何をだ？」

マユ「あ、分かった！ 『女装』とか？」

シン「いやいやいやいや、それは無いだろ。」

ロックオン「いや？ 結構似合ってるかもな。ハハッ。」

シン「ハア…、何だかな…。」

シンはコーヒーを飲んだ。

プシュー

スメラギ「皆、準備が出来たわ。ティエリア。」
ティエリア「あ…ああ…」

ティエリアはぎこちない返事をした。

刹那「？ どうした？」

ロックオン「おい刹那、段取りつてのがあるだろ。」

シン「いや、それはそれで可笑いだろ。」

スメラギ「コホンッ。えーえー、それではティエリア・アーデの衣装を見せます。」

スメラギはティエリアを部屋に入れた。

シン「ブーッ!!」

シンはティエリアの姿を見て、思わずコーヒーを吹き出した。

ロックオン「……………」

シンが吹き出したコーヒーはロックオンの顔にもの見事にかかった。

そんなロックオン以外の全員が驚いたティエリアの姿とは――

ティエリア「……………」

ティエリアはティエリアだとは思えない程の美女になっていた。

刹那「…本当にティエリア・アーデなのか？」

ティエリア「ああ…そうだ。」

ミレイナ「凄いですう…。」

マユ「綺麗…。」

アレルヤ「スメラギさん、一体どんな手を使ってこんな…。」

シン「色々突っ込み所満載だな。体型とか胸とか、後声はどうすんですか？」

スメラギ「それは合成音声でバツチリよ。」

シン「よし、めんどくさいからさっさと行け。」

アレルヤ「それ、投げ槍じゃないかい？」

何だかんだでティエリアと刹那はアロウズのパーティーの偵察に向かった。

シン「フウ…。」

シンはデステイニーの整備をしていた。

ミレイナ「アスカさん、ミレイナの出番を取らないでくださいですう！」

シン「良いじゃんか。人手は多い方が良いだろ？」

ミレイナ「アスカさんの腕はミレイナよりいいから困るですう。」

因みに、シンの腕前はイアン仕込みである。

シン「そんな理由かよ。…しかし、ティエリア達は上手くいってるかな？」

アレルヤ「さあ、それは報告を待つしかないね。」

シン「まあ…それもそうだな。」マユ「へえ、お兄ちゃんってこんな事もするんだ。」

シン「当たり前だろ。只でさえ人数が少ないんだから、一人でやる事は出来るだけやらないとな。」

マユ「只只只只只只只只只只」

シン「オートマトンかよ。」

アレルヤ「なんて言葉遊びなんだろう…。」

シン「んゝ…！ さてと、少しやす——」

ビーツ！ ビーツ！ ビーツ！

皆「！？」

シン「何だ！？」

フェルト『ダブルオーとセラヴィーが敵MSの攻撃を受けています。直ちに救援を！』

シン「アレルヤさん！」

アレルヤ「了解！」

マユ「お兄ちゃん！」

シン「ん？」

マユ「気を付けて行ってね。」

シン「ああ！」

シンはサムズアップをし、デステイニーに乗り込んだ。
そしてガンダム各機は救援に向かった。

シン「刹那…ティエリア、無事でいろよ。」

ピピッ！

シン「ん?!」

デステイニーのセンサーにダブルオーとセラヴィーに圧倒するMSが映った。

ロックオン「あのMSは…!?!」

アレルヤ「ハッ! まさか…!?!」

シン「そんな事よりもさっさと助けるぞ!」

デステイニー他2機は、そのMS――アルケーガンダムに向けて撃った。

ロックオン「なっ?!」

だが、アルケーは尋常ではない動きで躲し、更に右手の得物でビームを弾き、そのまま撤退した。

シン「逃げた? (しかしあの機体の形状、何時か見たスローネの発展型に見えたんだけど…?)」

アレルヤ「刹那、ティエリア、スメラギさんからの帰艦命令だ。」

だが、セラヴィーはアルケーを追おうとした。

アレルヤ「ティエリア!」

シン「何してるんですか!?!」

アリオスとデステイニーはセラヴィーを止めようとした。

ティエリア「なぜ止める?! 奴はロックオンの仇だ!」

セラヴィーはあろうことかアリオスとデステイニーに斬りかかった。

アレルヤ「うわっ?!」

シン「ティエリア?!」

アリオスとデステイニーはセラヴィーの攻撃を躲した。

ロックオン「兄さんの?」

刹那「やはり生きていた。アリー・アル・サーシェス…」

その後、何とかティエリアを宥め、プトレマイオス2に帰艦した。

マユ「お兄ちゃん、大丈夫だった?」

シン「ああ、相手が1機だけだから俺達が来た途端に不利だと判断したのか撤退したよ。」

マユ「そうなんだ。」

すると、ティエリアとロックオンも現れた。

ロックオン「あのガンダムは何なんだ?それに、兄さんの仇って…。」

ティエリア「言葉通りの意味だ。あのガンダムに乗っていたアリー・」

アル・サーシエスがロックオンの命を奪った。」

ロックオン「アリー・アル・サーシエス……詳しく聞かせてくれ。」

ティエリアはロックオン——ニール・ディランディとアリー・アル・サーシエスの事を話した。

ロックオン「成る程ね。兄さんは家族の仇をうつためにそのサーシエスって奴を。…フフフフフ…」

シン「！」

ティエリア「何を笑う？」

ロックオン「世界の変革より私怨か、兄さんらしいと思ってな。」

ティエリア「不服なのか？」

ロックオン「いや。尊敬してんだよ。家族が死んだのは10年以上前のことだ。俺にはそこまで思い詰めることはできねえ。」

刹那「仇が、ここにいらしてもか？」

シン「あ…。」

ロックオン「何？　どういうことだ？」

刹那「俺はKPSAに、お前から家族を奪った組織に、所属していた。」ロックオン「！」

ティエリア「刹那。」

アレルヤ「何もそこまで…」

シン「いや、刹那は本気だ。」

アレルヤ「ん…。」

刹那「言うべきことがある。」

刹那はKPSAに所属していた時の事を話した。

刹那「あの時、俺が仲間を止めていれば、ロックオン…いや、ニール・ディランディは、マイスターになることもなく…」

ティエリア「刹那…。」

ロックオン「その時、お前が止めてたとしても、テロは起こってたさ。そういう流れは変えられないんだ。」

刹那「だが…」

ロックオン「すべて過ぎたことだ。昔を悔やんでも仕方ねえ。そうさ、俺達は、過去じゃなく、未来のために戦うんだ。」

ティエリア「あつ…。」

シン「未来のために、か…。」

シン「ふああ…。」

シンはあの後、デステイニーの整備を終えてデステイニーに座って休憩をしていた。

マユ「お兄ちゃん、飲み物持ってきたよ。」

シン「ああ、サンキュー。」

シンはマユから飲み物を貰って飲んだ。

マユ「お兄ちゃん…。」

マユはシンの隣に座った。

シン「ん？ どうした？」

マユ「ううん、一緒にいたいだけだから。」

マユはシンに寄り掛かった。

シン「そうか。」

マユ「……………」

シン「……………」

シンとマユはそのまま飲み物を飲みながら過ごした。
ただ、今の兄妹にはその状態でも満足なのだ。
そして、そのまま時間だけが過ぎた頃だった。

ビーツ！！ ビーツ！！ ビーツ！！

シン「何！？」

マユ「！？」

『敵水中用M A 6機を確認しました。各員、所定の位置についてください。』

シン「マユ！ お前はブリッジに急いで行け！」

マユ「う…うん！」

マユはブリッジに向かって走り出した。

フェルト「敵はトレミーを包囲しつつ接近してきます。」

スメラギ「攻撃開始時間は？」

フェルト「0024です。」

スメラギ「赤道上にいることを敵が予測していた。やるわね」

と、ブリッジにマユとマリーと沙慈が入ってきた。

マリー「何か用でしょうか？」

スメラギ「補助席に座って。少し荒っぽい事になるから。マユちゃん
は操舵席に座るだけでいいから。」

マユ「はい。」

スメラギ「ラッセ。」

ラッセ「了解。トレミー、急速浮上態勢に入る。」

ハロ「アア~~~~~」

ブトレマイオス2の急浮上により、ハロは通路を転がってつた。

ミレイナ「攻撃予測時間まで、0004を切ったです!」

スメラギ「まだよ。ギリギリまで引き付けて。」

フェルト「敵部隊に反応。大型魚雷です。」

スメラギ「『ガンダム各機』、トランザム開始!」

ティエリア「了解。トランザム!」

ガンダム各機はトランザムを使用した。

スメラギ「GNフィールド最大展開。トレミー急浮上。爆発の上へ!」

ラッセ「南無三!」

ドガアアアアアアアアアアンツ!!!!

マユ「うわっ?!」

ミレイナ「きゃあああああ!」

ラッセ「クツ!」

スメラギ「トレミーを飛行モードへ!」

ブトレマイオス2はガンダムのトランザムと魚雷の爆発を利用して海中から飛び出した。

そして、アロウズのMS隊は攻撃を開始した。

コーラサワー「効かねえじゃねえか！」

だが、攻撃はGNフィールドによって阻まれていた。

フェルト「全砲門開きました。」

スメラギ「一斉発射！」

プトレマイオス2からビームとミサイルが発射された。

コーラサワー「このおゝゝ！ またかよゝゝ！」

ジnkス？コーラサワー機は頭部を撃たれて『今日も』元氣よく落ちていった。（笑）

頑張れ！ 我らのコーラサワー！！（爆笑）

コーラサワー「応援サンキュウウウウウウ……」

そしてプトレマイオス2は大気圏を突破しようとした。
だが、其処にはガデッサが待ち受けていたのだ。

リヴァイブ「上昇角度の変更はたったの3度。このガデッサには容易い事！」

そして、ガデッサのGNメガランチャーの砲撃は、プトレマイオス2を掠めた。

マユ「これって……！？」

沙慈「直撃！」

マリ「大丈夫です。」

フェルト「高度600キロを突破しました。」

ラッセ「このまま大気圏を離脱する！」スメラギ「角度を変えられた！？ 敵の指揮官、本当にやる…！」

そう、アロウズの指揮官であるカティ・マネキンの目的は、プトレマイオス2が大気圏を離脱している時にガデッサによる砲撃で角度を変え、待ち伏せしているアロウズ艦隊によって撃沈させようという作戦だった。

フェルト「トレミー、高度1万キロ。低軌道リングを超えました。」

そして、アロウズ艦隊がプトレマイオス2に攻撃を仕掛けた。

ミレイナ「敵部隊の攻撃です！」

沙慈「まさか…待ち伏せ！？」

フェルト「トランザム、限界時間を突破しました。」

スメラギ「そう。『デステイニー』！」

シン「了解！ 『トランザム』！」

そう、大気圏離脱の為にトランザムを行ったのはケルディム、アリオス、セラヴィーだけで、デステイニーは待機していたのだ。そして、デステイニーはトランザムを発動し、プトレマイオス2はその場から離脱した。

「敵艦、離脱しました！」

「何だと?! クツ！ 嵌められたか！」

アロウズのMS隊はそれでもプトレマイオス2を追撃した。

ビーンツ！ ビーンツ！ ビーンツ！

「な、何い?!」

「敵MS接近!」

「ガンダムです!」

「援軍がいた? いいや、あの機体は違う。……もしや! 大気圏離脱中に緊急発進させたというのか?!」

刹那「一気に敵部隊を狙い撃つ! ダブルオー、目標を駆逐する!」

ダブルオーはアロウズのMS隊は全滅し、離脱した。

「クツ!! やられた!!」

ミレイナ「敵MS隊、全滅したです!」

フェルト「敵艦、撤退していきます。」

ラッセ「読み勝ちだな。」

スメラギ「どうにかね。」

マユ「凄い…!」

フェルト「あつ、スメラギさん。敵MSから、有視界通信によるメッセージが届きました。」

スメラギ「メッセージ?」

ラッセ「なんだよ?」

フェルト「読み上げますか?」

スメラギ「お願い。」

フェルト「『CBのリーサ・クジヨウの戦術に敬意を表する。独立治安維持部隊大佐、カティ・マネキン。』以上です。」

ラッセ「なんだ? そのメッセージは?」

スメラギ「(マネキン…カティ・マネキン…。そんな…、彼女がア

ロウズに？）」

フェルト「スメラギさん、どうしたんですか？」

スメラギ「逃げられないのね、私は。（あの忌まわしい過去から……拭えない過去から……）」

スメラギは自らの過去を思い出していた。

第10話 宇宙（そら）へ（後書き）

べっ、別に（名前出てないけど）ジエジャン中佐に妹がいるから生かしたとか、そ、そそそそんなワケじゃないからねっ！↑どう見ても（色んな意味で）重病者です、本当にありがとうございました。

第11話 人の光（前書き）

これで、一応連続投稿を終了します。

第11話 人の光

ブトレマイオス2はアロウズの攻撃を掻い潜り、ラグランジュ3にあるCBの秘密基地に向かっていた。

シン「今回はスメラギさんの読み勝ちみたいですね。」

アレルヤ「ああ、そうだね。」

マユ「わわわわわッ?!」

マユは無重力に戸惑っていた。

シン「おいおいおい、大丈夫か? ってかよくここまで来れたな。」

マユ「だって、無重力空間なんて殆ど無いもん。」

シン「ハア…、そりゃそうだな。」

アレルヤ「でも、これは慣れた方が良いよ?」

マユ「う…うん。」

シン「ほら、手貸せ。」

シンはマユの手をとった。

マリー「どうしたの?」

シン「ああ、マリーさん。コイツ、あまり無重力に慣れてなくてさ、ちょっと手伝ってくれませんか? 俺はアリオスの整備をしなきゃならないから。」

マリー「分かったわ。マユちゃん、此方に。」

マリーはマユの手をとった。

シン「またな。」

マユ「うん…。」

アレルヤ「僕も手伝おう。」

アレルヤは二人の後を追っていった。

シン「さてと、整備でもしますか。」

シンはアリオスの整備を始めた。

シン「ハロ、お前達はデータ通りの作業を行ってくれ。」
ハロ達「了解！ 了解！」

シンはハロ達と共に整備をしていた。

シン「…ん？ 刹那？」

シンはダブルオーに座って黄昏ている刹那を見付けた。

シン「まあ、良いか。」

シンは作業を再開した。

ビーンツ！ ビーンツ！ ビーンツ！

刹那「ッ！」

シン「なっ…？！ こんな時に!?!」

フェルト「Eセンサーに反応！ 接近する機影があります！」
ラッセ「敵？ アロウズか。」

マリー「…ハッ！ 来る…。」

アレルヤ「どうしたんだい？ マリー。」

マリー「うっ…！」

マリーは頭を抱えた。

マユ「マリーさん？」

アレルヤ「マリー！」

マリー「来るわ、危険な…何かが。」

沙慈「危険な…何か…。」

マユ「それって…？」

フェルト「接近する機体の速度は78キロセカンドです。」

スメラギ「なんなの！？ そのスピード！」

ロックオン「敵は一機だけだろ？」

シン「まだアリオスは出せない！ セラヴィーは？」

ミレイナ「セラヴィーも修理中です。」

シン「チッ、出せれるのはデスティニーとダブルオーとケルディムだけか。」

スメラギ「ガンダム緊急発進。敵機の迎撃を！」

刹那「ダブルオー、先行する！」

シン「後から俺達も来る！」

ダブルオーは接近する機体に向けて発進した。

刹那「あれか！ 疑似太陽炉搭載型…やはりアロウズ！」

その機体は脚部にブースターが取り付けられてあった。

刹那「この機動性、また新型か？！」

ダブルオーはそのMSに向けてビームを撃った。

バチイイッ!!

刹那「あれは!?!」

スメラギ「GNフィールド?!」

そう、そのMSはGNフィールドを使って防御を行ったのだ。

フェルト「連邦にフィールドを使う機体が。」

ティエリア「クッ…!」

刹那「あっ!」

爆煙からブースターを外したそのMS——ガラッゾが現れた。

刹那「はっ!」

ガキイイイイッ!!

ガラッゾは指先にGNビームクローを装備しており、それでダブルオーと唾競り合いを行った。

刹那「トランザムが使えれば…!」

ガラッゾは唾競り合いを行いながら指先を揃え始め、そして——

バキイイッ!!

刹那「あっ!」

ダブルオーのGNソード？を真つ二つにした。

シン「刹那！！」

ロックオン「刹那！ 大丈夫か？！」

と、其処にデスティニーとケルディムが援護に駆け付けた。

ティエリア「あの新型、ダブルオーを圧倒して。」

シン「コイツ、墜ちろッ！」

デスティニーはガラッゾに向けて撃った。

だが、ガラッゾはそれを躲し、そのまま撤退した。

ロックオン「なんだ？」

刹那「逃げた？」

シン「どういう事だ？」

フェルト「敵機、撤退していきます。」

ラッセ「やけに呆気ないな。」

スメラギ「ガンダム収容後、最大加速でラグランジュ3に向かいます。」

フェルト「了解しました。」

ラッセ「なあ、敵さん、どういふつもりだ？」

スメラギ「こつちにも軍が展開している事を告げ、新型の性能も惜しみなく示す。牽制と警告よ。」

ラッセ「オーライザーが、ますます必要になってきたな。」

スメラギ「ええ。」

ブトレマイオス2はラグランジュ3に向かった。

ラグランジュ3

CB 秘密基地

ブトレマイオス2はドッグに接岸し、皆は中へ入った。

ミレイナ「あっ！」

イアン「よう、待ったぞお前ら。」

其処にはイアンと一人の女性が待っていた。

ミレイナ「ママ〜！ ただいまですう！」

と、ミレイナはその女性に飛び付いた。

「ミレイナ、元気にしてた？」

ミレイナ「もちろんですう。」

アレルヤ「今、ママって言わなかった？」

刹那「ああ、言った。」

沙慈「ということは…」

マユ「もしかして…」

イアン「そうか、会うのは初めての奴もいたな。わしの嫁だ。」

「リンダ・ヴァステイです。」

イアンの妻でミレイナの母であるリンダはそう挨拶した。

マユ「ええっ?!」

沙慈「わ、若い。」

アレルヤ「犯罪ですよ。」

イアン「どういう意味だ!?!」

シン「ハハッ、そうきたか?! って、アレルヤさん?!」

マユ「お兄ちゃん、知ってたの?」

シン「そりゃそうだ。」

スメラギ「さて、冗談はそれくらいにして。」

イアン「なんだよ、冗談って!」

スメラギ「トレミーとガンダムの補給と改修を急いでもらえる?」

イアン「な、何があった?」

「この宙域に、アロウズが展開しています。」

イアン「このカムフラージュは、完璧だと思うが?!、分かった。」

「ですが、補給と整備には最短で5日を要します。」

と、見知らぬ女性が言った。

スメラギ「あなたは?」

刹那「見かけない顔だな。」

マユ「お兄ちゃん知ってる?」

シン「いや...」

「初めまして。活動再開と同時にCBにスカウトされた、アニュー・リターナーです。」

ラッセ「スカウト?」

ティエリア「一体誰が?!」

イアン「王留美に紹介されてな。アニューは凄いぞ、宇宙物理学、モビルスーツ工学、再生医療の権威で、操船技術や料理に長け、おまけに美人だ。どうだ。なかなかの逸材だろ?」

アニュー「あつ?! よろしく願います。」

マユ「ねえ、お兄ちゃん、ワン・リューミンさんって?」

シン「C Bのエージェント、まあ、スポンサーみたいなものだ。」
マユ「ふーん。」

シン達はイアン達に案内されて支援機の所に向かった。

刹那「これがオーライザー。」
シン「ダブルオーの支援機。」

刹那とシンはダブルオーの支援機であるオーライザーを見た。

リンダ「この機体には、ツインドライブの制御機能が搭載されているわ。トランザムの増幅機能もね。」
ロックオン「あっちの機体は？」

ロックオンはオーライザーの隣にある機体を見た。

アニユー「アリオス用の支援機、GN^{ガン}アーチャーです。」
アレルヤ「GNアーチャー。」
イアン「テストをはじめろぞ。刹那。」
刹那「了解。」

刹那達はダブルオーとオーライザーのテストの準備を始めた。
その頃、マリーとマユは一緒に基地を探索していた。

マリー「慣れた？」
マユ「はい、だいぶ慣れました。」
マリー「そう、それは良かったわ。…それにしても、ラグランジュ3にこんな大規模な基地があるなんて。……ん？」

マリーは何か考え事をしている沙慈を見付けた。

マリ「どうかしました？」

沙慈「どうしていいかわからないんです。僕のせいで、多くの人が命を落とした。でも戦うことなんて…、人を殺すことなんて…僕にはとても…。」

マユ「……………」

マリ「出来ないのは、当たり前です。」

沙慈「でも、何かしないと、自分に出来ることを何か…。あの、聞いていいですか？」

マリ「何をです？」

沙慈「あなたは、これからも彼らと一緒にいるつもりですか？」

マリ「ええ。アレルヤがここにいる限りは。」

沙慈「戦いに巻き込まれても？」

マリ「あたしは軍人でしたし、そういう覚悟も出来てるつもりです。それに、もう決めたから。あたしは何かあっても、アレルヤから離れないと。」

沙慈「羨ましいな。僕にもそう思える人がいて、もし再会することがあつたら、二度と離れないって思ってた…でも、なんだか不安で…無性に不安で…」

マユ「怖いのか？」

沙慈「多分…そんな感じかもしれない…。ところで、どうして君もここに？」

マユ「マユはトレミーに勝手に入ってきたから。」

マリ「えっ？…ああ。」

沙慈「どうしてそこまでして…？」

マユ「お兄ちゃんがC Bにいたから。」

沙慈「そんな理由で…？」

マリ「人は理由さえあれば何でもやれるわ。マユちゃんはお兄さん…シンと一緒に居たかったんでしょ？」

マユ「うん。」

沙慈「そう…なんだ。」

沙慈はそんなマユも羨ましく思えた。

ミレイナ「オーライザー、ダブルオーとドッキング完了です。」

リンダ「各部センサー、オールグリーンよ。」

イアン「ようし、刹那。オーライザーの制御システムをテストする。トランザムを始動させるぞ。」

刹那「了解。」

シン「『完全なるトランザム』を使えるダブルオー。一体、どんな力を秘めてるんだ…？」

イアン「それを今から確かめるんだよ。」

シン「ハハッ、そうですね。」

刹那達はオーライザーのテストを行おうとした。

低軌道リング上に建造された衛星兵器、メメントモリ。

その矛先は中東のスイールに向けられていた。

「掃射形態、変形終了。電力供給98%、出力、6800で固定。目標ポイント、誤差調整よし。掃射出力部、問題ありません。」

其処にはアロウズのアーバ・リント少佐とアーサー・グッドマン准将がいた。

リント「准将、掃射準備、完了いたしました」

グッドマン「よし、カウントダウンをはじめる。」とグッドマン
「カウントダウン開始！」

「了解。掃射まで、カウント。10、9…」

アニュー「トランザム開始まで、残り8、7、6、5、4、3、2、
1…」

「掃射、開始します。」

そして、スィールに向けて全てを焼き付くす業火が放たれた。

アニュー「トランザム開始まで、5、4、3、2、1…」

イアン「刹那！」

刹那「了解。トランザム、始動！」

ダブルオーはトランザムを使用した。

ミレイナ「トポジカル・ディフェクト、高位へ推移です。」

リンダ「粒子生産量、粒子放出量、ともに上昇。」

アニュー「通常時の180%をこえました。更に上昇。」

イアン「いけるぞ、リンダ。」

リンダ「ええ。」

シン「何だ…？ この研ぎ澄まされる様な感覚は…？」

アニュー「230…260…」

刹那「こ、これは…?!」

アニュー「290%を突破！」

イアン「何い?!」

アニュー「理論的限界値を越えます。」

リンダ「そんな…」

イアン「これが…イオリアが予見したツインドライブの…」

刹那「真の力だというのか…。」

シン「人の光…。」

このトランザムによるGN粒子は、『脳量子波』を持つ者達に影響を与えた。

マリー「あつ…、大佐！」

アレルヤ「あ…頭が！」

ティエリア「な、なんだ？ この感触は？」

一方、メメントモリの一撃は、スィールを飲み込み、その余波は近隣で監視をしていた連邦軍艦にも襲い掛かった。

その艦には、ロシアの荒熊ことセルゲイ・スミルノフ大佐が乗っていた。

セルゲイとソーマ（マリー）は、直属の上司と部下であり、ソーマを『一人の人間』として見てくれる数少ない人物なのだ。

ソーマ「た、大佐！ 逃げてください！ 大佐！ 大佐あー！」

ダブルオーのトランザムによる高濃度粒子領域内でセルゲイの危機を感じ取ったマリーはソーマに『戻り』、叫んだ。

「量子がこっちにむかって加速してきやがる。ったく、おちおち寝てもいらんねえぜ。」

その声は、4年前に消滅した筈の、アレルヤの第二人格にして、超兵の『反射』を司るハレルヤだった。

第11話 人の光（後書き）

タイトルの理由は、何処かのサイトで、『ツインドライヴシステムの生み出したGN粒子は人の光』と言うのがあるので、使わせて頂きました。

第12話 ダブルオーの声（前書き）

今回はゴールデンウィークということで1、2日に1話ずつ投稿します。

第12話 ダブルオーの声

セルゲイ「くっ…うつ…！」

連邦軍艦は無事だった。

セルゲイ「…はっ！ これは！？」

だが、眼前にあるのは、広大なクレーターだけだった。
スィールはメメントモリによって消滅したのだ。

アニュー「ダブルオーライザー、トランザム限界時間に到達します。」

ティエリア「ハッ、なんだ…？」

アレルヤ「うつっ…僕は何を…？」

アレルヤはまだハレルヤに気付いていない様だ。

マリー「どうして、あたし、大佐のことを？」

ソーマはマリーに『戻った』。

シン「終わった…。」

ミレイナ「すごいですう！」

アニニュー「理論的限界値を超えた性能。」

リンダ「予定外だわ。」

イアン「なんてこった。ツインドライブはわしらの想像をはるかに超えている。こりゃとんでもないしろもんだぞ。」

刹那「これが、ダブルオーライザー。世界を変える力。」

ピピッ

イアン「ん？ トレミーからか？」

イアンは通信を開いた。

イアン「どうした？」

フェルト『観測システムが地球圏で異常な熱源反応を捉えました。』

イアン「何？」

フェルト「至急、ブリッジに。」

イアン「分かった。よし、皆、トレミーに行くぞ。」

皆「^{です}了解。」

プトレマイオスクールとマイスター達はブリッジに集まった。

スメラギ「これは…衛星兵器。」

シン「こんな所に…？」

フェルト「恐らく、太陽光発電を応用したものだと思われます。入ってくる情報は少ないですけど。」

ラッセ「どこが狙われた？」

フェルト「中東、スイールです。」

ロックオン「スイールが？」

ティエリア「……………」

アレルヤ「スメラギさん。」

スメラギ「ええ。補修が終わり次第、トレミー出航。連邦の衛星兵器破壊ミッションに入ります。各員持ち場に…」

ティエリア「待ってくれ。その前に、皆に話しておきたいことがある。連邦を裏から操り、世界を支配しようとするものがあるんだ。」
ラッセ「何？」

イアン「支配だと？」

ロックオン「どうしてそんなことを知ってる？」ティエリア「僕は彼らと会った。彼らの名は、『イノベーター』。」

ティエリアはその『イノベーター』に関する情報を話した。

刹那「ヴェーダによって生み出された生体端末、イノベーター。」
イアン「そいつらがアロウズを動かし、ヴェーダまでも掌握してるってのか。」

アレルヤ「ということは、僕達が武力介入を開始した5年前から…」
ロックオン「活動してた、ってことになるな。」

シン「いや、それ以上前かもな…」

スメラギ「トリニティ…3機のガンダムスローネを武力介入に参加させ、疑似GNドライヴを搭載した30機のジンクスを国連に提供したのも彼らの仕業。」

イアン「つまり奴らが、イオリアの計画を変えたってことか。」

フェルト「そのせいで、ロックオンやクリスは…」

ロックオン「何故、そんな大事な事を今まで言わなかった？」

ティエリア「彼らは、イオリア・シュヘンベルグの計画を続けていると言った。それが事実なら、我々の方が、異端である可能性も…」
スメラギ「そんなこと…」

アレルヤ「そうだよ。アロウズを創り、反政府勢力を虐殺。そんなやり方で、本当の平和が得られるわけがない。」

シン「例えそんな強制的に『平和』になろうとも、何処かで反発が

起きてまた新たな争いが生まれるぞ？」

刹那「破壊する……！ アロウズを倒し、イノベーターを駆逐する。俺が、俺の意志で。」

ラッセ「乗ったぜ、刹那。」

ロックオン「俺もだ。」

ミレイナ「はいです。」

イアン「そうだな。」

シン「やるからにはとことんやってやるさ。」

ティエリア「皆、僕も彼らと……」

言いかけるティエリアの肩に手をかけるスメラギ。

スメラギ「大体の事情は判ったわ。でも、今しなければならないのは、敵の衛星兵器を破壊することよ。」

ティエリア「スメラギ・李・ノリエガ……」

スメラギ「あなたは私たちの仲間よ。」

ティエリア「……………」

ティエリアは困った様な笑顔をした。

ドッグ内

シン「それは第1格納庫で、それは第2格納庫だ。そのコンテナは後部格納庫に。」

シンは小型端末を操作しながら作業員に指示をしていた。

マユ「お兄ちゃん、何か手伝える事ある？」

シン「無い。」

マユ「ブー！」

シン「頼つぺた膨らませても無いもんはない。さっさとブリッジに行け。」

と、シンは小型端末から目を逸らさずに操作しながら言っていた。

マユ「…分かったよ、お兄ちゃん…。」

マユはプトレマイオス2のブリッジに行こうとした。

シン「……………いや、待て。」

マユ「えっ？」

シン「さっさと終わらせる。」

そう言つてシンは小型端末を操作する手を速めた。
作業員達の中には、その常人離れたスピードに思わず注視する者もいた。

ピピピピピピピ…ピピッ！

シン「さてと、これで終了つと。」

シンは小型端末を閉じた。

シン「さてと、少し疲れたから休むか。行くぞマユ。」

マユ「うん！-」

シンとマユはプトレマイオス2の休憩室に向かった。

スメラギ『トレミーの乗員以外の全クルーに通達します。トレミーは0032をもって出航します。作業員は補給終了後、当基地を破棄。各データの抹消後、輸送艇でY45ルートより離脱してください。トレミーは0037をもって、連邦の衛星兵器破壊ミッションを開始します。』

シン「おっ？ もうそろそろか？」

シンは飲み物を飲みながらそう言った。

シン「マユ、もうそろそろブリッジに行けよ？」

マユ「うん、そうするよ。」

そしてマユはブリッジに向かおうとした。

ドオオオオオオオオオン…ッ！！

マユ「キャッ?!」

シン「なっ!?! これってまさか…?! マユ! 今すぐブリッジに行け!」

マユ「う、うん!」

マユはブリッジに向かい、シンは第一格納庫に向かった。

アニュー「遅くなりました。」

ミレイナ「すみませんです。」

マユは二人と一緒に入ってきた。

ミレイナ「マユちゃんはその補助席に座ってです!」

マユ「うん。」

その直後に沙慈とマリーも入った。

アニュー「お二人はその席を…あつ。」

マリー「あたしは大丈夫です。」

マリーそう言つてマユの隣に来た。

スメラギ「ガンダム各機発進準備。アニュー、トレミーの操舵をお願い。」

アニュー「わかりました。」

ラッセ「頼むぜ。これで砲撃に専念できる。」

スメラギ「補給を中止してトレミー緊急発進。敵をこちらに引き付けるのよ。」

アニュー「りょ…了解!」

フェルト「補給作業中止、トレミーの固定用アームを解除します。」

ミレイナ「ママ…」

マユ「……………」

フェルト「ガンダム各機、発進しました。」

刹那「イアン、オーライザーの状況は?」

イアン「もう少し時間が掛かる。」

刹那「了解!」

スメラギ「アレルヤ、安全圏まで輸送艇の護衛を!」

アレルヤ「了解！ アリオス、防衛行動に入る。」

アーチャーアリオスは輸送艦の護衛に入った。

刹那「基地が…。」

シン「クツ…！」

刹那とシンは攻撃を受ける秘密基地を見た。

ミレイナ「GNフィールド、展開です。」

フェルト「ゲートオープン。各接続アーム、切り離します。」

アニュー「プトレマイオス、発進します。」

プトレマイオス2は秘密基地から離脱した。

シン「敵は…？」

敵を探すデステイニー。

ヴォンツ！

シン「なっ…？！」

デステイニーの眼前で『隕石』からMSが現れたのだ。

フェルト「敵部隊が出撃しました。総数12です！」

スメラギ「熱源を遮断して！ 刹那、シン、迎撃を。」

刹那& amp;シン「了解！」

ダブルオーとデステイニーは迎撃を開始した。

コーラサワー「予想通りですよ！ 大佐！」

だが、アロウズはそれも予測済みであり、トラップを仕掛けていたのだ。

バチバチバチバチバチバチ！！

刹那「うわあああああああ！！！」

シン「刹那！」

ドガア！

シン「あぐっ？！ コイツらぁッ！！！」

コーラサワー「掛かってこいよ！ ガンダム！」

ダブルオーはトラップに掛かり、デスティニーはMS部隊に阻まれた。

フェルト「敵部隊、接近！」

スメラギ「ティエリア！」

ティエリア「ツインバスターキャノン、高濃度圧縮粒子開放！」

セラヴィーは一発逆転を狙い、隕石ごと敵MS部隊を消滅させようとした。

キイイイイ！ ドオオオオオオオオオオンッ！！

ティエリア「何ッ？！ バカな！」

だが、その隕石はダミーであり、更に中にはガラスゾが隠れており、GNフィールドによって防がれたのだ。

ラッセ「新型が！」

スメラギ「こんな奇襲は…マネキン。」

フェルト「敵部隊が！」

ラッセ「やらせるか！」

ロックオン「素早い！」

ハロ「増援部隊接近！ 増援部隊接近！」

ロックオン「何！？ ぐあっ！？」

ケルディムは被弾した。

フェルト「後方より敵増援部隊、6です！」

アニユー「波状攻撃？！」

スメラギ「この程度の戦術！」

紛糾するプトレマイオス2を狙う機体があった。

リヴァイブ「チャージ完了。目標プトレマイオス。GNメガランチャー、発射！」

ガデッサの一撃はプトレマイオス2のGNフィールドを貫き、『第3格納庫』に直撃した。

マユ「うわっ？！」

沙慈「うっ！ あっ！」

スメラギ「フィールドが！？」

フェルト「直撃！ 第3格納庫です！」

ミレイナ「はっ、パパ…」

フェルト「第3格納庫への通信不能。映像も出ません!」

スメラギ「クロスロード君、至急、第3格納庫の様子を見に行ってもらえる?」

沙慈「ええっ?」

スメラギ「イアンの無事を確かめて!」

沙慈「わかりました。」

マユ「マユも行きます!」

スメラギ「マユちゃん!?!」

マユ「マユにも手伝える事はあると思います。」

スメラギ「…分かったわ。」

マユ「はい!」

沙慈とマユは第3格納庫に向かった。

ティエリア「パワーでセラヴィーと!」

セラヴィーはガラッゾと掴み合いになった。

だが、ガラッゾはセラヴィーの手はメキメキと握り潰した。

ティエリア「な、何?! イノベイター!」

セラヴィーはガラッゾにGNキャノンを撃った。

だが、ガラッゾはそれを躲した。

ダブルオーはアロウズの攻撃から漸く逃れた。

刹那「ハア、ハア…トレミーに…!」

だが、そこに新たなMS部隊が現れた。

刹那「増援?!」

ダブルオーはそれに対応するしかなかった。

沙慈とマユは第3格納庫に入った。

マユ「これって…?!」

沙慈「あっ…ひどい!」

沙慈とマユは第3格納庫の惨状に我が目を疑った。

赤ハロ「沙慈! 沙慈!」

マユ「ハロ…? あっ!」

マユは倒れているイアンを見付けた。

沙慈「イアンさん、しっかりしてください! イアンさん!」

イアン「あ…、オーライザーの…調整は終わった…。」

沙慈「オーライザー?」

マユ「ダブルオーの支援機だよ。」

イアン「こいつを…ダブルオーに…」

沙慈「そんなことより、早く医務室へ!」

イアン「わしのことはいい。早く、オーライザーを届けるんだ…。」

そうでないのなら全員やられる…。」

沙慈「イアンさん。」

イアン「守るんだ…皆を…仲間を…。」

そして、イアンは目を閉じた。

マユ「あっ!」

沙慈「イアンさん!」

マリ「クロスロードさん!」

沙慈「イアンさんを医務室へお願いします。」

マリ「わかりました。マユちゃん。」

マユ「うん、分かった。」

沙慈「ハロ! 手伝って!」赤ハロ「了解! 了解!」

マユ「沙慈さんは!?」

沙慈「僕はオーライザーに乗ってダブルオーの所に届けに行く!」

沙慈と赤ハロはオーライザーに乗った。

マリ「マユちゃん。」

マユ「あ、はい。」

マユはオーライザーを尻目にマリと共にイアンを運び出した。

スメラギ「輸送艇の状況は?」

フェルト「予測戦闘空域を離脱するまで0344です。」

ピピッ!

沙慈「オーライザー、出します!」

ラッセ「お前が?!」

スメラギ「クロスロードくん!」

沙慈「イアンさんに言われたんです。ハロも手伝ってくださいますから」
フェルト「どうしますか? スメラギさん。」

スメラギ「シン達にオーライザーの援護を。」
ラッセ「やらせる気か？」

スメラギ「敵の波状攻撃はまだまだ続くわ。この状況を打開するには、ツインドライブに懸けるしかない。（マネキンの戦術を打ち破るためにも。）」

ラッセ「だそうだ。気を付けろよ？」

沙慈「はい！」

オーライザーは出撃した。

シン「今のビームは…！？」

コーラサワー「オラオラオラオラア！！ 余所見してんじゃねえぞ

?!」

シン「クソッ！ しつこいぞコイツ?!」

デステイニーはジンクス？コーラサワー機から逃れられずにいた。

シン「クッ！ こうなったら…！」

シンはコンソールを操作した。

シン「『ハイパーモード』ッ…！」

デステイニーのウイングユニットが展開し、そこから『光の翼』が現れた。

コーラサワー「そんなこけおとしッ！」

シン「薙ぎ払うッ！」

コーラサワー機はデステイニーに攻撃しようとした。

コーラサワー「ヘッ…?!」

だが、デステイニーは脅威的な機動力を発揮し、更にデステイニーが生み出す『分身』の様なもので照準が定まらなかった。

そう、これがハイパーモードを発動したデステイニーの力なのだ。この説明は、次回、『ヴォワチュール・リュミエールの解説』にて。

シン「いける…！」

コーラサワー「クソッ！ こけおとしじゃねえのかよ！」

コーラサワー機はデステイニーに攻撃した。

シン「当たるかよ！」

だが、デステイニーは攻撃を全て躲した。

コーラサワー「チクショー！ 当たんねえ！」

シン「食らえッ！」

ハイパーモードを発動したデステイニーは、攻撃を躲しながらGNバスターランチャーを撃った。

コーラサワー「ヘッ?!」

コーラサワー機は何とかGNシールドで防御したが、圧縮加速粒子により、艦艇すら撃沈する程の威力を持つGNバスターランチャーの威力が上がり、GNシールドはそのビームに耐え切れず、爆発した。

コーラサワー「大佐ああああああああ……」

『コーラサワー機自体は無傷』だったが、そのまま宇宙の彼方まで吹っ飛んだ。

シン「次！」

デステイニーは瞬く間にもう1機のMSを撃破した。

シン「このまま圧倒しなくても、敵の思惑を掻き乱すぐらいは！」

更にもう1機撃破した時だった。

ピピッ！

シン「オーライザーの援護を？ やっと出撃したか！」

デステイニーはオーライザーの援護の為に更に畳み掛けた。

刹那「オーライザー！ イアンか？！」
沙慈「刹那！」

刹那「沙慈・クロスロード！」

沙慈「イアンさんに言われて！ この機体を刹那に。」

刹那「ドッキングする！」

赤ハロ「了解。了解。オーライザー、ドッキングモード！ オーライザー、ドッキングモード！」

ダブルオーは敵の攻撃を掻い潜り、そして――

赤ハロ「ドッキングセンサー！」

ダブルオーとオーライザーはドッキングした。

沙慈「あつ！ ドッキングした！？」

刹那「いける！ ダブルオー、目標を駆逐する！」

今ここに、『世界を変革する』、『ガンダムを超えしガンダム』、ダブルオーライザーが戦場に舞い降りた。

刹那「破壊する！ 俺達が破壊する！ 俺達の、意志で！！」

ダブルオーライザーはハイパーモードを発動したデスティニー以上の圧倒的な性能を見せ付け、1機のアヘッドを撃破した。

赤ハロ「10時方向、敵機接近！ 10時方向、敵機接近！」

「ダブルオーガンダム……！」

ダブルオーライザーにブリング・スタビティが乗るガラッゾが迫った。

刹那「新型か?! トランザムを使う!」

そして、ダブルオーライザーはトランザムを使用した。

――

シン「――ッ?!」

シンはあの時の研ぎ澄まされる様な感覚を感じた。

シン「こっ…これって…?! まさかトランザムを使った…!?!
ハッ!」

シンは背後から狙撃を試みるジnkス?を『感じ取った』。

シン「そこかあ!」

デステイニーはGNビームライフルでそのジnkス?を攻撃し、見事なまでに直撃し、爆散した。

シン「この感覚…! ダブルオーライザーにはここまでの力が…?!」

デステイニーは一旦プロトレマイオス2の付近に戻り、援護を開始した。

ヴォワチュール・リュミエールの解説

GN粒子をウイングユニット内で加速させ、圧縮して使う光の翼は、『ヴォワチュール・リュミエール』という機能が生み出した産物である。

光の翼は、太陽光やGN粒子を受け、それを特殊エネルギーに変換してGN粒子と併用して主推力として用いる。

その際、余剰エネルギーと放出したGN粒子が『分身』を作り出す。

更に、圧縮した加速粒子は機体全体に回り、攻撃力、防御力が通常の1.5倍にもなり、運動性能も大幅に向上する。

因みにこの機能は『オリジナル』に近い機能とデスティニーが持っている機能のハイブリッドになっている。

GN粒子を加速させて圧縮した光の翼には、本来の翼の光には無い『GNビームウイングソードとしての攻撃力』を持つ。

見た目の割には少ないGN粒子でこの機能は発動出来る為、トランザムとの併用が可能。

但し併用した際、乗っている人間には『GN粒子でも軽減仕切れない程のG』が襲う事になる。

第13話 トランザムライザー（前書き）

今回はコーラサワーが活躍してるぜ！

そしてロックオンは（戦闘では）ハブラレルヤ状態だぜ！

第13話 トランザムライザー

未だにアロウズに苦戦を強いられるプトレマイオス2とガンダムだが、ここでダブルオーライザーの登場により、逆転しようとした。

ブリング「ここは通さん！」

ガラッゾが『トランザムライザー』に攻撃を仕掛けた。

刹那『邪魔をするなああああ！！』

ブリング「ッ！？」

トランザムライザーはガラッゾを押した。

ブリング「ぐうううッ！？」

そして、GNソード？の刃がガラッゾの肩に当たろうとした。だが、ガラッゾはもう片方のGNビームクローでトランザムライザーに攻撃し、それを回避し、GNビームバルカンで追撃した。

だが、トランザムライザーは圧倒的なスピードで回避し、隕石を回ってGNソード？のビームを拡散ビームにし、ガラッゾに浴びせた。

バリインッ！！

ブリング「くそ！」

ガラッゾはバイザーごとメインカメラが破壊され、ブリングはサブ

カメラに切り替えた。

ブリング「何!？」

サブカメラに切り替えたと同時に迫るトランザムライザーにガラッゾは直ぐ様向きを直し、唾競り合いを行った。

ドガッ!

だが、ガラッゾはトランザムライザーに蹴られ、更にトランザムライザーの攻撃をともに受けた。

ブリング「ぐっ!」

ガラッゾはコアファイターを射出し、ブリングは無事だったが、ガラッゾは爆散した。

そして、トランザムライザーはプトレマイオス2の所に向かった。

ティエリア「また増援か! こんな状況でトランザムを使うわけには!」

シン「クッ! 次から次に!」

デステイニーが1機のアヘッドを撃破した時だった。

ピピッ!

シン「何ッ！？ 後ろ！？」

ドガァッ！！

シン「ぐあっ？！ 何だと！？」

デステイニーは背後から撃たれ、左ウイングを被弾した。
幸い、ウイングの損傷は軽微だが、システムに異常をきたし、ハイパーモードは強制終了された。

シン「クソッ！」

デステイニーは振り向き、GNビームライフルをその敵に向けた。

ドガッ！

シン「なっ？！」

デステイニーのGNビームライフルは破壊された。

コーラサワー「大佐の勝利のためにいっくっ！！」

そう、デステイニーの左ウイングを損傷させたのも、GNビームライフルを破壊したのも全てこのコーラサワーなのだ。

バチイイイイイ！！！！

デステイニーはGNシールドでコーラサワー機の攻撃を受け止めた。

シン「クッ…！ コイツ…！」

デステイニーはGNバスターソード改とGNバスターランチャーを同時に展開し――

シン「なめるなあぁッッ!!」

デステイニーはコーラサワー機にGNバスターソード改を振り回した。

コーラサワー「うおっ?!」

コーラサワー機は辛うじて躲したが――

シン「墜ちろッ!!」

デステイニーは即座にGNバスターランチャーを構え、コーラサワー機を撃った。

ダウンッ!!

コーラサワー「2度も当たるかよぉおおおおおッッ!!」

コーラサワー機は一度攻撃を躲した体勢で有り得ない動きでデステイニーの至近距離からの砲撃を躲した。

シン「何だと!!? 乗っているのは只のパイロットじゃない! くっ!!」

デステイニーはコーラサワー機を追撃した。

コーラサワー「コイツをくれてやる！」

コーラサワー機はGNランスをデステイニーに投げ付けた。

シン「そんなこと！」

デステイニーはGNランスを真つ二つにし、尚もコーラサワー機に迫った。

シン「はあああああッッ！！！」

デステイニーはGNバスターソード改をコーラサワー機に降り下ろした。

バチバチイイイイイッッ！！！！

コーラサワー機は両手に持ったGNビームサーベルを交差させ、デステイニーの攻撃を受け止めた。

シン「コイツ……！」

コーラサワー「フッ、今だ！」

シン「えっ……?!」

コーラサワーの合図で2機のジnkス？がデステイニーを挟むように出てきた。

そう、コーラサワーの狙いはこれなのだ。

コーラサワーはデステイニーに吹っ飛ばされた時に『大佐の作戦を壊しかねない危険なガンダム』と判断し、デステイニーの隙を突く為に隠れ、デステイニーの一瞬の隙を突いた攻撃でデステイニーはハイパーモードを強制終了させられ、更にGNビームライフルも破

壊された。

流石にGNバスターランチャーの攻撃は危なかった様だが、それでもまんまとデステイニーを誘きだす事に成功した。

フェルト「デステイニーが！」

マユ「えっ?！」

コーラサワー「これで終わりだ！ ガンダム!!」

コーラサワーは勝利を確信した。

だがしかし――

ドガアッ!! ドガアッ!!

突如2機のジンクス?があらぬ方向からのビームによって撃墜された。

コーラサワー「うっ! なんだ?！」

ドガッ!!

コーラサワー「ぐわああ~~~~!!??」

コーラサワー機は頭部にデステイニーのGNクローを使った平手突きを食らって吹っ飛んだ。

コーラサワー「たいさあああああああ……」

最後は何時ものコーラサワーでした（笑）

シン「やっと来たか！」

デステイニーはトランザムライザーが撃ち損じたアヘッドをGNバスターランチャーで撃墜した。

ティエリア「あれは…。」

スメラギ「ドッキングしたのね。ダブルオーライザー。」

シン「ナイスタイミング！」

『圧縮粒子…充填完了。』

刹那「！ 声が…！」

トランザムライザーはその声のした方に向かった。

リヴァイブ「フッ、これで終わりだ。」

そこにはガデッサがプトレマイオス2に止めを刺そうとしていた。

刹那『新型か！』

リヴァイブ「声?!」

トランザムライザーはGNソード?をビームサーベルモードにし、隕石を切り裂いた。

リヴァイブ「そこかあッ!」

ドオオオオオオオオオオ!!

ガデッサはその攻撃を避け、プトレマイオス2を撃沈する為に貯めていたGNメガランチャーを撃った。

だが、トランザムライザーはそれを軽々しく躲した。

リヴァイブ「くっ！　まだだー！！」

ガデッサはGNメガランチャーを、ビームを放ったまま横に動かし、トランザムライザーを葬ろうとした。

ウィイウィイウィイウィイ…

GNドライブは唸りを上げ、トランザムライザーはガデッサの攻撃を躲し続けながらガデッサに接近した。

リヴァイブ「バカな！　しかし、私は…」

ガデッサはGNビームサーベルを取り出し

リヴァイブ「イノベーターだー！！」

GNメガランチャーのビームを止め、GNビームサーベルの一撃は、トランザムライザーを貫——

刹那「——ッ！」

リボンズ「はっ…！！？　そ、そんな…？！」

——　かず、トランザムライザーは『消えた』。

リヴァイブ「なんだ…？」

ピピッ！

リヴァイブ「そこ…！？」

トランザムライザーに翻弄されるガデッサは、GNメガランチャーを破壊された。

リヴァイブ「くっ…！ なめるなあぁ…！」

だが、ガデッサの攻撃はまたしても空振りになった。

刹那「うおおおおおおおッ…！！」

『量子化から再構成した』トランザムライザーの一撃を食らい、ガデッサはコアファイターを射出、そのまま爆散した。

リヴァイブ「やられた…？ イノベーターである、私が…？」

そしてこの直後、トランザムライザーはトランザムを終了した。

シン「ッ！ 感覚が…?!」

デステイニーはアヘッドを殴り付け、GNビームライフルを奪い、蹴り、奪ったGNビームライフルで撃破した時だった。

シン「クッ！ トランザムが終わったのか…ん？」

シンは敵MS部隊の動きに変化が起きた事に気付いた。

シン「何だ…？ 撤退している…？」

シンは敵MS部隊が撤退していくのを確認すると、深く息を吐き、シートに深く腰掛けた。

フェルト「敵MS部隊、撤退を開始しました。」

スメラギ「トレミー砲撃中止。ガンダム各機警戒態勢。」

ティエリア「了解。」

ラッセ「刹那のやつ、何機落とした？」

アニュー「10機近いと思います。」

スメラギ「気を抜かないで。私達の今の目的は衛星兵器破壊よ。ミレイナ、ご両親のことが心配でしょうけど、カレルを使ってガンダムとトレミーの補修をお願い。」

ミレイナ「了解です。」

アレルヤ『こちらアリオス。輸送艇を安全圏まで護衛した。ミレイナ、お母さんは無事だから。』

フェルト「よかったね。ミレイナ」

ミレイナ「はいです！ 補修いつてくるです！」

ミレイナは補修の為にブリッジから出た。

シン「ミレイナ、デステイニーの修理とシステムの復旧を頼む。」
ミレイナ「はいです！」

シンはミレイナにデステイニーを預け、格納庫から出た。

マユ「お兄ちゃん！」

シン「無事だったか。」

マユ「それは此方のセリフだよ！」

シン「まあな。刹那が来なかったらどうなってたか。」

シンはそう苦笑いを浮かべながら言った。

マユ「でも、無事でよかった…。」

マユはシンを抱き締めた。

シン「マユ…。だけど、未だだ。衛星兵器破壊のミッションがある。」

マユ「あ…。」

シン「大丈夫、そう簡単には死なないから。な？」

シンはそう言って笑って見せた。

マユ「うん。」

シンとマユは自室に戻った。

その最中だった。

シン「ん？」

シンは何か声が聞こえたので、マユと一緒にその方に向かった。

シン「ロックオン？」

シンは待機室の前にロックオンがいた。

その声は待機室からだった。

シン「……………」

シンとマユは何も言わずにその声を盗み聞きをする事にした。

刹那「沙慈・クロスロード。」

沙慈「ルイスの声が聞こえたんだ。MSに乗っていたんだ。僕の名を呼んでたんだ。」

シン「あつ…。」

実はあの時、シンは沙慈が誰かを読んでいる声が『聞こえた』。だが、シンは目の前の敵に集中した為、そこまで気にしなかった。

刹那「何故、彼女はアロウズに。」

沙慈「決まってるだろ。ガンダムが憎いんだよ！ルイスの両親は、ガンダムに殺されたんだ！君らのせいだ。君らのせいでルイスはアロウズに入って、そして、なぜ…なぜなんだ？どうしてこんなことに…」

マユ「沙慈さん…。」

シン「……………」

刹那「（どうしてこんなことに…。そうだ、俺もずっとそう思っていた。運命に抗うには…。）戦え。ルイス・ハレヴィを、アロウズから取り戻すには戦うしかない」

沙慈「僕が…戦う？」

刹那彼女のこと大切に、出来る筈だ。」

沙慈「くっ…！人殺しをしろっていうのか？！」

刹那「違う。彼女を取り戻す戦いをするんだ。」

沙慈「そんなの詭弁だ！戦えば人は傷付く！ルイスだって！」

刹那「お前のための、戦いをしろ。」

沙慈「ッ…！」

ドガッ！

沙慈は刹那を殴り飛ばした。

沙慈「冗談じゃない！ 僕はお前らとは違うんだ！ 一緒にすんな！」

沙慈は部屋から出ていった。

ガシッ！

沙慈「えっ？」

ドガッ！

沙慈「ぐふっ！」

ロックオン「おいつ？！」

マユ「お兄ちゃん？！」

シンは沙慈が部屋から出てきたと同時に掴み、そして殴り飛ばした。

沙慈「なっ…、何を…」

シン「アンタはそうして『何も』やらなくていいさ…。」

沙慈「えっ？」

シン「だけどな、そのルイスは俺達CBが叩くアロウズに所属している。その意味が分かるか？」

沙慈「えっ… あっ…！」

シン「ルイスは俺とか他のマイスターが撃つ可能性だって有り得るんだよ。」

沙慈「ああ……！」

シン「だから、アンタが『戦う』んだよ。ルイスを取り戻す戦いをな！」

沙慈「……ッ！」

沙慈はシンを睨み付け、その場から立ち去った。

シン「……敢えて刹那が言ってたみたいに言っただけど、どうだろ？」
ロックオン「知るかよ。しかし、アンタは不器用だな。」

ロックオンは刹那を見て、そう言った。

刹那「何？」

ロックオン「あの坊やにハッキリ言っただけならいいじゃないか。
『戦闘は俺が引き受ける、お前は説得でも何でもして彼女をアロウズから取り戻せ』ってな。」

刹那「うまくいくとは限らない。」

ロックオン「だが、やる気満々だ。過去の罪滅ぼしかい？」

刹那「過去じゃない、未来のためだ。」

シン「未来のため、か……」

その後、シン達は機体の補修作業に戻った。

その頃、メメントモリは第二射を行い、リチエラの軍事基地を、付近の100万人規模の難民キャンプごと葬った。
そして、スメラギからの伝達が届いた。

スメラギ『スメラギより、総員に通達。トレミーの外装部の補修作業が終了次第、トランザムで最大加速、オービタルリング上にある敵衛星兵器に攻撃を開始します。ガンダムの補修は加速航行時にも続行。皆、頼むわね。』

シン「クッ！ 何とかシステムは復旧出来た…！ マユ！ ライフルは？」

マユ「もうちょっとで終わりみたい！」

シン「そうか…、アロウズめ、一体何処までやる気なんだ…？」

ピピッ

シン「機体状況、オールグリーン。GNドライブ、トレミーに接続。……接続完了。……フウ……」

ハロ「シン、シン。ライフル直ッタ、ライフル直ッタ。」

シン「そうか、有り難う。マユ、ブリッジに行こう。」

マユ「うん。」

シンとマユはブリッジに向かった。

そして、プトレマイオス2はトランザムを起動し、メメントモリの所に向かった。

その頃、メメントモリにはカタロンの宇宙艦隊が攻撃を仕掛けていた。

だが、メメントモリは砲身を変え、カタロンの第二艦隊の半数を消滅させた。

アニュー「第三射が、放たれた…」

スメラギ「フェルト、分析を！」

フェルト「了解。」

アレルヤ「あの兵器、宇宙にも撃てるのか。」

シン「あんなのありかよ！？」

ティエリア「何を狙った？」

ロックオン「カタロンの宇宙艦隊だ！」

ティエリア「なんだって？！」

ロックオン「くそったれが！」

シン「カタロンもあれを破壊しようとしたのか…。」

刹那「これが連邦の…いや、イノベーターのやり方。」

一同はメメントモリの力に驚愕するも、これを破壊する事を決意した。

第14話 メメントモリ攻略戦（前書き）

アロウズを退けたCBは、メメントモリの破壊に向かった。

第14話 メメントモリ攻略戦

ブトレマイオス2はダブルオーライザーを射出し、カタロン艦隊の援護に向かわせた。

ミレイナ「ダブルオーライザーから送られてきた衛星兵器のデータ、表示するです。」

ミレイナはメメントモリのデータをモニターに出した。

アニュー「やはり、オービタルリングの粒子加速器を利用した自由電子レーザー掃射装置ですね。」

フェルト「この護衛艦の隊形…、スメラギさんの予測通り、砲頭には発射角度の制限がありそうです。」

シン「だけど、どうやって攻略を…?」

ピピッ

ミレイナ「あつ、ノリエガさん。エージェントからの暗号データが送られてきました。」

シン「衛星兵器のか?!」

ティエリア「王留美から? 今まで何を…」

スメラギ「表示してくれる?」

ミレイナ「はいです。」

ミレイナは送られてきた暗号データを開示した。

シン「これは？」

スメラギ「ハッ！ 衛星兵器の内部構造。」

シン「マジで！？」

ロックオン「お前が予想してたんじゃないのかよ…？」

シン「いや…この状況だからそうだと思ったんだけど、まさか当たるなんて思わなかったからさ…ハハハ…。」

アレルヤ「どうやって入手を？」

シン「この際、何でもイイじゃないですか。折角手に入った情報ですから。」

アレルヤ「まあ…そうだけど。」

スメラギ「（衛星兵器の弱点である、電磁場光共振部の位置が…）これで作戦は決まったわね。衛星兵器の死角から接近しての直接攻撃。ティエリアとロックオンの精密な連携は、必須事項よ。」

ラッセ「防衛部隊はどうする？」

スメラギ「強行突破します。」

シン「えっ？」

ラッセ「繊細なんだか、強引なんだか。」

スメラギ「どちらも必要。ミッション、すぐにでも始めるわよ。」

皆「了解！」

一同はメメントモリのデータを元に、攻略戦の準備を開始した。

だが、そのデータはネーナ・トリニティの個人的な理由で送り付けたというのは、一同は知らない。

シン「…って、俺とアレルヤさんは？」

スメラギ「それは後から通達するわ。」

シン「…了解しました。」

沙慈「ルイスを知ってるんですか？」

マリ「はい。といっても、彼女が着任した直後あたしはここに。」

沙慈「ルイスはMSの…」

マリ「はい、パイロットでした。」

沙慈「やっぱり…やっぱりあの時、ルイスは近くにいたんだ。」

マユ「沙慈さん…。」

ピピッ

スメラギ「クロスロード君とマユちゃんを連れて、ブリッジに来てもらえる？」

マリ「わかりました。」

スメラギ「それと、あなたに頼みたいことがあるの。」

マユ「マリーさんに…？」

マリ「あたしにですか？」

スメラギ「ええ、それはブリッジに来てからで。」

マリ「わかりました。」

マリー達はブリッジに向かった。

フェルト「ガンダム各機、所定の位置につきました。」
スメラギ「皆、いいわね。ミッション開始！！」

そして、ミッションは開始した。

その頃、ダブルオーライザーはガデッサと戦闘を行っていた。

「頂くよ!」

刹那「くっ、新型が誘いに乗った。」

グレーを基調としたガデッサに乗っているのはリボنزと同じ塩基配列パターン0026タイプの遺伝子を持つ『イノベーター』、ヒリング・ケアだ。

ヒリング「はああああ!」

刹那「イノベーター…!」

ヒリング「ご存じじゃないさ!」

ドウッ!

メメントモリに向けてビームが撃たれた。

ヒリング「ッ!? 何?」

刹那「来たか。」

そのビームはプトレマイオス2からだった。

ラッセ「全砲門を開いた。」

フェルト「目標到達まで543秒コンドです!」

スメラギ「頼むわよ。シン、ティエリア、ロックオン!」

「敵艦発見！ オービタルリングに沿って、こちらに向かってきます。」

リント「やはり、オービタルリングの死角を狙ってきたか。迎撃艦隊、メメントモリの射線軸上に押し出せ！」

防衛部隊はプトレマイオス2に攻撃を開始した。

スメラギ「ラッセ！」

ラッセ「おうさ！」

プトレマイオス2はGNフィールドを展開し、攻撃を防いだ。

アニュー「せ、船体が右側へ押し出されて……」

フェルト「衛星兵器の射線上まで、残り14！」

プトレマイオス2は防衛部隊の攻撃により、メメントモリの射線軸上に押し出されつつあった。

「メメントモリ、電子チャージ完了。」

リント「掃射準備。」

「了解。共振開始します。」

リント「ふん……！」

フェルト「トレミー、敵衛星兵器の射線軸上にはいりました！」

ドガアッ！

マユ「うつ！？」

フェルト「きゃあ！ スメラギさん！」

スメラギ「まだよ、まだ！」

ラッセ「けどよ！」

スメラギ「まだよ！」

リント「メメントモリ、掃射開始！」

マリー「今です！」

スメラギ「アレルヤ！」

そして、メメントモリは照射し、プトレマイオス2を『飲み込んだ』。

ヒリング「あっははははッ！ ははは！ はははッ！！ 終わったね。」

刹那「…ッ。」

「掃射、終了しました。」

リント「フッ、後はケア大尉が2個付きを倒せば…」

「しょ…少佐、敵艦が！」

リント「何？ うん？」

其処には、トランザムによって紅く輝くプトレマイオス2が現れた。

リント「バ、バカな！？」

アレルヤ「トランザム。」

実はこれはマリーの脳量子波でメメントモリの照射タイミングを計り、スメラギが指示を出したのだ。

スメラギがマリーを呼んだのはこの為である。

リント「敵艦に攻撃を！ メメントモリ、再チャージに入れ！」
「りよ、了解！」

防衛部隊はプトレマイオス2に攻撃を開始した。

ゴアッ！！

突如一筋のビームが有らぬところから放たれて一隻の巡洋艦に命中、巡洋艦は貫通しての撃沈とはいかなかったが衝撃でもう一隻の巡洋艦と激突し、轟沈した。

リント「なっ…何いッ!？」

「…ったく、スメラギさんも無茶苦茶な事を言う。」

そこにいたのは、GNバスターランチャーに即席の保持用グリップと砲身の凡そ半分のクリスタルセンサーが取り付けられ、更に頭部には顔を覆い隠す程の急造のマスクセンサーが取り付けられたデステイニーだった。

スメラギはシンにGNバスターランチャーの攻撃力を使った超長遠距離の砲撃を指示したのだ。

シン「だけど巻き添えでもう一隻落とせたのは幸運だったな。さてと、もう一隻も叩く。ハイパーモード!!」

デステイニーのウイングユニットが展開し、光の翼が現れた。
シン「食らえッ！」

ドゥンッ!!

デステイニーの一撃は、もう一隻の巡洋艦を貫通、巡洋艦は爆散し

た。

リント「クツ！ MS隊発進！ アレを叩け！！」

メメントモリからデステイニーに向けてMS隊が発進した。
但しデステイニーは、GNバスターランチャーの大力と大火力でなければGNスナイパーライフルでも届かない超長遠距離にいた。

ミレイナ「第3デッキ、ハッチオープンです！」

フェルト「セラヴィー、ケルデイル、攻撃態勢に入りました。」

スメラギ「（アリオスのトランザムは全てトレミーの推進力に回している。GNフィールドは使えない。）ロックオン！」

ロックオン「オーライ。トランザム！」

ケルデイルはトランザムを始動した。

ロックオン「行くぜ、ハロ！」

ハロ「シールドビット展開！ シールドビット展開！」

ケルデイルからGNシールドビットが分離し、プトレマイオス2の防衛を行った。

シン「チッ！ こつからじや貫通してオービタルリングに当たる！」

デステイニーはMSを数機が撃破し、もう一隻の巡洋艦を撃とうとしたが、オービタルリングに当たる為に攻撃が出来なかった。

シン「クッ！ だったらッ！ 『トランザム』！！」

デステイニーはトランザム『も』始動した。

シン「ぐっ…！ ううッ…！ オオオオオオオオオッ…！」

シンはデステイニーのハイパーモードとトランザムを同時に使用しての機動による、GN粒子でも軽減仕切れない程のGによって苦痛の表情を見せているが、巡洋艦に向けて突撃を仕掛けた。

ミレイナ「アリオス、トランザム限界時間まで、94秒コンドです！」

ロックオン「まだかよ！？ このままじゃビットが持たねえ！」

巡洋艦が三隻撃沈したとはいえ、アロウズの攻撃は激しく、GNシールドビットは次々と破壊された。

スメラギ「もう少しだけ、堪えて！」

ピピッ！

フェルト「！？ デステイニー、ハイパーモードとトランザムを同時に使用しています！」

マユ「えっ？」

スメラギ「なんですって！？」

スメラギはデステイニーに通信を行った。

スメラギ「シン！ 今すぐトランザムを止めて！ そんな事したらあなたの体が！」

シン『おっ…俺は…だっ…大丈夫です…から…！』

マユ「お兄ちゃん！」

シン「俺は…こう…見えても…丈夫な…方です…から…！」

スメラギ「でも！」

シン「アンタは前を見てればいい！！」

スメラギ「！！」

シン「アンタの戦術であの衛星兵器を破壊しろ！！」

デステイニーはGNビームウイングソードで敵MSを斬り、GNバスターソード改を引き抜いた。

シン「うおおおおおおおおおおああああああッ
ッッ！！！！」

デステイニーはGNバスターソード改を巡洋艦のブリッジに叩き込んだ。

シン「後は…頼みました…よ…。」

デステイニーはそのままこの宙域から一時離脱した。

マユ「お兄ちゃん…」

スメラギ「シン…」

ヒリング「雑魚が、偉そうに！」

ガデッサはダブルオーライザーから逃れ、プトレマイオス2に攻撃を行おうとした。

ザンツ！

ヒリング「うつ！ くっ！」

刹那「お前の相手は、この俺だ！」

ダブルオーライザーはガデッサのGNメガランチャーを斬り裂いた。

「迎撃『部隊』、突破されました！」

『艦隊』は壊滅した為、『部隊』という言葉を使った。

リント「攻撃を集中しろ！ チャージは？」

「28%です！」

リント「クッ！」

ハロ「シールド限界！ シールド限界！」
ロックオン「まだだ！ まだ持たせる！」

デステイニーによって敵戦力はかなり減らせたが、それでも危険な状況に変わりはなかった。

ドガアッ！

皆「うつつ…！」

スメラギ「もつと…もつと接近して！」

ミレイナ「くう…！」

フェルト「アリオスのトランザムの限界時間です！」

スメラギ「（作戦を完遂させる。）」

「ケルデイムのシールドビットが！」

スメラギ「（どんな手を使っても。）」

マユ「うあ…！」

沙慈「うっ…！」

スメラギ「（私の戦術で、皆を！）ティエリア！」

ティエリア「了解。トランザム！ ハイパーバースト完全開放！」

リント「ああ…！」

リントはセラヴィーのトランザムハイパーバーストを見て、戦いた。

スメラギ「GNミサイル一斉発射！」

ラッセ「食らえッ！」

セラヴィーのトランザムハイパーバーストとプトレマイオス2の大量のGNミサイルがメメントモリに襲い掛かった。

ドガガガガガガア…！！

だが、メメントモリの共振部を破壊するには至らなかった。

リント「はっ… ああ… ははっ…、どうやら火力が足りなかったか。メメントモリの共振部を破壊するまでには。」

「少佐！」

リント「ん？ 何？ あ、あれは！？」

攻撃によって露出した共振部を、ケルディムが狙っていた。

ロックオン「ハア… ハア… あれが、電磁場光共振部。チャンスは一度！」

スメラギ「ロックオン。」

フェルト「ライル。」

アニユー「…ッ！」

アレルヤ「ロックオン。」

ティエリア& amp; シン「ロックオン・ストラトスッ！！！」

ティエリアと宙域に戻ってきたシンが叫んだ。

ロックオン「その名の通り、狙い撃つぜえッ！！！」

ロックオンの叫びと共に発射したビームはメメントモリの共振部を貫き、メメントモリは爆散した。

リント「ああ… あああ… いやあああああああ！！！」

リントの乗る巡洋艦はメメントモリの破片に押し潰された。

フェルト「衛星兵器の破壊、確認しました。」

スメラギ「トレミー、速度を維持したまま現宙域より離脱。ダブルオーライザーとデステイニーに後退を。」

ミレイナ「了解です！」

ミレイナはダブルオーライザーとデステイニーに後退信号を送った。

刹那「後退了解。」

シン「了解しました！」

ダブルオーライザーとデステイニーは離脱を行おうとした。

ヒリング「よくもおおお！」

ガデッサはダブルオーライザーに攻撃しようとしたが、有らぬところからの『紅い』ビームに邪魔をされ、ダブルオーライザーに腕を斬られた。

ヒリング「くっ！ 何？ 援軍？ あっ！ ガンダムううー！
！ クッ！」

ヒリングはダブルオーライザーが逃げた事に怒りを隠し切れなかった。

刹那「あの援護…赤いビーム…、疑似太陽炉搭載型。」

シン「刹那！」

刹那「シンか。大丈夫か？」

シン「大丈夫です！」

そう言ったシンだが、口元には吐血の後があった。

刹那「そうか。合流ポイントに向かう。」
シン「了解！」

ダブルオーライザーとデステイニーはプロトレマイオス2との合流ポイントに向かった。

そして、地球で刹那とシンは出会う、『歪みの根源』と。

第14話 メメントモリ攻略戦（後書き）

…シンの出番がこんななのは、後々『ハイパーモードとトランザムの同時発動』の反動と『リボنزとの出会い』をさせたいからですね。

後、ハイパーモードとトランザムの同時発動で戦闘機動なんかやったら、普通の人間だったら内臓が惨い事になります。

第15話 歌が聴こえる（前書き）

シンと刹那は遂に『世界の歪み』と対峙する…

第15話 歌が聴こえる

ダブルオーライザーとデステイニーはプトレマイオス2との合流ポイントに向かっていた。

刹那「合流ポイントは、この辺りの筈だが…」

シン「どういうことだ？ スメラギさんが合流ポイントを間違える筈が…ッ!？」

シンは『何か』を見付け、驚愕した。

シン「せつ…刹那!」

刹那「どうしたシン…なっ?! これは!？」

刹那もそれを見て驚愕せずにはいらなかった。
何故なら、そこにあったのはプトレマイオス2の破片だからだ。

シン「どうなっているんだこれ…?」

刹那「まさか…トレミーはどこに? ん?」

ダブルオーライザーはプトレマイオス2の破片の中に『紅い粒子』を出す『MA』を見付けた。

刹那「この機体は…赤いGN粒子。」

シン「まさか、あの機体がトレミーを?」

『はい、刹那。久しぶりね。』

シン「通信?!」

刹那「ハッ！ ネーナ・トリニティ。」

シン「ネーナ・トリニティ？ ハッ！ スローネの！」

ネーナ「うふっ、いい男になっちゃって。ネーナ、ドキワクね。」

ダブルオーライザーとデステイニーは戦闘態勢をとった。

ネーナ「ちょ、ちょっと待ってよ！ さっき助けてあげたでしょ。

それより、君らの船、地球に落っこちたみたいよ。」

シン「何？」

ネーナ「戦闘データを転送してあげたから、それを見れば行方も……」

ダブルオーライザーは即行で地球に向かった。

シン「ちょっ？！ 刹那はやっ？！ ってかデータは？！ ……ああ！

もう畜生ッ！」

デステイニーはダブルオーライザーの後を追った。

ネーナ「って、急ぎすぎだってば！ せっかちなんだから、もう。」

H A R O「フラレテヤンノ、フラレテヤンノ、フラレテヤンノ。」

ネーナ「うっさい！」

H A R O「痛ッ！」

ネーナはH A R Oを叩いた。

プトレマイオス2の医務室で医療カプセルの中で寝ていたイアンが

起きた。

イアン「ん…ん…うっ…ん…。オ…オーライザーは？ 戦闘は？」

イアンは医療カプセルから出て立ち上がった。

イアン「おっ、重力？ いつの間に地上に？ ん？」

イアンは医務室から出た。そこには――

イアン「なっ、何？ なんじゃこりゃあああああッ！！！」

医務室の前には穴が空いており、そこから自然豊かな光景が見えた。

フェルト「対監視用光学用迷彩復旧、展開します。」

そして、プトレマイオス2は光学迷彩で周囲の景色と同化した。

イアン「つまり、ダブルオーライザーを起動させ、ラグランジュ3の敵を退けたものの、アロウズが衛星兵器を使用したのを知り、そのいつの破壊ミッションに突入。見事うち倒したが敵の奇襲を受けて地球圏に落下、地上に不時着。しかも刹那ののったダブルオーライザーとデステイニーとはぐれてしまったと、そういうことか？」

ミレイナ「そのとおりですう！」

イアン「最悪じゃないか！」

ラッセ「そう言うなよ、おやっさん。衛星兵器は破壊したんだ。」

フェルト「それに、GN粒子を使い切った所に、奇襲を受けたんです。」

ティエリア「しかも敵部隊は新型のMAまで投入してきた。船が被弾した衝撃を加速に利用し、かつ、船体をスモークでカムフラージュして地上に降りるといふ、スメラギ・李・ノリエガの機転がなければ…我々は確実にやられていた…。」

ラッセ「命があっただけ、めっけもんだぜ。」

イアン「で、トレミーの状況は？」

フェルト「エンジンは無事でしたが、航行システムや火器管制通信、センサー類の損傷が酷くて…」

イアン「なんてこった…。こんな時に、敵さんに襲われでもしたら…。」

プシュー

マリー「皆さん、食事をお持ちしました。」

ミレイナ「わぁ～いですう！」

イアン「のんきだろ！ それ！ クソッ！ こんな時にシンがいれば…！」

ラッセ「突っ込みだけの存在かよシン。」

ティエリア「後でシンにそれを言うか。」

イアン「いや、待て。ワシがシンにボコされる未来しか見えんぞ！？」

ラッセ「で、また医務室送りか。大変だな、おやつさん。」

イアン「ハア…。」

イアンは頭を抱えた。

マユ「……………」

マユはプトレマイオス2の外にいて、体育座りでただただ景色を見て——否、何処も見えてはいなかった。

マリ「マユちゃん、食事よ。」

マリはマユの食事を持ってきた。

マユ「……………」

だが、マユは何も言わず、動きもしなかった。

マリ「……………」

マリはマユの近くに食事を置き、自分はマユの隣に座った。

マリ「あの景色、キレイね。」

マユ「……………」

マリ「食事、食べないの？」

マユ「……………」

マリ「…それじゃ、シンの事が心配なの？」

マユ「……うん……」

マユはやっと返事をした。

マリ「そう、お兄さん思いの子ですね。」

マユ「マユ、我が儘だから……」

マリー「え？」

マユ「小さい頃、島の反対側に親戚の人が住んでね、お兄ちゃん、一人でその親戚の所に行こうとしてたのね。」

マリー「……………」

マリーは黙って聞く事にした。

マユ「マユはどうしてもお兄ちゃんと一緒に行きたかったんだよ。貯めたお小遣いを出して。」

マリー「でも、それじゃ喧嘩するよね？」

マユ「うん。よく考えるとあれがお兄ちゃんと本気で喧嘩した唯一の出来事だったな……。」

マリー「それで？ どうなったの？」

マユ「お兄ちゃんは結局マユに負けて一緒に行っただけだね。」

マリー「そうなんだ。」

マユ「でも、マユも我が儘のままじゃダメなんだよ……。せめて、自分出来る事をしなきゃって思うんだよ。」

マリー「マユちゃん……。」

ぐるるるる……

マユ「！」

マユのお腹が鳴った。

マリー「ふふ、お腹空いてたんだね。」

マユ「う……うん……。」

マリー「はい。」

マリーはマユに再び食事を渡した。

マユ「…頂きます…。」

マユは食事を貰い、食べ始めた。

その頃、刹那とシンはプトレマイオス2の搜索をしていた。

刹那「トレミーの反応は？…ハッ！」

シン「これってまさか…！？」

二人が見付けたものは、巨大なクレーターだった。

刹那「こ、これは衛星兵器の…。これも、全てイノベーターが仕掛けた事…！」

シン「クッ…！ 何でこんな事を…！」

ピピッ！

シン「何！？…あれは…？！」

刹那「あっ…はっ！ ああ…何故だ…ヤツがどうしてここにいる？！」

シン「あの時の『スローネの発展型』！？」

二人が見た機体は、アリー・アル・サーシェスが乗るアルケーガンダムだった。

シン「何だ…？ 誘っている…？」

刹那「…ッ！」

シン「あ！ おいつ！ 刹那？！」

ダブルオーライザーはアルケーの後を追った。

シン「ああっ！ クソッ！ あのバカ！」

何だかんだでデステイニーもアルケーの後を追った。

刹那「くっ…！ どこへ行く気だ？」

ダブルオーライザーとデステイニーはアルケーの後を追っていた。

シン「何をする気だ…？」

刹那「判らない…だが…」

ピピッ

刹那「あっ！ この方角は…はっ！ クルジス！」

シン「クルジス…？ 刹那の故郷…？」

刹那「あっ！」

アルケーは地上に降り立ち、サーシエスはコクピットから出てきた。

シン「アイツが…アリー・アル・サーシエス…。」

刹那「どういうつもりだ？ アリー・アル・サーシエス！」

刹那もダブルオーライザーを地上に降ろし、コクピットから出て、ダブルオーライザーの手の上に降りた。

シン「……………」

シンはダブルオーライザーの後ろにデスティニーを降ろしたが、コクピットからは出なかった。

サーシエス「よう！ 久し振りだな、クルジスのガキ。いや…もうクルジスの兄ちゃんか。」

刹那「アリー・アル・サーシエス！ 貴様、イノベーターに。」

サーシエス「おうよ。傭兵はギャラ次第でどこにでもつく。」

刹那「あんたの戦いに意味はないのか？」

サーシエス「あるよ？ おめえには理解出来ないだろうがな。」

刹那「クッ！」

サーシエス「待てよ。今日はお前さんに会いたいわって人を連れてきたんだ。俺のスポンサー様だ。」

シン「スポンサー？…まさか…？」

アルケーの背後の建物からとある人物が姿を見せた。

刹那「イノベーターか？」

「そうだよ。名前はリボンス、リボンス・アルマーク。久し振りだね、刹那・F・セイエイ。いや…『ソラン・イブラヒム』。」

刹那「ッ!？」

シン「!？ 刹那の本名を?!」

リボンス「そうか、君にとっては僕は初対面だったね。でも僕にとってはそうじゃない。僕は11年前に君と出会っている。そう…こ

の場所で、愚かな人間同士が争い合う泥沼の戦場……その中で、必死に逃げ惑う一人の少年。僕は君を見ていたんだ。MSのコクピットからね。」

刹那「ハッ！ ま、まさか……。あの機体に……。あのガンダムに……」
リボンス「あの武力介入は0（オー）ガンダムの性能実験。当然機密保持の為、その場にいた者はすべて処分する予定だった。けれど僕は、君を助けた。0ガンダムを……僕を見つめる君の目が、とても印象的だったから。それだけじゃない。ヴェーダを使ってガンダムマイスターに君を推薦したのは僕なんだよ。」

刹那「なっ？！」

リボンス「ふふふっ。」

刹那「礼を言ってほしいのか？」

リボンス「君の役目は終わったから、そろそろ返してほしいと思っ
てね。それは本来、僕が乗るべき機体なのだから……」

「うるせえよッ！！」

リボンス「！？」

刹那「シン・アスカ？！」

シンはデステイニーのコクピットから出て、叫んでいた。

シン「何が役目が終わったとか、自分が乗るべき機体だから返して
ほしいとか、アンタは一体何なんだよ？！」

リボンス「この世界の全てを統べる者、と云えばいいかな？」

シン「じゃあ第6のGNドライヴは知っているのか？」

リボンス「……ん？ 第6のGNドライヴだと……？ どういう意味だ
い？ それは？」

シン「ククッ……！ やっぱ知らないみたいだな……！ 言っ
てやるよ！ そのGNドライヴはどうやら極秘利に造られていてな、後か
ら木星から来た訳だ。」

リボنزの顔から余裕の表情が消えていた。

シン「その際、そのGNドライブが飛来するというデータがヴェーダを通じてGNドライブのブラックボックスに届いたという事だ。」
リボنز「ヴェーダを通じて…？ 何故だ？ 何故ヴェーダを掌握している僕にはそのデータが…ハッ！ まさかイオリアのトラップシステム！？」

シン「そうだ、イオリアのじいさんはな、どうやらヴェーダを掌握しているアンタより、オリジナルのGNドライブを持っている俺達CBに期待しているみたいだな。トランザムシステムも、ツインドライヴシステムも。」
リボنز「くっ…！」

リボنزは怒りを隠し切れなかった。

刹那「そうだ…、俺達は託されたんだ…。ガンダムを、いや、GNドライブを！」

リボنز「ティエリア・アーデと同じことを…！」

刹那「だからここで貴様を撃つ！」

刹那はリボنزに拳銃を向けた。

バアンッ！

刹那「くっ?!」

シン「刹那?! ハッ！」

シンはサーシエを見た。

サーシエは刹那よりも早く拳銃を抜き、刹那の右肩を撃った。その拳銃の銃口から『紅い粒子』が出ていた。

シン「コイツ！」

シンは拳銃を引き抜こうとした。

刹那「止めるッー！」

シン「えっ？」

刹那「こ…コイツは俺が…！」

シン「そんな怪我で！？」

刹那「お前はトレミーに行け…！俺は大丈夫だ…！」

シン「クッ！分かった…！」

シンはデステイニーに乗り、飛び立った。

サーシエス「へえ、そんな身体で一人で戦おうというのか？」

刹那「貴様は…俺一人で十分だ…。」

サーシエス「ハッ、大した自信だな。」

リボنز「…わざとかい？」

サーシエス「大将、俺の生きがいは戦いでね。」

リボنز「好きにすればいい。」

リボنزはその場から立ち去った。

リボنز「あの僕の知らないガンダム…まさか『彼』と同じ…？」

リボنزはそう呟いた。

そして、刹那VS・サーシエスの戦いが始まった。

シン「……………」

シンはプトレマイオス2を搜索していた。
そのプトレマイオス2は――

ティエリア「僕は人間だッ!!!」

ガデッサとガラッゾが襲撃したが、セラヴィーはセラフィムガンダムを使い、ガラッゾを撃破し、ガデッサはアーチャーアリオスにGNメガランチャーを破壊されて撤退した。

シン「チッ、もう夜か。これ以上は無理か…。」

デステイニーは適当な窪みを見付けてその中に入った。

シン「GNシステム、リポーズ開始。外壁部迷彩皮膜展開。」

デステイニーは光学迷彩によって周囲の景色と同化し、シンは溜め息を吐いてシートに深く腰掛けた。

シン「刹那…大丈夫なのか…?」

刹那は、未だサーシエスと戦っていた。

ガギイツ!!

刹那「ぐあああ!」

サーシエス「肩の具合はどうだい?!」

ドガッ!

刹那「くっ…! ううッ!」

サーシエス「ファンゲッ!」

アルケーはGNファンゲを射出した。

ダブルオーライザーはGNファンゲの攻撃を躲しつつ、GNファンゲを撃破した。

サーシエス「隙ありいッ!」

アルケーは爪先のGNビームサーベルでダブルオーライザーを攻撃した。

だが、ダブルオーライザーはその攻撃を躲し、更にアルケーの爪先を斬った。

サーシエス「あの体での動き…何だ? アイツは?!」

刹那「ああ…! はあ…!」

アルケーは更に攻撃したが、ダブルオーライザーは躲し続けた。

サーシエス「チッ! 調子に乗りやがって。」

ピピッ

サーシエス「ん？ こいつは…！」

サーシエスは付近を飛んでいたカタロンの航空機に気付いた。そのカタロンの航空機は『連邦のクーデター派』と接触する為に飛んでいたのだ。

シーリン「クラウドス！ MSが！…あつ、ガンダム！」

クラウドス「護衛にきてくれたのか？」

だが、相手はアルケーだった。

アルケーはカタロンの航空機にGNバスターソードを向けた。

サーシエス「はははは！ コイツは物質ってやつだ。手出しは無用で…何？！」

アルケー目の前に突然『トランザムライザー』が現れ、アルケーはトランザムライザーの攻撃を受けて航空機から離された。

サーシエス「ううう…！ ファング！」

だが、トランザムライザーは一斉掃射でGNファングを纏めて消し飛ばした。

更にトランザムライザーは反撃するアルケーを攻撃した。

サーシエス「ううううツツ…！」

まともに反撃すら出来ないアルケー。

刹那「うおおおおツツ…！」

そしてトランザムライザーの一撃がアルケーに届こうとした時だった。

『刹那…刹那…刹那……』

刹那「——ッ！」

シン「声?!」

刹那はその声にGNソード?を止め、シンは驚いた。

因みにデステイニーがいる地点からトランザムライザーとアルケーの交戦地点はそこまで離れていなかったりする。

『なくす事が♪ 拾うためなら♪ 別れるのは♪ 出逢うた
め♪』

アルケーはコアファイターを射出し、落ちていった。

『さようなら』の、あとにはきつと』

クラウド「シーリン……」

シーリン「どうして……」

シン「トランザムライザー……?」

『「こんにちは」と出逢うんだ♪』

シン「歌が……」

刹那「聴こえる。歌が……」

『お金があつても♪ 友達はいえない♪ なにもなくてもね♪』

『みんながいるんだ♪ みんなきいて♪ 僕たちの夢♪』

クラウド「聴こえるか? シーリン。」

シーリン「ええ、この歌は、マリナの……」

サーシェス「何だ? なんで歌が聞こえる?!」

サーシェスはアルケーのコアファイターの中でそう言った。

『僕はね〜 元気だよ〜 あなたはどうしてる〜 僕はね〜
♪ 元気だよ〜』
刹那「何故…俺は…戦いを…」
シン「…どんなに矛盾しても、罪と罰を背負うとも、俺は戦う。こ
の歌声を守る為に…！」

自らの戦う意義に迷いが生じた刹那と、戦う意義を見出だすシン。
果たして、この二人が辿り着く答えとは…？

第15話 歌が聴こえる（後書き）

マユの話は実は元ネタがあり、元ネタはお。かみ。くしです。
まあ、向こうとは全く異なる展開ですけどね…

第16話 反抗の凱歌（前書き）

ダブルオーライザーと分かれたデスティニーはプトレマイオス2を探すが…

第16話 反抗の凱歌

シン「…朝…か…。」

シンはあの後、デステイニーのコクピットの中で眠りに就き、そして朝を迎えた。

シン「さてと、行くか。GNシステム、リポーズ解除、外壁部迷彩皮膜解凍。」

デステイニーは光学迷彩を解凍し、そのマスクセンサーに隠されたツインアイを光らせた。

シン「デステイニー、出る。」

デステイニーはウイングユニットを展開し、空へと飛び立った。

シン「そういえばあれ…、もしかしてダブルオーライザーが近くにいるのか？…いや、今はトレミーを捜そう。」

デステイニーは飛ぶスピードを上げた。

シン「クソッ！トレミーは一体何処に?!」

デステイニーは急造とはいえ、超長距離から巡洋艦を捉える能力を持つマスクセンサーでプトレマイオス2を探していた。

ピピッ！

シン「ッ！　トレミーか?!」

暫しの間ブトレマイオス2を捜していたデステイニーのセンサーは何かの反応をキャッチした。

シン「!?!　これって…?!」

デステイニーがキャッチしたものは、『アロウズのMS隊』だった。

シン「アロウズ!?　こんな大群で……ハッ！　まさかこの先に…?!」

シンはアロウズに気付かれない程度の距離を保ち、行動しながらそのMS隊に付いて行った。

幸い、彼方のセンサーより、『急造の』マスクセンサーの方が勝っており、相手に気付かれる事は無かった。

シン「航空機が1機で、MSの数は36機。あの新型のMSとか、MAまで…！　総力戦でもするつもりか…!」

シンは逸る気持ちを抑えながら付いて行った。

シンの立てた作戦はこうだ。

ブトレマイオス2は恐らく動けても武装が使えない可能性がある。しかも相手は圧倒的な数で攻めてくる。

ならばケルディムはトランザムで相手を先制攻撃。

トランザム終了後の粒子チャージの間にアリオス、セラヴィーで迎え撃つ。

そしてデステイニーはその間にハイパーモードとトランザムを同時

使用し、GNビームウイングソードで敵航空機の翼を斬り、GNバスターソード改でMAを叩く。
これがシンの立てた作戦である。

シン「問題はトランザムの発動時間だな…。」

シンはトランザムの発動時間を20秒に設定した。
幾ら一度目の同時使用で（吐血はしたもの）耐えれたとはいえ、
相手は36機、ここで自分が意識を失えば足手まといにしかならない。

トランザムの発動時間の設定はその為の保険なのだ。

ドゥンッ！

シン「ッ！」

突如MS隊にビームが襲った。

シン「これは…ケルデйм！」

シンの読み通り、トランザムを使用したケルデймが攻撃したのだ。

シン「ケルデймがトランザムを終えて、アリオスとセラヴィーが
出てきた時だな。」

デステイニーは待機し、時を待った。

シン「…なっ?!」

それから、ケルデймのトランザムが終了し、アリオスとセラヴィー

ーが攻撃していた時だった。

新型のMA——エンプラスのエグナーウィップがセラヴィーとアリオスを捕らえたのだ。

シン「何やってんだ?! だけど、チャンスはこれしか! ハイパーモード&トランザム!」

デスティニーはハイパーモードとトランザムを同時使用し、超加速を行った。

シン「ぐっ…うつつ…——ッ?!」

シンは強力なGを受けたが、そこで『異変』に気付いた。

シン「(何だ…?! 意識が…『普通』…?!)」

シンは身体はGによって悲鳴を上げているが、意識だけは何故か正常な事に気付いた。

シン「(だけど、やるしかない!) うおおおおおおおおおおおおおッ!」

シンは叫び、デスティニーのGNビームウイングサーベルは航空機の翼を斬った。

シン「おおおおおおあああああああッ!」

そして、デスティニーはエンプラスにGNバスターソード改を降り降ろし——

ザン…ッ…！

エンプラスはGNフィールドを展開する間もなく、右半分を真つ二つにされた。

発動からエンプラスを斬るまで、僅か5秒だった。

シン「まだ…まだぁッ…！！」

デステイニーは後ろに回転し、左手のGNビームライフルを乱射した。

ドガッ！

リヴァイブ「なっ…?!」

一発のビームがガデッサの右肩を直撃し、ガデッサは右腕を損失した。

更に、乱射しているにも拘らず、ビームの大半は命中し、直撃を受けて撃破されるMSもいた。

カティ「クッ!? クジヨウ…やる…！」

航空機は片方の翼を失い、落下寸前だった。

コーラサワー「クソオ！ ガンダムッ！」

カティ「なるべく機体を安定させる！」

コーラサワー「了解しましたぁ！」

コーラサワーの操縦で航空機は何とか安定を保っていた。

カティ「まさか挟み撃ちを仕掛けるとは…クジョウ、お前もやる…！」

だが、デステイニーは偶然このアロウズの部隊を見付けて付いてきたというのは知らない。

ピピッ

カティ「司令部からの緊急暗号通信？…なんだと！？」

カティはその暗号通信に驚愕し、MS隊に撤退命令を出した。

シン「がはっ！ ぜえ…！ ぜえ…！ 何だ…！？」

シンは吐血しながらも撤退するMS隊を見た。

カティ「ク…クーデター…？ 軌道エレベーターが…占拠されただ…と？」

その通信は、『アフリカタワーがクーデターによって占拠された』という内容だった。

ダブルオーライザーは、カタロンからの情報によってアフリカタワーに向かっていた。

刹那「はっ！」

目の前に1機のMSがいた。

刹那「このMSは…フラッグじゃない？」

そのMSは、ユニオンのMS、フラッグに似ていた。

「ぬおおおおッ！！」

そのMS——ミスターブシドーの乗るマスラオはダブルオーライザーに攻撃を仕掛け、唾競り合いをした。

ブシドー「アフリカタワーでの出来事を知れば、必ず会えると信じていた！」

刹那「退け！ 貴様などにかまっている暇は…！ でやっ！」

ダブルオーライザーはマスラオを弾き飛ばした。

ブシドー「邪険にあしらわれるとは。ならば君の視線を釘付けにする。特と見るがいい。盟友が造りし、我がマスラオの奥義を！」

そして、マスラオは『奥義』を発動した。

刹那「あれは…『トランザム』…！」

そう、ユニオンの科学者、故レイフ・エイフマンがメモに書かれてあった手記に基づいてアロウズの技術者のビリー・カタギリがマスラオに実装したのだ。

そして、紅く輝く刀がダブルオーライザーに襲い掛かる。

第16話 反抗の凱歌（後書き）

…流石に目視でならデステイニーを確認出来ると思うわ。（シンはそれを警戒してたとはいえ）

それにマスクセンサーの取って付けたような設定。

幾らプロレマイオス2と合流したいからといってね…

まあ、自己批判はここまでにして、次回の次回をお楽しみに！（
次回』は?!）

第17話 悲劇の序章（前書き）

アロウズは撤退し、デステニーーは何とかプトレマイオス2に帰艦したが…

第17話 悲劇の序章

連邦軍のパング・ハーキュリー大佐によるクーデターにより、アフリカタワーは占拠され、其処にいた6万人は人質になり、アロウズは航空機とエンプラス、ガデッサの損傷も合わせて撤退を余儀なくされた。

アロウズ撤退後、デステイニーはプトレマイオス2に帰艦した。

マユ「お兄ちゃん！」

マユはシンに抱き付いた。

シン「マユ、無事だったか。」

マユ「うん。でも、お兄ちゃん、あんな事をして、大丈夫だったの？」

シン「俺を見る、この通り大丈夫だ。」

ティエリア「シンが無事なのは分かった。刹那とダブルオーライザーはどうした？」

シン「…ああ…」

シンは地上に降りてきてからの事を話そうとした。

フェルト「各員、至急ブリッジに来て下さい。」

シン「チッ、この事は後で話すよ。後、刹那は大丈夫だ。」

ティエリア「…分かった。」

シン達はブリッジに向かった。

ティエリア「クーデター軍による、アフリカタワーの占拠。」

ラッセ「カタロンからの情報通りだな。」

シン「チツ、アロウズが撤退したのは、俺の奇襲を受けた訳ではないのか。」

アニユー「いえ、もしかしたら此方を倒してから向かって行くという可能性もありましたか？」

シン「…まあ、ありがとうアニユーさん。」

アレルヤ「で、どうするんですか？ スメラギさん。」

ラッセ「勿論、協力するんだろ？」

スメラギ「イノベーターはヴェーダを掌握している。なのに、どうして彼らは今回の騒ぎに気付かなかったかしら？」

フェルト「クーデターを予測しながら、見逃していたというんですか？」

スメラギ「その可能性もあるわ。」

ラッセ「だが、アロウズが動き出す以上、黙って見てる訳にはいかないぜ。」

ティエリア「そして、アロウズの裏にはイノベーターの存在がある。」

スメラギ「彼らが何をたくらんでいるとしても、それを解き明かすには現地へ向かうしかないわね。それに、クーデターの情報を刹那が知ったら…」

ロックオン「向かってるな。」

ラッセ「ああ。」

ミレイナ「確実です。」

シン「負傷しててもな。」

スメラギ「どういう事なの？」

シン「話します、地上に降りてきてからの事を。」

シンは地上に降りてきてからの事を話した。

ティエリア「なっ…?!」

アレルヤ「リボンス・アルマーク？」

シン「そうだ。」

ロックオン「まさかそいつがイノベーターの親玉か？」

シンは頷いた。

スメラギ「じゃあ、ヴェーダはそのリボンスに…。」

ティエリア「……………」

アレルヤ「でも、どうして刹那達に？」

シン「リボンスは0ガンダムの実験のためにクルジスに向かい、其処で刹那を助け、更にヴェーダを使って刹那をガンダムマイスターにしたのも自分だと言っていた。」

皆「!？」

アレルヤ「ど…どういう事!？」

ラッセ「マジかよ…。」

ティエリア「まさか…計画はその時から…。」

シン「そして、リボンスは『それは自分の物だから返してほしい』とか訳のわからない事を言ってたから俺は第6のGNドライヴの事とかを言っただけ黙らせてやった。」

ロックオン「さらに物凄い事言ってるぞ。」

シン「そして、刹那はリボンスを撃とうとして、アリー・アル・サーシエスに撃たれた。」

フェルト「えっ？」

ティエリア「アリー・アル・サーシエスだと!？」

アレルヤ「刹那は?!」

シン「いや、刹那は右肩を撃ただけだ。」

ティエリア「まさか奴とイノベーターが繋がっていたと…?!」

シン「サーシエスはリボンスを『スポンサー』と言っていたからな…多分あのスローネの発展型もリボンスがあげたんだろう…。」

アレルヤ「もしかして、刹那とはサーシェスとの戦闘中に？」

シン「いや、あのバカ、『お前はトレミーに行け…！俺は大丈夫だ…！』とか、あの傷でそんな事を言っていた。…まあ、それに従った俺も十分バカだけだな。」

スメラギ「トランザムを使えば、例え倒せなくても圧倒は出来るわ。それよりも、私達はアフリカタワーに行きます。イアン、アフリカタワーに着く前に、火器管制を使えるようにできる？」

イアン「やるしかないだろ。」

シン「俺もやります。」

イアン「分かった。」

こうして、プトレマイオス2はアフリカタワーに向かった。

刹那「うわっ！ぐはっ…！くっ！」

ダブルオーライザーは奥義を^{トランザム}発動したマスラオの猛攻を受けていた。

ブシドー「隙ありいいいいッ…！」

刹那「くっ！」

ダブルオーライザーはGNフィールドを展開し、トランザムマスラオの攻撃を防いだ。

刹那「うっ！ぐっ！」

ブシドー「斬り捨て、ご免ッ…！」

トランザムマスラオの攻撃はダブルオーライザーのGNフィールドを破ろうとした。

刹那「クッ!」

そして、ダブルオーライザーはトランザムを発動した。

ブシドー「フッ…!」

ブシドーは吐血をしながらも、トランザムライザーに歪んだ笑みを浮かべた。

シン「刹那ッ!？」

シンはトランザムライザーの高濃度GN粒子を感じ取った。

イアン「シン? どうした？」

シン「何では分からないけど、刹那がダブルオーライザーのトランザムを発動したのを感じたんです。」

イアン「何？」

シン「ガンダムで出ます!」

イアン「ああ…分かった。」

シン達はガンダムでダブルオーライザーの所に向かった。

刹那「うおおおッ!!!」

ブシドー「うおおおッ!!!」

トランザムライザーとトランザムマスラオは激しい戦いを繰り広げた。

ブシドー「私は純粹に戦いを望む！」

刹那「戦うだけの人生……！」

ブシドー「だがガンダムとの戦いを！」

刹那「俺もそうだ！」

ブシドー「そしてガンダムを超える！　それが私の……」

刹那「だが今は……」

ブシドー「生きる証だ……！」

刹那「そうでない自分がいる……！」

と、そこに

シン「刹那！」

トランザムを発動したガンダムの援護が入った。

ブシドー「ええい！　水入りか！　粒子量も少ない。敢えて言うぞ、少年！　覚えておくがいい！」

マストラオは撤退した。

アレルヤ「刹那！」

ロックオン「このやろう。生きてやがったか。」

シン「いや、勝手に殺すなよ。」

ハロ「良カッタ良カッタ良カッタ。」

刹那「み、皆……」

ロックオン「アレルヤ、運ぶぞ。」

アレルヤ「了解。」

ケルディムとアリオスはダブルオーライザーを抱えた。

『刹那、お前は変われ。変わらなかった俺の代わりに。』

刹那はアルケーとの戦いの後に見た過去の夢の中でロックオン——
——ニールが言った言葉を思い出した。

刹那「（分かっている…ロックオン…。ここで俺は変わる。俺自身を、変革させる。）」

そして、刹那の意識はそこでブラックアウトした。

ハークユリー「軍が包囲を解いている…」

「何？」

ハークユリーと、『密使』として軌道エレベーターに入ったセルゲイは連邦軍の異変に気付いた。

カティ「どういうことだ？ 部隊が2ヶ所に集結している。」

ビリー「人質の解放まで、手は出さないつもりでしょうか。」

スメラギ「いいえ、違うわ。この布陣には、大きな意味が隠されている。フェルト、アフリカタワー周辺1000キロの風速を表示して。」

フェルト「なっ、何故です？」

スメラギ「急いで！」

ビリー「はっ！ これは。」

カティ「落下状況を考慮しての部隊配置。」

セルゲイ「まさか。」

スメラギ「やはり、もう一基あるというの?」

スメラギは思わず上を見上げた。

「メモントモリ、掃射準備に入ります。電力、供給開始。」

「電力供給開始しました。チャージ完了まで、0187。出力6800を上限に設定。」

グッドマン「反乱分子カタロン、そしてCB。纏めて受けるがいい。神の雷をな……。」

『死の雷』は静かに、そして確実にアフリカタワーに向けられていた。

第17話 悲劇の序章（後書き）

さあ、次回はあの『散りゆく光の中で』ですよ！
次回はなんと前編と後編に分かれてお送りします！

第18話 散りゆく光の中で 前編（前書き）

CBは連邦軍のクーデター派が占拠したアフリカタワーに向かい、其処でダブルオーライザーを回収した。

だが、もう1基のメメントモリがアフリカタワーに狙いを定めていた…

第18話 散りゆく光の中で 前編

プトレマイオス2

フェルト「光学カメラがオービタルリング上に、大型物体を捉えま
した。」

スメラギ「やはり…。」

ラッセ「二つも造ってやがったのか!」

イアン「本気で撃つ気か?!」

沙慈「そんな!」

マユ「軌道エレベーターを…?」

スメラギ「だとしたら…6万もの人命を…?」

デステイニーらは軌道エレベーター付近に接近していた。

ロックオン「アロウズの奴、本性を表しやがった!」

シン「衛星兵器で軌道エレベーターを破壊する気かよ?!」

ティエリア「これもイノベーターが裏で操っているというのか。」

アレルヤ「カタロン部隊が脱出していく。」

アレルヤは軌道エレベーターからカタロンのMSが脱出しているの
を確認した。

ロックオン「なっ!?!」

だが、周囲の連邦軍によって次々と撃墜された。

ロックオン「くっ! 貴様ら、今頃になって!」

ケルデームは連邦軍に攻撃を仕掛けた。

ティエリア「やめろ! ロックオン!」
アレルヤ「迂闊すぎる!」

セラヴィーとアリオスも攻撃を開始した。

シン「…って、アンタ達も戦ってんじゃない!」

ドガッ!

シン「うぐっ!? チッ、このバカ野郎!」

デステイニーは牽制と敵MSの機動力を削がない程度の攻撃を混ぜて開始した。

ブトレマイオス2

イアン「トレミーを宇宙へ上げるだど？ 冗談だろ？ この状態じや無理だ。」

スメラギ「けど、多くの人命が！」

プシユー

ブリッジに刹那が入ってきた。

沙慈「刹那。」

刹那「ダブルオーを出す。」

スメラギ「何言ってるの？ そんな身体で……」

刹那「衛星兵器を止められるのは、ダブルオーライザーだけだ。ア
ンタも分かっているはずだ。」

スメラギ「トランザムライザー……。」

刹那「ミッションプランを頼む。」

イアン「オーライザーにパイロットが必要だ。ラッセに頼みたいと
こだが……」

刹那「オーライザーに乗れ。」

刹那は沙慈にそう言った。

沙慈「えっ？ 僕が?!」

刹那「6万もの人命が掛かっている。これは、守る為の戦いだ。」

沙慈「守る為の……」

沙慈はカタロン基地での惨劇を思い出した。

刹那「成功の確率は低いだろう。だが、始める前から諦めたくない。」

沙慈「守る為の……戦い。」

イアン「コイツを着て行け。」

イアンは沙慈に白いパイロットスーツを渡した。

イアン「頼むぞ。命を守れ。」

沙慈「はい！」

沙慈はパイロットスーツに着替え、オーライザーに乗り込んだ。

スメラギ「カタパルトで二次加速をかけるわ。いいわね。」

ミレイナ「了解です！」

沙慈「相手は機械だ。人じゃないんだ……」

フェルト「トレミー、第1、第3ハッチオープンです。射出タイミングを両機へ譲渡します。」

沙慈「ハッ！」

刹那「刹那・F・セイエイ、出る！」

沙慈「沙慈・クロスロード、発進します！」

ダブルオーとオーライザーは発進した。

沙慈「くっ……くく……！」

沙慈はカタパルトの二次加速によるGに耐えていた。

沙慈「ドッキングします！」

赤ハロ「オーライザードッキングモード！ オーライザードッキングモード！」

ダブルオーとオーライザーはドッキングし、ダブルオーライザーになった。

シン「！」

デステイニーがフラッグを蹴り飛ばした時にシンはダブルオーライザの光を見付けた。

シン「刹那…頼んだぞ…。おっと！」

デステイニーは敵MSの攻撃を躲した。

因みに、デステイニーは途中から素手での格闘戦を行っていた。

刹那「圧縮粒子を完全開放する！ ライザーシステムを稼働させる！」

沙慈「わ…わかった！」

ピピッ！

刹那「敵！？」

「やらせんで、ガンダム！」

デヴァインの乗るデステイニーに半壊されたままのエンプラスのエグナーウィップがダブルオーライザーに命中した。

二人「ぐああああッ!!」

刹那「沙慈!!」

沙慈「システム!!」

デヴァイン「ブリングの仇いいいいッ!!」

刹那「トランザムライザーアアアッ!!」

デヴァイン「ッ!」

トランザムライザーのライザーソードでエンプラスはGNフィールドごと真つ二つにされた。

「電力供給…完了。」

グッドマン「掃射開始。」

「掃射、開始します。…高エネルギー体、接近!」

グッドマン「何?」

その高エネルギー体——ビームはメメントモリを外れた。

グッドマン「外したか…。」

「粒子ビームが!」

グッドマン「なんだ?! 砲撃ではない!? ビームサーベルだとお?!」

刹那「うおおおおッ!!」

トランザムライザーのライザーソードはメメントモリを切り裂いた。

沙慈「はっ！ やった！」

沙慈は爆発するメメントモリを見た。

シン「ハッ！？」

アレルヤ「シン？」

アレルヤは突如動きの止まったデスティニーを見た。

シン「まさか…」

アレルヤ「え？」

刹那「ダメだ…」

沙慈「えっ？」

シン「や…」

刹那「やめろ…」

刹那& amp ;シン「やめろおおおおおッッ！！！」

二人の叫びは空しく、メメントモリは掃射され、軌道エレベーターに当たった。

『幸い』、メメントモリの照準はライザーソードによってずらされ、『直撃』は免れたが、軌道エレベーターのピラーに当たり、軌道エレベーターはバランス機構によるピラーのオートパージを始めた。

フェルト「レーザーがピラーに着弾！ ピラーの外壁がオートパージされています！」

スメラギ「成層圏より上の破片は、断熱圧縮による空気加熱で燃え尽きるけど、それより下の部分は…地上に落ちる。」

6万人を乗せたりニアトレインは軌道エレベーターのオートパージに巻き込まれ、6万もの人命は全て失われた。

ロックオン「なんだ!？」

ティエリア「まさか?!」

アレルヤ「軌道エレベーターが、崩壊していく!」

シン「クツ!」

『現空域にいる全機体に、有視界通信でデータを転送します。』

スメラギは自ら顔をさらけ出し、この空域にいる全ての機体に通信を行った。

「なんだ?」

スメラギ『データにある空域に侵入してくる、ピラーの破片を破壊して下さい。その下は、人口密集区域です。』

「なんだって?!」

スメラギ『このままでは、何千万という人々の命が消えてしまう。だからお願い、みんなを助けて。』

ティエリア「圧縮粒子、解放!」

シン「ハイパーモード、始動!」

ロックオン「ハロ!」

ハロ「シールドビット展開! シールドビット展開!」

ガンダム達はピラーの迎撃を始めた。

「ああ……」

その他のMS達はただただその光景を見ていた。

アレルヤ「数が多すぎる!」

シン「諦めるなアレルヤさん!」

だが、奮戦空しくピラーが人口密集地帯に落ちた。

アレルヤ「しまった！」

シン「クソッ！」

すると其処にピラーを破壊する機体が現れた。

アレルヤ「あれは…マリー！」

シン「マリーさん?!」

マリー「これは戦いじゃないわ。命を守るための！」

マリーはGNアーチャーに乗ってピラーの破壊に加わった。

ロックオン「くそっ！ このままじゃ…！」

ピラーはケルディムの迎撃を抜けた。

ロックオン「しまった！」

其処にカタロンのMS隊がピラーの破壊に加わった。

ロックオン「あつ、あれは…カタロン？」

「くっ！」

ティエリア「あ、クーデター派の機体か！」

「くそつたれが！」

アレルヤ「なんだ?!」

ティエリア「正規軍まで！」

シン「まさか皆…！」

ここに、CB、カタロン、クーデター派、連邦軍が協力してピラー

の迎撃を行った。

ミレイナ「都市部への直撃は、何とか避けられそうです。」

スメラギ「ああ、ありがとう…。」

アニユー「こんな状況で、全てが一つに纏まっていく…」

ラッセ「皮肉なもんだな。だが、悪くない。」

ピピッ！

フェルト「はっ！ 左舷よりMS部隊接近！ アロウズです！」

ラッセ「この時を狙っていたのか？！」

ミレイナ「アーデさん達に撤退を！」

スメラギ「このまま続行よ。」

フェルト「いいんですか？！」

スメラギ「指揮官が彼女なら、きっと…」

スメラギの予想通り、その彼女、カティの命令でアロウズ部隊もピラーの迎撃に協力した。

マリ「あっ！ あの機体は！」

マリはピラーから出てくる機体に気付き、そちらに向かった。

アレルヤ「マリー！」

シン「マリーさんは俺が援護します！」

アレルヤ「シン、頼んだよ。」

デステイニーはGNアーチャーの援護に向かった。

セルゲイ「協力感謝する。」

ピラーから出てきた機体は、セルゲイのティエレンタオツとハーキュリーのジンクス？だった。

マリー「やはりスミルノフ大佐。」

セルゲイ「ピーリスか？ 何故MSに？」

シン「マリーさん！」

セルゲイ「あのガンダムは…あの時の…」

マリー「きます！」

シン「チッ！ まだ落ちてくるのかよ！」

ピラーを迎撃するデステイニー達にアロウズのジンクス？アンドレイ機とルイスが乗るアヘッドスマルトンが接近した。

シン「あの機体は…！」

ハーキュリー「アロウズ！？」

アンドレイ「その声は、ハーキュリー大佐！」

セルゲイ「アンドレイ？！」

アンドレイ「アンタは！ 何をやってんだ！」

シン「黙ってピラーを迎撃しろ！ アロウズッ！！」

アンドレイ「ガンダム？！」

ルイス「少尉！ 大型の破片が！」

アンドレイ「何！？」

大型のピラーの欠片がデステイニーら目掛け、落ちてきた。

ハーキュリー「くそっ！ オートパージ出来ずに！」

セルゲイ「このままでは…！」

シン「ティエリア！」

ティエリア「トランザム！ GNバズーカ、ハイパーバーストモー

ドー!!」

トランザムセラヴィーの砲撃はピラーに命中したが完全に破壊するには至らなかった。

セルゲイ「ダメか!」

そこへ粒子チャージを終えたダブルオーライザーがピラーを破壊した。

刹那「シン! ロックオン! アレルヤ!」

シン「トランザムッ!」

ロックオン「トランザムッ!」

アレルヤ「トランザムッ!」

ガンダム達はトランザムを発動し、ピラーを更に破壊した。

「……………」

だが、そんな光景を遠目から見ているMSがあった。

その機体は赤く、背部のGNドライブと背部のリフターらしき物の二つのGNドライブから『紅きGN粒子』が出ていた。

そのMSは迎撃には加わらず、ただただ見ていた。

そして、ピラーは人口密集地帯に落ちる事なく迎撃された。

後編に続く

第18話 散りゆく光の中で 前編（後書き）

最後に出てきた謎のMSの正体はなんでしょうかね？
まあ、答えは後編にありますけどね。

散りゆく光の中で 後編（前書き）

トランザムライザーのライザーソードでのメメントモリ破壊は失敗し、『ブレイクピラー』が起きてしまった。

CBはカタロンや連邦軍、そしてアロウズの協力を得ながら地上の人工密集地帯へのピラー落下を防いだ。

散りゆく光の中で 後編

シン「……………」

シンはヘルメットを脱ぎ、プトレマイオス2やガンダム達から離れて一人デステイニーのcockpitの中で思考の整理をしていた。

シン「…何で俺は衛星兵器が発射する事を知ったんだ？…いや、それ以前にも何故かトランザムライザーの高濃度粒子領域内だと無茶苦茶勘が鋭くなったりしてたな…。トランザムライザーには『人間を変える力』があるのか？…」

そんな自問自答を繰り返すシンを、遠くからダブルオーライザーが見ていた。

ピピッ

シン「…ん？ 何だ？」

シンはモニターを覗いた。

モニターにはあのティエレンタオツと連邦軍のジンクス？が映っていた。

シン「…そういえばあの2機、ピラーから出てきたな。何か知っているのか？…というか、まさか…クーデターの首謀者か？」

シンはその2機に接触を図ろうとした。

ズビュッ！

シン「なっ?!」

突如ジンクス？は緋色のビームに貫かれ、爆散した。

シン「ハッ！」

シンはそのビームの元を見付けた。

シン「アロウズ!!」

アロウズのジンクス？だった。

シン「許せるか…！ 許せるかあああああああッッッ
！！！！」

デステイニーはそのジンクス？に迫った。

シンはメメントモリによって6万人の命が失われた事に激しい怒りを覚えており、最早アロウズの機体は全てその怒りの捌け口になっているのだ。

アンドレイ「!？」

そのシンに狙われたのは、ハーキュリーのジンクス？を撃墜したアンドレイだった。

ドガアッ!!

アンドレイ「ぐあっ?!」

デステイニーはジンクス?に激突した。

シン「アアアアアア口ウウウウズツツ!!!」

今のシンを突き動かすのは激しい怒りと憎悪しかなかった。

アンドレイ「ガンダム!」

デステイニーはジンクス?の攻撃を躲し、逆にジンクス?の右腕を切り捨てた。

シン「ウオオオオオオオオツツ!!!」

デステイニーはジンクス?を殴り、コクピットを蹴り、ジンクス?を地面に叩き付けた。

アンドレイ「ぐあああああッ!?!」

シン「ハア...! ハア...! ハア...!」

デステイニーはGNバスターランチャーを展開し、それをジンクス?に向けた。

セルゲイ「! 何をしている?! 止めろ!」

シン「墜ちろ...!」

セルゲイ「ハッ!?!」

シン「墜ちろ...! 墜ちろ、!」

シンはトリガーを引こうとした。

ザン…ッ！

シン「！？」

何かが高速でデステイニーのGNバスターランチャーを斬ったのだ。

シン「なっ？！…ハッ！ 何だ！」

シンは今ので正気に戻り、その切ったものを捜した。

シン「えっ…？！」

それは直ぐに見付かった。

だが、そのMSはシンにとっては『劇薬』そのものだった。

セルゲイ「あれは…？」

シン「あ…ああ…！ そ…そんな…！？」

刹那「ん？ あの機体は？」

デステイニー達より離れた位置にいたダブルオーライザーにも、そのMSは見えた。

シン「何でだ…！？ 何であのMSが…？！ あっ！？」

そのMSはデステイニーに攻撃を仕掛けた。

シン「クッ！」

デステイニーは辛うじて攻撃を躲した。

刹那「あのMSは…確か、『デステイニーの戦闘記録にあった機体』
…。だが、何故だ？ 何故この世界にいる？ あれは『シンによつ
て撃墜された』筈だが…？」

シン「何でだよ！？ 何でアンタがこの世界にいるんだよ？！ ア
ンタは俺が撃つたんじゃないのかよ？！」

デステイニーはそのMSと唾競り合いをしながらシンはそのMSに
通信を行った。

「……………」

だが、返事は無かった。

シン「返事をしなくても分かるんだよ！ アンタなんだろう？！」
アスラン・ザラ『…！』

デステイニーはそのMSを突き飛ばし、対峙した。

「……………」

アスランと呼ばれた人物は、未だに無言のままだが、デステイニー
に有視界通信を行い、ヘルメットを脱いだ。

シン「…やっぱりな…！」

そのヘルメットの下は、アスランだった。
そう、デステイニーと対峙しているのは、背部にはGNドライヴを
搭載し、頭部には偽装用のモノアイマスクを装着した∞（インフィ
ニット）ジャスティスなのだ。

シン「まさかこの世界に来てたとはね…！　そのGNドライブ、もしかしてイノベーターに拾われました？」

アスラン「……………」

シン「…おい！　聞いているのか？！　アスラ——ッ！？」

バチイイイイイツツ！！

デステイニーは∞ジャスティスの攻撃をGNシールドで受け止めた。

シン「オイオイオイ、イノベーターに頭の中弄られました？」

アスラン「……………」

シン「ああ、無視ですか！　だったら、薙ぎ払う！」

デステイニーは∞ジャスティスを二度突き飛ばし、GNビームブーメランを投げ付けた。

アスラン「…！」

∞ジャスティスは脚のGNビームサーベルでGNビームブーメランを弾き飛ばし、デステイニーに接近した。

シン「速い！　だけど！」

デステイニーはGNビームブーメランをサーベルモードにし、∞ジャスティスと唾競り合いをした。

シン「…やる！」

アスラン「…！」

シン「だけど、このてい——っつ？！」

シンは自らの身体の異変に気付いた。

シン「か…身体が…?! も…もしかして…ハイパーモードと…トランザムの…同時使用の…反動が…?」

シンは身体の激しい激痛と疲労感に襲われた。

刹那「…! シン!」

刹那はシンの異変を感じ、デスティニーの所に向かおうとした。

「ガンダムツ!!」

刹那「!」

ダブルオーライザーに『アヘッドスマルトン』が襲い掛かった。

沙慈「ハッ!? あの機体は…ルイス!」

刹那「何!? クツ!」

沙慈「止めてくれ! ルイスッ!!」

ルイス「ガンダム!!」

ダブルオーライザーは襲い掛かるアヘッドスマルトンを撃墜出来ずにいた。

シン「ぐっ…うつ…!?!」

シンは身体の激しい激痛と疲労感に耐えながら∞ジャスティスと戦っていた。

シン「クソッ…！ このままじゃ…！」
アスラン「……………」

ドガッ！

∞ジャステイスはデステイニーを弾き飛ばし、デステイニーは地面に叩き付けられた。

シン「うわああああああッ…！？」

刹那「シン！ ぐっっ！」

アスラン「……………」

∞ジャステイスはGNビームライフルをデステイニーに向けた。

ドウッ！

アスラン「！」

∞ジャステイスのGNビームライフルは緋色のビームによって破壊された。

セルゲイ「何者かは知らんが、それ以上はやらせはせん！」

ティエレンタオツーは∞ジャステイスとの戦闘を開始した。

シン「そ…そんな機体で…GNドライブ搭載機と…！？」

シンは無謀ともいえる戦いをしようとするセルゲイを止めようとした。

シン「えっ?!」

だが、シンは驚愕した。

ティエレンタオツーは∞ジャステイスの攻撃をGNビームライフルに内蔵しているGNビームサーベルで巧みに防ぎ、更にティエレンタオツーは∞ジャステイスの隙を突き、GNビームライフルのGNビームサーベルで左肩を斬り落とした。

アスラン「!!?」

セルゲイ「その程度の技量で…!」

アスラン「クッ!」

∞ジャステイスは脚のGNビームサーベルでティエレンタオツーを攻撃した。

セルゲイ「!」

ティエレンタオツーはGNビームライフルのGNビームサーベルで防御したが、弾き飛ばされ、更にGNビームライフルを手放してしまった。

セルゲイ「クッ…!」

そして、∞ジャステイスはGNビームサーベルを突き出し、突撃した。

セルゲイ「そんなこうげ——ハッ!」

セルゲイは回避は行おうとして背後に気付いた。

ティエレンタオツーの背後には、地面に叩き付けられたままのデス

ティニーがいたのだ。

このまま躲してデスティニーを犠牲にするという考えはあったが、セルゲイはアロウズが軌道エレベーターを破壊しようとした時に知った。

『連邦軍は自分をアロウズに売った』と。
だから、セルゲイには『このままあのMSと刺し違える』という考えもあった。

セルゲイ「…クッ！」

そして、∞ジャスティスが目前まで迫った時だった。

シン「邪魔だあああああッッ！！！」

ドガッ！

セルゲイ「ぐあっ?!」

ティエレンタオツーはデスティニーに弾き飛ばされた。

セルゲイ「何!?!」

バチイイイイイイツツ!!!!

セルゲイ「ハッ…!」

刹那「シン・アスカッ!」

∞ジャスティスの一撃はデスティニーの胸部のコクピットの直ぐ左側を直撃した。

シン「うおおおおおおおッッ！！！」

シンは∞ジャスティスの一撃を受け、爆発で左のこめかみの辺りから夥しい血を流しながらもレバーを動かした。

アスラン「ハッ！？」

アスランが気付いた時には既に遅く、デステイニーの掌底が光輝いていた。

シン「GN…ハンドバスタアアアアアアッッ！！！」

デステイニーの一撃は∞ジャスティスの胴体を貫いた。

アスラン「ぐうつ？！」

だが、∞ジャスティスにはガデッサやガラッゾと同じく脱出機能が搭載されており、リフター下部に搭載しているコアファイターのアームが機体からコクピットブロックを引き抜き、脱出した。

その直後、∞ジャスティスは爆発した。

シン「へへッ…ざまあ…み、ろ……………」

シンは意識を手放し、それと同調する様にデステイニーのツインアイの光が消えた。

刹那「シンッ！！！」

ダブルオーライザーはアヘッドスマルトンを弾き飛ばし、デステイ

ニーの所に向かった。

その後、アヘッドスマルトンは1機のジンクス？と共に撤退した。

刹那「シン・アスカ！」

デステイニーはティエレンタオツーに抱えられていた。

刹那「アンタは……」

セルゲイ「……………」

マリー「大佐！」

刹那「大佐？……いや、それよりもシン！」

ダブルオーライザーはティエレンタオツーからデステイニーを抱え、
プトレマイオス2に帰艦した。

セルゲイ「……………」

マリー「……大佐は、これからとうするんですか？」

セルゲイ「……世話になるしかあるまいな……。CBに……」

セルゲイはプトレマイオス2を見た。

プトレマイオス2

第1格納庫

刹那「クッ！」

ダブルオーは格納庫内でデステイニーからコクピットブロックを取り出した。

イアン「コイツは…！」

イアンはコクピットブロックの惨状に愕然とした。特にコクピットブロックの左側は、殆どが溶解し、溶解による穴が開いていた。

マユ「お兄ちゃんは…？」

イアン「判らん。だから確認する。」

刹那「イアン。」

沙慈「イアンさん。」

イアン「よし、作業を開始するぞ。」

イアン達はカレルを使ってコクピットブロックを開けた。

イアン「なっ！？」

沙慈「あ…！」

刹那「これは…！」

イアン達はコクピットブロックの中を見て、驚愕した。コクピットの中は夥しい血で濡れていて、その中に血塗れのシンがシートに倒れていた。

マユ「お…お兄…ちゃん…？」

沙慈「あ！」

刹那「シン！」

刹那はシンをコクピットから引き摺り出した。

刹那「シンを医務室に！」

沙慈「分かった！」

刹那と沙慈はシンを医務室に運んだ。

果たして、シンの運命は…？

第19話 それぞれの決意の灯火（前書き）

シンは∞ジャスティスの攻撃により、瀕死の重傷を負った。

第19話 それぞれの決意の灯火

第18話終了から数日後

プトレマイオス2は宇宙^{そふ}に上がっていた。

スメラギ「シンの容態は？」

スメラギは医療カプセルに入っているシンが映っているモニターを見ながらそう言った。

アニュー「未だ意識は回復していません。」

スメラギ「そう…。」

ティエリア「GN粒子による、細胞障害は？」

シンはの傷口は非常に広く、左のこめかみから左目の辺りまで広がっていて、傷口の一部は口元の辺りまで鋭く出ており、更に傷口の一部分では脳が見える程の傷を負っていたのだ。

ただ、これはヘルメットさえ被っていればここまでのダメージは受けず、更に脳が見える程の傷は、∞ジャステイスの攻撃で飛び散った破片が突き刺さって抉ったのが原因なのだ。

アニュー「皮膚と骨の細胞の障害は治まりました。ですが、脳細胞のGN粒子による障害は一向に治る気配を見せません。ですから…、シンはこのまま目覚めないか、目覚めても重度の障害を抱える可能性があります。」

スメラギ「そう…。」

ティエリア「シン・アスカ…。」

スメラギ「…アニュー、もう少しシンの様子を見てからデータを取って頂戴。」

アニュー「分かりました。」

スメラギとティエリアは医務室から出た。

ティエリア「しかし、マユ・アスカも変わったな。」

スメラギ「…ええ、そうね。」

二人は数日前の事を思い出した。

マユ「マユにも出来る事をさせて下さい！」

それは突然の事だった。

皆「……………」

一同はセルゲイの事情聴取を終えた直後だった。

因みにマユは聴取が終わるまで隠れていたが、例によって刹那には最初からバレていた。

ティエリア「良いだろう。」

スメラギ「えっ？ ティエリア？」

ティエリア「機体の整備ぐらいいはイアンの指導で出来るだろう。」

スメラギ「でも、シンが…」

ティエリア「シンが怖いんですか？」

スメラギ「怒られるのはあなたよ！」

ティエリア「フッ、マユ自身の意思で自分ができる事をしていると言ったら流石に黙ってくれるだろう。」

スメラギ「でも……」

刹那「俺もティエリアに賛成だな。」

スメラギ「ええっ?!」

ミレイナ「ミレイナもアーデさんに賛成ですう！」

スメラギ「あなたはそうでしょうね！」

イアン「ハア……、ワシの負担が……。まあ、後が楽しみだから良いけどな。」

セルゲイ「……私は一体何なんだ……?」

マリ「大佐……」

アレルヤ「ハハハッ……」

セルゲイ「いや、今は名前でもいい。」

マリ「あ……えっと……、セルゲイ……さん……。」

セルゲイ「……そういえば名前を呼ばれた事は無かったな。」

アレルヤ「スミルノフさん。」

セルゲイ「何だ?」

アレルヤ「あなたも戦うんですか? アロウズと。」

セルゲイ「ああ、C Bに協力する訳ではないが、私も戦おう。」

アレルヤ「ですが、機体が……」

セルゲイ「ああ、ティエレンでは太陽炉搭載機にはな……」

アレルヤ「そのまま待機ですね。」

セルゲイ「確かにな……。」

セルゲイは軽く頭を抱えた。

因みに、マユはこの数日間で技術を習得し、イアン達を驚かせた。

ティエリア「…これって回想なのか？」

スメラギ「さあね。」

ティエリア「まあいい、我々はそれでも歩みを止める訳にはいかな
いからな。」

スメラギ「そうね。」

マユ「…よし！」

マユは機体の整備を終えた。

マユ「（…お兄ちゃんはおあして皆を守ってくれていたから、マユ
だって出来る限りの事はしたい。）」

ミレイナ「マユちゃん、休憩に入ります。」

マユ「うん、分かった。」

マユはミレイナと共に休憩に入った。

マリー「……………」

マリーは鏡の前にいた。

その手にはハサミが握られていた。

ソーマ『…本当に良いのか？』

鏡に写る自分——ソーマが語りかけてきた。

マリ『ええ、マユちゃんだってああして自分なりに出来る事をしているわ。だったらあたしは…』

ソーマ『そうか、分かった。』

マリはそのハサミを自分の——

アレルヤ「スミルノフさん。」

アレルヤはセルゲイの前にコーヒーを置き、隣に座った。

セルゲイ「ああ、すまないな。」

アレルヤ「あなたが僕達と行動しているのが連邦に知られたら、例えばアロウズを倒したとしても…」

セルゲイ「だとしても、戦わなければならない。アロウズはやがて連邦そのものを吸収するだろう。アロウズに売られた私がそこに戻れると思うか？」

アレルヤ「…恐らくは…抹殺されるでしょうね。」

セルゲイ「最早奴らアロウズは、軍隊ではない。悪政を行う連邦の傀儡だ。だから私は、連邦を在るべき姿…良識ある市民、すぐれた政治、そして抑止力となる軍隊に戻す為に戦おう。だが、それだけ

ではない……」

アレルヤ「それだけではない……？」

セルゲイ「息子のアンドレイだ。」

アレルヤ「息子さんがいたんですか。」

セルゲイ「あれはアロウズにいた。」

アレルヤ「えっ？」

セルゲイ「私への当て付けだよ。あれは私を恨んでいる。」

アレルヤ「どうして……？」

セルゲイ「14年前の戦争で私は、軌道エレベーターの技術者とその家族を守るため、最終防衛ラインへの撤退が遅れた部隊を切り捨てた。その切り捨てた部隊の中には私の妻のホリーがいた。」

アレルヤ「……！　ということは……」

セルゲイ「ああ、遺体は見付からなかったが、戦死したのは間違いない。」

アレルヤ「あなたはその判断を……いや、そうでしょうね。覚悟が無ければそんな判断は……」

セルゲイ「……有り難う。そして、アンドレイとはそれから話したことは無い。私は父親としては……ハッ！」

アレルヤ「スマイルノフさん？」

セルゲイは遺体無きホリーの棺の前で泣きじゃくる幼きアンドレイを思い出した。

セルゲイ「そうか……あの時、謝罪の言葉をかけるなりなんなりすれば良かったのか……。」

アレルヤ「………」

セルゲイ「……やはり私は父親失格だな。」

アレルヤ「スマイルノフさん……。」

そんな彼らを影から見ている者達がいた。

ロックオン「……………」

刹那「……………」

ティエリア「……………」

マユ「……………」

沙慈「……えつと……？　何で僕達はこんな……？」

ロックオン「いや……何か入るのもアレだからこんな事になっちまったな。」

刹那「何故俺がこんな事を……？」

ティエリア「それは僕の台詞でもあるな。」

マユ「セルゲイさん……。」

刹那「ん？」

刹那は通路の向こう側から真剣な顔をしたマリーが向かってきているのを見た。

マユ「あ、マリーさ……えつ?!」

マユはマリーを見て、驚いた表情をした。

沙慈「えつ……？　マリー……さん？」

ロックオン「ヒュー」様になつてゐるぜ？」

ティエリア「まさかあなたも？」

マリー「ええ、そうよ。」

そう言つてマリーは部屋に入った。

マリー「大佐、アレルヤ。」

アレルヤ「ああ、マリー……え？」

セルゲイ「ピーリス……何故……？」

アレルヤとセルゲイが驚くのも無理はない。
何故なら、マリーは自ら髪を切り、ショートヘアーになっているのだ。

マリー「あたしも戦います。」

アレルヤ「そんな…?」

セルゲイ「…本気で言っているのか?」

マリー「はい。皆がそれぞれ覚悟や決意を持って、何かをしているのにあたしだけ何もせず、ただ見ているのはごめんです。」

セルゲイ「…だから戦うというのか?」

マリー「はい、これは『私達』の意思ですから。」

セルゲイ「ピース…。」

アレルヤ「だけど、そんな事…」

「自分の考えだけを押し付けんなよ。」

そう言つてロックオンが部屋に入ってきた。

アレルヤ「ロックオン。」

アレルヤ「大切に思つてゐるなら、理解してやれ。戦いたいという彼女の気持ちを。」

アレルヤ「マリーの…」

アレルヤはマリーを見た。

沙慈「……………」

マユ「沙慈さん?」

沙慈「（ルイスも同じなんだろうか…? 家族を失つた悲しみを憎しみに変えて…。僕はルイスに何を言えば…）」

刹那「（戦いたいという気持ち、か。だが、今の俺は…）」

??????

リボンス「お帰り、『アスラン・ザラ』。」

リボンスはアスランにそう言った。

アスラン「…何故ですか？」

リボンス「ん？ 何がだい？」

アスラン「何故『私の意思を封じた』のですか？」

リボンス「フフ…そうする必要があったからだよ。あの赤い翼のガンダム…デスティニー。君の機体の戦闘データにあった機体、そして、君の全てを奪った機体。君はアレを見て、冷静でいられると思うのかい？」

アスラン「…そうは…思えませんが…。」

リボンス「だからだよ。君にはまだ利用価値がある。彼処で倒れれば全く意味が無いからね。これから意思は封じさせるからね。…

ああ、後で調整室に行くといい。君の『身体能力を向上させる』。」

アスラン「…有り難うございます。」

アスランは一礼して部屋から去った。

リボンス「やれやれ、修復可能とはいえ、メメントモリは掃射不能なまでの損傷とは…、CBもやるものだ。だが、これでアロウズの権限が更に拡大し、そして、連邦を取り込み、統一世界へと進む。そして、CBさえ倒せれば、全ては僕の思うがままになる…フフフ

フ
…」

リボンは邪悪な笑みを浮かべた。

第19話 それぞれの決意の灯火（後書き）

マユとマリー（ソーマ）の決意と覚悟が決まった所で、次回はいいよいよだぜ！（はぐらかした！？）

第20話 復活の紅翼（ことうよく）（前書き）

シンの状態は最悪に近いものだった。

その一方でマユは自分に出来る事を始め、マリーはそれに触発される形で髪を切り、覚悟を決めた。

そして、シンは……………

第20話 復活の紅翼（いづよく）

あれから、CBはアロウズと数回の戦闘を行っていた。

ロックオン「チッ！ またかよ！」

ティエリア「兎に角、防衛するぞ！」

ソーマ「アレルヤ！」

アレルヤ「分かってる！」

あれから、アレルヤはソーマ（マリー）に戦う事を承諾し、ソーマはGNアーチャーに乗っている。

刹那「新型か…！」

ヒリング「積年の恨みを今此处で晴らすわ！」

ダブルオー^{ライザー}Rとガデッサは激しい戦いを繰り広げた。

ヒリング「…？ リボンス？…了解♪」

ヒリングはリボンスからの指令を聞き、笑みを浮かべた。

刹那「…？」

刹那はガデッサの動きに変化が現れた事に気付いた。

刹那「何だ…？」

沙慈『刹那！』

刹那「ハッ！」

ダブルオーRはあらぬ方向から撃たれたビームを躲した。

刹那「何！…あつ！ あれは…！」

ダブルオーRはその機体をキャッチした。

刹那「…ジャスティス…！」

そう、リボنزがヒリングに脳量子波で言っていたことは、このジャスティスの事なのだ。

沙慈「刹那！」

刹那「分かっている！」

ダブルオーRはガデッサとジャスティスとの戦闘に入った。

シン『……………』

シンはあれから、過去の記憶を何度も再構築していた。

何故なら、ジャスティスの攻撃——擬似GN粒子によって、脳にダメージを負っていたからだ。

だが、そんな事が『普通の人間では』出来る筈は無い。

何故なら、普通の人間が脳細胞に擬似GN粒子によるダメージを受ければ再起不能になるのだ。

シン『………？』

シンは精神世界で何か『異変』を感じ、目を開いた。

シン『ハッ！？』

其処は何処かの家の中だった。

だが、その家はシンの記憶には『存在しなかった』。
そう、『突如出てきた』のだ。

シン『どういう事なんだ…？ これは…？』

「や…やめて…ソラン…」

シン『！』

シンは背後から人の声が聞こえたので振り向いた。

シン『あっ！？』

そこには倒れた男性と中東の衣服を纏う女性がいて、その女性の前には少年と、その幼い手には大振りの拳銃が握られていて、その銃口はその女性に向けられていた。

その少年は何処か刹那によく似ていた。

シン『ま…まさか…？！ 止めるおおおッ！…！』

シンは女性を庇う様に女性と少年の間に飛び出し――

バンッ！

銃声が響いた。

シン『……………？』

シンは痛みを感じない事に違和感を感じ、自分の胴体を見た。

シン『…えっ？』

シンは自分の胴体に銃弾に決られた部分が全く無い事に気付いた。

ドサツ…！

シン『！』

シンは物音が『背後から聞こえた』ので振り向いた。

シン『ああ…！』

女性は少年に撃たれ、絶命したのだ。
そして、少年はそのまま家から出た。

シン『ま…待てよ！』

シンは少年を追い掛けようとした。

シン『ッ！？』

だが、突如黒い空間になり、少年はおろか、何もかもが消え失せた。

シン『…どうなっているんだ…？ これは…？』

『これは刹那の『過去の記憶』だ。』
シン『えっ？』

ピカアアア…！

シン『！』

黒い空間の中に突然光が出て、シンはその光の方を見た。

シン『アンタは…？』

その光の中から、右目に眼帯をした男が現れた。

シン『ロックオン…？ いや… 『ニール・ディランディ』…。』

ここは精神世界なのでシンはニールの名前を言えた。

シン『何で会ったことも無いアンタが…？ それに、刹那の過去の記憶って…？』

ニール『お前は刹那と同じ道を歩み始めている。これはその一部だ。』

シン『何？ じゃあ、あの少年は…』

ニール『ああ、刹那で間違いはない。』

シン『まさか…殺したのは…』

ニール『アリー・アル・サーシエスに洗脳されてたとはいえ、刹那は自分の両親を殺した。』

シン『あ…！』

ニール『だが、その刹那も『変わり始めている』。』

シン『変わり始めている…？』

『そうだよ。』

シン『！』

突然新たな声が聞こえ、シンの左手をとった。

『これが、シンがこの世界に来て、ならなきゃいけないことなの。』

シン『…『ステラ』…』。』

ステラ『だから…シンも『変わる』んだよ？』

シン『変わる？』

ステラ『そう、未来を切り開く為に。自分の変革を受け入れるの。』

シン『自分の変革を受け入れる…』。』

ニール『シン、お前も変われ。変われなかった、俺の代わりに…』。』

シン『…はい！』

サアアアア…！

シン『！』

突然黒い空間が変化し、色とりどりの花畑に青空、そして、その中に1つの光があった。

シン『あれは…』

ステラ『あれはシンの精神と肉体を繋ぐ鍵だよ。』

シン『鍵…』

ニール『何ボサツとしてんだ？ 今、刹那達は敵と戦っているぜ？』

シン『えっ?!』

ステラ『行つてらっしゃい、シン。』

ニール『行つてこい、シン・アスカ！ 刹那達と一緒に未来を切り

開いてこい！』

そう言つてステラとニールは消えた。

シン『ああ！ 了解しました！』

シンは光の近くに行き、左手を伸ばし、その光を握り締めた。

キイイイイ…！

その光は強さを増し、シンを包み込み、そして――

刹那「クツ！ 何だコイツは…?!」

ダブルオーRは∞ジャスティスの猛攻に押されていた。

刹那「データより強くなっている!?!」

その疑問をリボンスは『答えた』。

リボンス「アスラン・ザラには更なる強化措置、肉体強化、脳量子波放出強化を行ったからね。でも、それは普通の人間だったら精神崩壊を起こす危険性があつたけど、彼は『コーディネーター』だから、よく耐えてくれたよ。」

リジェネ「…君は『人工イノベーター』でも造る気かい？」

リボンス「そうだ。ルイス・ハレヴィ、アスラン・ザラ。彼らによって、僕の計画は更なる領域に達する。そして、僕はイオリアを超える。」

リジェネ「……………」

リジエネは蔑むような視線をリボンスに送った。

ミレイナ「敵MS、真っ直ぐ此方に向かってくるです！」
スメラギ「迎撃を！」

ラッセ「当たらねえ！」

セルゲイ「クツ！ 機体が有れば……！」

フェルト「！ 第1格納庫の下部コンテナが開きます！」

スメラギ「なんですって?!」

ミレイナ「敵MS、砲撃体勢です！」

スメラギ「ハッ!?!」

プトレマイオス2の前にはガデッサがいた。

ヒリング「さ・よ・う・な・ら・ん」

ガデッサのGNメガランチャーがプトレマイオス2目掛け、放たれた。

ドガアアアアアアアンツツ!!!

ロックオン「何だ!?!」

アレルヤ「あの方向はまさか……！」

ティエリア「トレミー!?!」

ソーマ「大佐！」

沙慈「そんな!?!」

刹那「クッ！…ん？」

刹那だけは『何か』に気付いた。

ヒリング「アハハハハハ！　勝つ――」

ドウッ！

ヒリング「ッ！？　」

ガデッサは爆煙からのビームでGNメガランチャーを破壊された。

ヒリング「なっ…何！？　ハッ！　」

ヒリングは爆煙の中を見て、驚愕した。

ヒリング「う…ウソ…?!　」

そこには、無傷のプトレマイオス2と、プトレマイオス2の前でGNフィールドを展開する機体があった。

「さてと、久し振りに暴れまくるぜ。」

ヴォンッ！

「デステイニーガンダム、シン・アスカ、目標を薙ぎ払う！！」

デステイニーはGNフィールドを消し、ガデッサに迫った。

ヒリング「クッ！　このお！」

ガデッサはGNバルカンで追撃した。

シン「ハイパーモード！」

デステイニーはハイパーモードを始動し、ガデッサの攻撃を躲した。

ヒリング「なっ！？ クッ！」

ガデッサは左腕のGNバルカンで攻撃しつつ、右手にGNビームサーベルを持った。

ヒリング「墜ちろ！！！」

ガデッサはGNビームサーベルを降り下ろした。

バチイッ！！

デステイニーは『右手』のGNビームシールドでガデッサの攻撃を受け流した。

ヒリング「あっ…?! 調子に乗るなあ…！」

シン「これでッ！」

デステイニーは『左手』でGNバスターソード改を持ち、ガデッサと唾競り合いをした。

バチイイイイイ！！

ヒリング「コイツ…ッ！」

シン「フツ、掛かった!」

デステイニーはガデッサから離れた。

ヒリング「逃げ――」

ピピッ!

ヒリング「えっ?」

ドガガガガガッ!!

ガデッサの胴体にデステイニーのGNビームブーメランが直撃した。実は、デステイニーはガデッサの攻撃を受け流している時にGNビームブーメランを投げていたのだ。

そして、ガデッサはコアファイターを射出し、爆散した。

ヒリング「そんな...? この私が...?」

デステイニーはGNビームブーメランを肩にマウントし、他のガンダムの方に向かった。

刹那「逃げた?」

∞ジャスティスはガデッサが撃墜された後、直ぐ様撤退した。

シン「アイツ...! いや、今は!」

デステイニーは最前線に突入した。

アレルヤ「シン、目覚めたんだね。」

シン「ああ、ばっちしな！」

ロックオン「やっとか！」

ティエリア「来るぞ！」

ガンダム達は散開した。

シン「今日は徹底的に暴れまくってやるぜ！」

ティエリア「撃墜されない様にな。」

シン「分かってるって！」

ガンダム達はアロウズと交戦した。

シン「食らえ！」

デステイニーはGNバスターソード改をアヘッドの腹部に突き刺した。
た。

ピピッ！

シン「増援！？ チツ！」

デステイニーはGNバスターソード改をアヘッドに突き刺したまま
放置し、GNビームブーメラン、サーベルモードを持った。

シン「さっさと終われよ！ この！」

デステイニーはGNビームライフルとGNバルカンを撃った。

スメラギ「あれが重度の障害を負っている人かしら…？」

アニュー「す、凄い回復力ですね…」
マユ「お兄ちゃん…」

そして、アロウズは撤退した。

シン「ハア…ハア…ハア…」

アレルヤ「大丈夫かい？」

シン「久し振りだから物凄く疲れた…。」

アレルヤ「ハハッ。」

シン「体力付けないとな。」

デステイニーはGNバスターソード改をアヘッドから引き抜こうとした。

刹那「待て。」

刹那はシンを呼び止めた。

シン「刹那？」

アレルヤ「どうしたんだい？」

刹那「そのまま回収しろ。」

シン「そのままって…これを？」

シンはアヘッドを指差した。

刹那「そうだ。」

アレルヤ「これをどうするんだい？」

刹那「後で言う。」

アレルヤ「……………」

シン「……………」

デステイニーとアリオスはアヘッドを回収し、プトレマイオス2に収容した。

刹那「イアン、ティエレンにあのアヘッドを組み込んでくれないか？」

皆「え？（は？）」

皆は刹那のその言葉に啞然とした。

イアン「…本気で言っているのか？ それ。」

刹那「アンタになら出来る。」

イアン「ワシの意思全無視か！…チツ、まあ、殆ど原形を留めているからな。…分かった。出来るだけティエレンの形は残そう。」

刹那「分かった。セルゲイ・スミルノフに報告する。」

刹那はその場を去った。

イアン「……ハア…！ 刹那もムチャを言う。」

シン「おやつさん、俺も手伝いますよ。」

イアン「すまん。…だけど、その前にする事があるだろ？」

シン「する事…？ ああ、はい。」

マユ「お兄ちゃん!!」

シン「マユ!」

マユはシンに抱き付いた。

マユ「良かった...! ずっと目覚めなかったらどうしようと思ったの...! でも...本当に良かった...」

シン「マユ...」

シンはマユを抱き締めた。

セルゲイ「何? 鹵獲したアヘッドをティエレンに組み込むだ?」

刹那「ああ、そうだ。時間は掛かるかもしれないが、これでGNDライブ搭載機と戦える。」

セルゲイ「だが、もし私があれば連邦軍に持っていったらどうするつもりだ?」

ティエリア「その時は機体の中にある我々CBに関する情報を遠隔操作で全てデリートさせてもらう。」

セルゲイ「...! それだけなのか?」

ティエリア「それだけさ。動力はGNDドライブ「T」の時にしてもらいたいかな。通常は大型GNコンデンサーを機体の動力源にする。」

セルゲイ「だが、その機体がお前達に武器を向けるぞ?」

ティエリア「フ、その時は排除させてもらいます。それが我々CBですから。」

セルゲイ「そうか。」

ティエリア「では、これで失礼します。」

ティエリアと刹那は部屋から出ていった。

セルゲイ「それが矛盾を抱えながら全ての武力を排除しようとする
CBか…。」

セルゲイはそう呟いた。

第20話 復活の紅翼（ことうよく）（後書き）

タイトル通り、シンが復活しました。

ただ、シンには脳へのダメージの痕跡が残る事になった。

それは次回にて、明らかにあります。

…まあ、察しのいい人はもしかしたら既に分かっているかも知れないけどね。

外伝その1 パーティー（前書き）

シンは昏睡状態から奇跡的に復活を遂げ、CBの危機を救った。

因みに、外伝と言っても、『空白の4ヶ月』の内の幾つかのストーリーを出すだけです。

外伝その1 パーティー

C Bはアロウズの攻撃の合間を縫って、細やかなパーティーを執り行う事にした。

セルゲイ「こんな時にパーティーを…いや、こんな時だからこそやるのか。」

アレルヤ「まあ…皆疲れてますからね。」

マリ「アレルヤもセルゲイさんも食べましょ?」

アレルヤ「ああ。」

セルゲイ「そうだな。」

アレルヤとセルゲイは食べ物を手を取った。

シン「ああ、くそつたれがあゝ!」

シン(21歳)は酔っ払っていた。

そのシンの左足の太股には、金属製のホルスターが着いていた。

そのホルスターには拳銃とナイフが入っており、更に簡易医療セットも入っている。

ホルスターはパイロットスーツの上からでも着用出来る。

因みに、ホルスターの中に入れてあるナイフは、かつてシンが持っていたザフトのナイフである。

マユ「お…お兄ちゃん…。」

ロククオン「おい、大丈夫か?」

刹那「しかし、本当に『利き手が変わっている』な。」

刹那の言う通り、シンは殆どの物を右手ではなく、左手で持っていた。

アニュー曰く、『GN粒子による、脳細胞の汚染による神経伝達の異常』と言い、一生治らないというが、当のシンは『そんなの関係ねえ！』と、大昔の某芸人の台詞を叫んだという。

ティエリア「酔っ払っていると、その人の本性が表れるというが、シンの利き手は変わってない様だな。」

アレルヤ「それって関係あるような…ないような…。」

シン「あゝゝ！」

アレルヤ達は床にゴロゴロ転がるシン（21歳）を見た。

シン「オゝエゝエエエエエ…！」

シンはトイレで吐いていた。

アレルヤ「だ…大丈夫かい？」

アレルヤはシンの背中を擦りながら言った。

シン「クソツ…！ 調子に乗らなきゃよかった…！ オエツ！」

シンはもう暫く吐いた。

シン「ハア…、あまり飲まないようにしよう。」「
アレルヤ「いや、治るの早いって!」

シンは何事も無かったかの様にパーティーに参加していた。

シン「……………」

シンは取り敢えず黙々と食べていた。

其処では、ロックオンとアニユーが親しく話していたり、ミレイナとマユはデザートを大量に取り、それをティエリアが呆れた様子で見ている。

アレルヤはセルゲイとマリーと共に話し合っていた。

沙慈「あ、シン。大丈夫だったの?」

シン「ん…ああ。まあ、酔って吐いたせいでパーティーではしゃぐ元気は無いけどな。」

沙慈「ああ…。」

シン「ハア…。アロウズが何時来るのか分からないのにバカみたい
にハシヤイで吐く俺って……………」

シンはこの後ぶつぶつと独り言を言い始め、沙慈はシンから離れた。

外伝その1 パーティー（後書き）

シンの利き手が左利きに変わったのは作者の趣味です。

外伝その2 模擬戦（前書き）

シン、泥酔。

外伝その2 模擬戦

ある時、シンは刹那に模擬戦を持ち掛けた。

自分の実力はどの程度のものなのかを確かめたいからだ。

刹那はそれに了承し、シミュレーションによる模擬戦の準備を開始した。

フェルト「使用機体はダブルオーとデステイニー。尚、ダブルオーは7S^{セブンソード}装備になります。トランザムシステム及びハイパーモードは使用不能です。」

シン「そっちの方が自分の実力を確かめれる。」

刹那「7Sか…。ツインドライブシステムの不調で採用を見送られたダブルオーの武装プラン。」

イアンが『悪かったな！』と言ってきたが、刹那は取り敢えず無視した。

シンと刹那はそれぞれのガンダムのコクピットにいた。

デステイニーはデータ上の機体も実機も、シンの利き手の変更に合わせて『左利き仕様』になっている。

フェルト「バトルステージは、アステロイドベルト内の廃棄コロニーです。」

コクピットのモニターがデータの空間を映した。

スメラギ「どちらかが撃墜されるかアロウズが来るまで戦うのよ。」
フェルト「それでは、模擬戦開始。」

フェルトの合図でデータのダブルオー7Sとデステイニーが出撃した。

その様子は、別室のモニターで他の者達が見ていた。

シン「ダブルオーは何処だ？」

デステイニーはダブルオー7Sを捜していた。

ピピッ！

シン「！ いた！」

デステイニーはダブルオー7Sを捉えた。

だが、ダブルオー7Sは捕捉されたと同時に廃棄コロニー内に入った。

シン「誘ってる…？ よし、乗ってやるよ！」

デステイニーはダブルオー7Sの後を追って廃棄コロニー内に入った。

シン「…外よりデブリが多いなこれ。」

コロニー内は非常に大量のデブリで埋め尽くされていた。

シン「何処だ、ダブルオー。」

デステイニーはデブリを伝って慎重にコロニー内を進んだ。

スッ…！

シン「！」

シンは一瞬だがダブルオー７Sを見付けた。

シン「やつとか！」

デステイニーはダブルオー７Sが一瞬見えた場所に向かった。

シン「いない…？ いや、近くにいる筈だ。」

デステイニーはその周囲を搜索した。

スッ！

シン「ハッ！？」

ガキイイイイイツッ！！！！

デステイニーはダブルオー７SのGNバスターソード？の攻撃をGNシールドで防いだ。

シン「ぐうううッ？！　へへっ…！　残念だった…なッ！！」

デステイニーはダブルオー７Sを押し飛ばした。

シン「（…というより、『わざと飛ばされた』か…。）」

シンはダブルオー７Sの動きを見て、そう思った。

シン「だけど、折角のサシだ。」

デステイニーはGNバスターソード改を引き抜き――

シン「全力で戦おうぜ!!」

その鋒をダブルオー7Sに向けた。

シン「行くぜツ!!」

刹那「ん!!」

デステイニーがダブルオー7S目掛けて突撃し、ダブルオー7SもGNバスターソード?を構え、デステイニーを迎え撃った。

「おお……!!」

モニターの様子に誰彼問わず、喚起の声が上がった。

何故なら、デステイニーとダブルオー7SがGNバスターソード系列の武装を振り回し、ぶつけ合っているのだ。

通常では考えられない至近距離でその様子を映せば、大迫力の映像になるのだ。

ロックオン「すげえな……。まるで実際の戦闘を映してるみたいだな。」

「
ティエリア「ロックオンもシュミレーションを行っている筈だが?」

ロックオン「まあ、そうだな。でも、改めて見るとすげえよな?」

ロックオンはモニターを見た。

片方が相手を背後のデブリに追い込み、攻撃し、相手は躲し、デブ

りは破壊され、唾競り合いを行った。
その繰り返しだった。

刹那「クッ！ やる！」

シン「チッ！ 墜ちない！」

二人はエンドレスのように続くこの戦いに流石に苛立ちを覚えた。

刹那「ならば！」

ダブルオー7Sはデステイニーに弾き飛ばされた勢いを使い、デブリを踏み台にして、デステイニーに突撃した。

シン「ッ！」

シンはこれに対応しきれず――

ドガッ！

GNバスターソード改を弾き飛ばされた。

シン「だけどッ！」

デステイニーはダブルオー7Sの腕に蹴りを入れ、GNバスターソード？を蹴り飛ばした。

刹那「だがッ！」

ダブルオー7SはGNソード？ショットを引き抜き――

バシュッ！

GNソード？ショートの刃先を射出した。

GNソード？ショートはGNビームダガーの代わりとして、刃先を射出し、ケーブルを使って何度も回収、射出を可能にした。

シン「なっ？！」

デステイニーは何とかその攻撃を躲したが、片方の頭部アンテナとGNバルカンを損傷した。

シン「クッ！」

デステイニーは残ったGNバルカンでGNソード？ショートワイヤーを切断し、更に牽制しながらGNビームライフルを取り出した。ダブルオーFSはGNバルカンを躲しながらGNソード？ロングをライフルモードで引き抜いた。

GNソード？ロングは射撃能力を向上している。

ダウンッ！　ダウンッ！

2機は近距離での射撃戦を行った。

威力ではGNソード？ロングの方が勝っているが、手数ではGNバルカン（但し片方は損傷によって使用不能）があるデステイニーが押していた。

刹那「ッ！」

シン「当たらない！」

だが、どちらとも射撃での命中は無かった。

シン「こうなったら！」

デステイニーはGNビームブーメランを投げた。

刹那「!...?」

刹那はデステイニーがGNビームブーメランを投げたことを確認したが、その軌道は避けずとも当たるコースではなかった。だからだろうか。

刹那「...あつ！」

刹那はシンの目論みに気付くのが一歩遅かった。

ザン...ッ!

GNソード? ロングは刀身を真つ二つにされた。

刹那「クッ!」

ダブルオーFSは2基のGNビームサーベルを取り出し、ダガーモードにしてデステイニーに投げ付けた。

ズシュッ!

シン「ハッ?!」

ダブルオーFSが投げたGNビームサーベルダガーモードの1基は、デステイニーのGNビームライフルによって破壊されたが、もう1

基は破壊されずにデステイニーのGNビームライフルを破壊した。

シン「何をッ！」

デステイニーは投げたGNビームブーメランを取り、更にもう1基のGNビームブーメランを取り出し、両方ともサーベルモードにした。

ダブルオー7Sも2基のGNカッターを両手に持ち、構えた。

シン「まさかこんな短時間で…」

刹那「……………」

シン「まあ、無駄話をするより、戦った方が良いか!!」

デステイニーはダブルオーに突撃した。

刹那「！」

ダブルオー7Sもデステイニーに突撃し、激しい格闘戦を行った。

シン「はああああああああああああああああ!!」

刹那「うおおおおおおおおおおおお!!」

どちらも二刀による連続攻撃、防御、回避。

それは人間が『操縦している』というより、人間が『着ている』様な動きだった。

それが『モビルスーツ』たる所以なのだが。

シン「うっ！」

刹那「くっ！」

防御、回避仕切れなかった攻撃は次々と機体の装甲を損傷させた。それでも、まだ機能不全に陥る程ではない為、気にせずに戦闘を続けた。

だが、永遠とはいかなかった。

刹那「ハア…！ ハア…！ ハア…！」

シン「ゼエ…ゼエ…ゼエ…」

機体は例え無傷でも、それを操縦するパイロットには、『疲労』というものがあるからだ。

刹那「ハア…！ ハア…！（これは…、シンの奴、思った以上に強いな…。だが、それ以上に…）」

刹那が危惧しているのは、シンの体力の高さである。

シンはコーディネーターとしては少し低い身体能力だが、努力と才能でザフトのエースの証である赤服を着る程の実力を持ち、更にとにかく体が丈夫なのだ。

刹那「（その前に一気に決める！）」

ダブルオー７SはGNカッターをデステイニーに投げ付けた。

シン「！？」

シンはダブルオー７SがGNカッターを投げる速度に目が追い付かず、咄嗟に右腕のGNシールドで防いだ。

ザン…ッ！

シン「なっ…?!」

だが、GNカタールはデステイニーの右肩の付け根に命中した。

シン「(まさか…狙いはこれか…?!)ハッ!？」

目の前に左手にGNカタールを持ったダブルオー7Sが迫っていた。

シン「クッ!」

デステイニーはGNビームブーメランを投げ、右肩に突き刺さったGNカタールを引き抜いた。

ダブルオー7Sは難なくGNビームブーメランを弾き飛ばした。

シン「クッ…! こんな所で…俺はッ!」

パリイイイイイ!!

シンの頭の中で『赤い種』が弾けた。

刹那「止めだ!」

ダブルオー7SはデステイニーにGNカタールを突き刺した。

刹那「ッ!」

デステイニーはダブルオー7Sの攻撃を掠りながら躲した。

シン「食らえッ!」

デステイニーはGNカタールを振り下げ、ダブルオー7Sの左腕の前腕部を切断した。

刹那「だが！」

ダブルオー7Sはデステイニーの左腕に膝蹴りをかまし、デステイニーからGNカタールを放した。

更にダブルオー7SはそのGNカタールを取った。

シン「チッ！」

デステイニーはダブルオー7Sから離れた。

刹那「まさかセブンスードがGNカタール1基残して全て無くすとは…。だが…」

シン「右腕は肩からアウト。GNバスターランチャーはあるけど、右側になったから右手で保持が出来ないから命中率が下がってダメ。だけど…」

デステイニーは左手を突き出し、ダブルオー7SもGNカタールを突き出した。

シン&刹那「まだコイツがある！！！」

デステイニーの掌底にあるGNハンドバスターがGN粒子ビームで輝き、ダブルオー7SはGNドライブを後ろに回した。

シン「粒子を最大出力で…」

刹那「全て武器と推力に回す！」

互いの武器とGNバーニアの輝きが強くなった。

二人「行くぞ（ぜ）！！」

そして、2機は最後の武器を携え、突撃し――

フッ…

シン「え？」

刹那「は？」

突如コクピットが暗くなり、二人は何とも間抜けな声を出した。

スメラギ『盛り上がっている所悪いけどアロウズが来たわ！ 至急戦闘体勢に入って。』

そう、忘れてはならない。これは『シュミレーションによる模擬戦』なのだ。

刹那「…了解！」

シン「……………」

スメラギ「シン？」

シンの体はワナワナと震えていた。

シン「…薙ぎ払う…」

スメラギ「えっ？」

シン「アロウズの奴ら！ 邪魔をしゃがって！ 徹底的に薙ぎ払ってやる！！」

シンはそう叫び、出撃した。

ラッセ「彼方さんが逃げるまで暴れるな、こりゃ。」

スメラギ「…ハア……。」

スメラギは深い溜め息を吐いた。

その後、デステイニー単機によってアロウズ部隊は3分の1を撃墜されて『逃げた』。

そして、シンは帰艦したと同時に気絶した。

アニユー「過労ですね。」

刹那「あのシンが倒れるとはな。」

ティエリア「それは君が言うセリフではない。」

外伝その2 模擬戦（後書き）

外伝はこれで最後になります。（はええな

…ってか、シン、SEED発現してたわ…
覚えて無さ過ぎだろ俺！

…ま、いつか。外伝だし。（おい

第21話 交錯する想い（前書き）

シン、ぶちギレてぶっ倒れた。

第21話 交錯する想い

第18話終了から4ヶ月後

CBはメメントモリに攻撃を仕掛けた。

ティエリア「道を開く！」

セラヴィーとケルデймは地球側からアロウズ部隊を攻撃し、宇宙側から残りのガンダム達が攻撃をした。

アレルヤ「流石アロウズ、守りが堅い！」

ソーマ「アレルヤ！」

アレルヤ「分かっている！」

アリオスとGNアーチャーが分離し、アロウズ部隊を攪乱しながら攻撃をした。

シン「食らえ！」

デステイニーは右手にはGNビームライフル、左手にはGNダブルビームライフルを持ち、アリオス達と連携を取りながら、それで敵MSを確実に撃破していた。

因みに、『GNティエレン』はこの4ヶ月を掛け、殆ど完成状態だが、最終調整が必要で、この戦闘には参加出来なかった。

シン「刹那！」

刹那「了解！」

ダブルオーRはメメントモリに接近した。

刹那「ジェネレーターの制御は？」

沙慈「やってる！（協力するのは今回だけだ。衛星兵器を破壊するためなら…）」

ピピッ！

沙慈「あつ、同調した！」

刹那「了解。トランザムライザー……！」

ダブルオーRはトランザムを発動し、ライザーソードを使用した。

刹那「うおおおおおおおッ……！」

トランザムライザーはオービタルリングを傷付けない様にメメントモリを切り裂き、メメントモリは爆散した。

こうして、全てのメメントモリは、CBによって完全破壊された。

セルゲイ「……あれは『人間の手に』過ぎた物なのかもな。」

セルゲイはブリッジでメメントモリの破壊を見て、そう言った。

ブトレマイオス2

第1格納庫

シン「流石に敵の守りは堅かったけど、これで衛星兵器は全部破壊したな。」

刹那「ああ、そうだな。」

マユ「あ、お兄ちゃん、刹那さん、どうぞ。」

マユはシンと刹那に飲み物を持ってきた。

シン「サンキュー、マユ。」

刹那「ん。」

シンと刹那はマユから飲み物を貰った。

シン「そういえば、後で診察受けるんだろ？」

刹那「ああ、そうだ。」

シン「俺も一応受けるか。」

刹那「そうか。」

刹那とシンは医務室に向かった。

医務室

シンと刹那は診察を受けていた。

スメラギ「刹那の容体はどう？」

アニュー「肩口の傷を中心に、細胞の代謝障害が広がっています。」
スメラギ「擬似GN粒子の影響……」

アニュー「ですが、その進行が極めて緩やかなんです。ラッセさんの症状とはまるで違う。何かの抑制が働いているとしか……」
スメラギ「シンは？」

アニュー「シンも同様に細胞障害の進行が穏やかです。」

ティエリア「(こういう時に、ヴェーダにアクセス出来れば……)」

刹那「(アリー・アル・サーシェス。いや、ダブルオーを手にいれようとする、イノベーターの策略。つまり、ツインドライブの情報は、向こうには無いということ。切り札は……オレのガンダム。)」

シン「(アスラン・ザラ。何でアンタが……いや、アイツの存在は俺に『異世界の人間』という事を認識させようとしているのか……？

だけど、俺は『この世界の人間』として戦う。矛盾、罪、罰、償い、報い。その果てにこの世界の、『未来と変革への扉』があるというのなら、命が尽きる間際でもいい、見てみたい。)」

刹那とシンは診察を終え、ブリッジに来た。

ラッセ「遂に連邦軍が、アロウズの指揮下に入りやがったか。」

セルゲイ「やはりか……。」

シン「世界はますますイノベーターの思い通りになるぞ？」

ラッセ「ああ。」

フェルト「この4ヶ月間だけでも、アロウズからの攻撃は20回を超えているのに……」

ミレイナ「私達、ジリ貧ですう……！」

ラッセ「その件だが、やはり敵さんはこっちの位置を特定出来るじ

やないのか？」

ミレイナ「ますますジリ貧ですうゝ！」

シン「…この擬似太陽炉は、ヴェーダとのリンクを切断してあるから問題は無いとは思うけどな…」

ティエリア「スメラギ・李・ノリエガ。やはり例の作戦を実行に移したほうがいい。」

フェルト「例の作戦？」

シン「何する気なんだ？」

スメラギ「ヴェーダよ。連邦、いいえ、イノベーターは、ヴェーダを使って情報統制しているとみて、まず間違いないわ。ヴェーダを奪還すれば。」

ラッセ「だが、肝心のヴェーダの所在が判らなければ、どうしようもないだろ。」

刹那「ならば、情報を知っている者から話を聞くしかない。」

ラッセ「えっ？ まさか、イノベーターを…」

刹那「そうだ。」

ティエリア「そのまさかだ。」

刹那達が提案したのは、イノベーターの捕獲だった。

マユ「へえゝ、そんな事をするんだ。」

シンとマユは通路で話していた。

マユ「でも、どうやって捕まえるの？」

シン「イノベーターの機体は撃破されてもコアファイターの技術を

使った脱出機能がある。その脱出したコアファイターを捕獲すれば

――」

キンッ！

シン「うあっ！？」

シンの頭に何かが突き抜け、シンは一瞬、目眩の様なふらつき方をした。

マユ「お兄ちゃん！？ 大丈夫？」

シン「あ…ああ…。何なんだ…？ 今のは…？ 何か…電気みたいなのが鋭く走った様な…、そんな感じが…。」

マユはただただ困惑するシンを見ていた。

因みに、シンと同様の『異変』はソーマと刹那にも起きていた。

――

ブトレマイオス2は接近するアロウズ部隊を捉えた。

フェルト「光学カメラがMS部隊を捕捉しました。戦闘宙域到達まで0054。」

ミレイナ「総員、大変です！ 敵が来るです！ そんなこんなでいつもの感じで宜しくですう！」

フェルト「ミレイナ、はしより過ぎ！」

ティエリア「フッ。刹那、肩の具合は？」

刹那「問題ない。」

刹那はティエリアの問いにそう答えた。

シン「色々はしよるなああああああ！！」

マユ「ハハッ」

シンはスピーカーに向けて叫んだ。

マユ「お兄ちゃん。」

シン「ん？」

マユ「頑張ってきてね。」

シン「ああ。」

シンはサムズアップをして、デステイニーの所に向かった。

アレルヤ「…行くんですね？」

セルゲイ「ああ、これは連邦軍を正しき道を戻す戦いだ。」

マリ「では、アンドレイ少尉は？」

セルゲイ「あれも軍人なら、覚悟はある筈だ。」

因みにアンドレイはクーデターの首謀者であるハーキュリーを撃つた事により、中尉に昇格し、乗機もジンクス？からアヘッドに換わっている。

イアン「おお、此処にいたか。」

アレルヤ「イアンさん。」

イアン「GNティエレンの調整が終わった所だ。」

セルゲイ「感謝します。」

イアン「いや、そんな感謝される覚えはないんだがな。」

セルゲイ「…そうか。」

アレルヤ「行きましょう。」

セルゲイ「ああ、そうだな。」

アレルヤ達はそれぞれの機体の所に向かった。

スメラギ「状況は？」

フェルト「アロウズのMS部隊、計12機を捕捉しています。」

アニュー「意外に少ないですね。」

スメラギ「油断しないで。」

ラッセ「けどチャンスだ。敵部隊にイノベーターの専用機がいる」

モニターにはガデッサが映っていた。

刹那「あつ、沙慈・クロスロード…」

刹那の前に沙慈が出てきた。

沙慈「アロウズの部隊の中にルイスの乗った機体があったよ。この4ヶ月は戦力を整える為に、敵から逃げ続けてきた。でも、もう戦うんだろ？」

刹那「ああ。」

沙慈「ルイスを撃つつもり？」

刹那「それは、お前次第だ。」

沙慈「あつ…」

刹那「戦いは破壊する事だけじゃない。創り出す事だって出来る。俺は信じている。俺達のガンダムならそれが出来ると。後は、お前次第だ。」

沙慈「僕は…引き金を引けない…」

刹那「分かっている。」

沙慈「ルイスに叫び続ける事しか出来ない…」

刹那「分かっている。」

沙慈「それでも…僕は…僕は…」

そこで刹那は沙慈に手を差し伸べ、こう言った。

刹那「会いに行こう。ルイス・ハレヴィに。」

沙慈「ああ…ああ！」

フェルト「トレミー、第1、第2、第3ハッチオープン！」

ミレイナ「アーデさん、戦果を期待するですう！」

ティエリア「了解。セラヴィー、ティエリア・アーデ、行きます！」

セラヴィー出撃

アレルヤ「準備はいいかい？」

ソーマ「ええ、何時でも。」

アレルヤ「アーチャーアリオス、アレルヤ・ハプティズム、ソーマ・
ピーリス、迎撃行動に向かう！」

アーチャーアリオス出撃

セルゲイ「…まさかCBの艦艇からMSで出ようとは…。フ、何
が起きるか判らないな。」

フェルト「GNティエレン、発進どうぞ。」

セルゲイ「（オペレーターとはいえ、5年前からCBのメンバーと

して活動していたとはな…）了解、GNティエレン、セルゲイ・スミルノフ、出る！」

GNティエレン出撃

シン「（世界の変革と未来の為に命を投げ捨ててまでも戦いたいところだけど…）」

シンはプロレマイオス2のブリッジの補助席のモニターを開いた。

マユ『お兄ちゃん？』

そこにはマユがいた。

シン「マユ、行ってくる。」

マユ「うん。気を付けてね。」

マユは笑顔で返事をした。

シン「（こんな笑顔を見せられたら、意地でも生きて帰りたくなるな。それに、あの笑顔を悲しみて潰したくないからな…。）デステイニー、シン・アスカ、目標を薙ぎ払う！」

デステイニー出撃

ロックオン「アニュー、聞いてるか？」

アニュー「どうかしたの？」

ロックオン「愛しているよ。」

アニュー「えっ!？」

アニューはロックオンの言葉に顔を赤らめた。

ミレイナ「おお〜！」

マユ「告白?!」

ラッセ「正に狙い撃ちだなあ。」

スメラギ「ていうか、いつの間に…!?!」

ミレイナ「すごいですう〜! 恋の花が咲いたですう〜!」

マユ「ミレイナちゃん落ち着いて!」

フェルト「おめでとうございます。」

アニュー「えっ…あ…良いから行って!」

ロックオン「オーライ。ケルディム、ロックオン・ストラトス、狙い撃つぜ!」

ケルディム出撃

刹那「会いに行くぞ、沙慈。」

沙慈「ああ。行こう刹那。」

刹那「ダブルオー、刹那・F・セイエイ、出る!」

沙慈「オーライザー、沙慈・クロスロード、発進します!」

ダブルオーとオーライザーは出撃し、直ぐ様ドッキングした。

沙慈「ルイス…」

ルイス「沙慈…」

セルゲイ「アンドレイ…ピーリス…」

ソーマ「大佐…」

マリー「アレルヤ…」

アレルヤ「マリー…」

ライル「アニュー…」

シン「マユ…ステラ…」

ティエリア「ヴェーダ…」

刹那「ガンダム…！」

スメラギ「ミッシェン、スタート！」

第21話 交錯する想い（後書き）

H G エクシア系が10体目突入だぜ。

GNティエレンの解説

GNティエレン

武装、GNビームライフル（サーベル付き）、GNビームライフル（アヘッド）、GNビームサーベル×2、

セルゲイのティエレンタオツーにアヘッドを組み込んだ機体である。

機体の見た目はほぼティエレンタオツーだが、センサー類やOSが一新され、関節部分にはGNコンデンサーが組み込まれ、肩と胴体の間のパーツ（GNビームサーベルのキャリア）と太股部分が殆どアヘッドのままである。

背中部分は太陽炉（GN粒子タンク）と、本来なら胸部に組み込むGNコンデンサー、始動機を組み込む為にティエレン、アヘッドとも違う形状になっている。

基本的には擬似太陽炉ではなく、GN粒子タンクで行動する。

機体の性能はアヘッド GNティエレンである。

GNビームライフル（アヘッド）は、GNティエレンに組み込まれたアヘッドの物と、デスティニーが奪った物しかない。

第22話 イノベーターの影（前書き）

歪みねえ刹那とティエリア。
後、地味にシンも。

第22話 イノベーターの影

スメラギ「総員、敵MS部隊に対して、戦術プランS43で迎撃準備。敵は12機。恐らく増援が出てくるでしょうね。皆、油断しないで。」

一同「了解！」

刹那「沙慈、ルイス・ハレヴィに会いにくぞ。」

沙慈「ああ！（ルイス…）」

刹那「ダブルオーR、先行して敵部隊を叩く！」

ダブルオーRはアロウズ部隊に突撃し、他のガンダムらもダブルオーRに続いた。

刹那「彼女の機体を捜せ！！」

沙慈「あ、ああ！」

沙慈はオーライザーのセンサーをフルに使い、ルイスの機体を捜した。

リヴァイヴ「ツインドライブだからと！」

ガデッサがダブルオーRに攻撃した。

だが、ダブルオーRはその攻撃を躲した。

刹那「イノベーターの機体を捕捉した。ティエリア！」

ティエリア「了解！」

リヴァイヴ「ふん！」

セラヴィーとガデッサは戦闘を開始した。

沙慈「ルイスは…？ ルイスの機体は？！」

フェルト「左右より、敵部隊の増援です！」

ラッセ「やつぱり来やがったか！」

フェルト「総数14です！」

スメラギ「プランD67で、ダブルオーとセラヴィー以外の機体に
応戦させて。アニュー、回避行動を。」

アニュー「わかりました。」

アレルヤ「ミサイルで弾幕を張る。ピーリス！」

ソーマ「分かった！」

アーチャーアリオスはGNミサイルで弾幕を張った。

セルゲイ「（アンドレイ…お前は何処にいる?!）」

GNティエレンでジnkス？を撃破しながらセルゲイはそう思った。

ハロ「敵機接近！ 敵機接近！」

ロックオン「チツ、ハロ、シールドビットをアサルトモードだ。」

ハロ「了解！ 了解！」

GNシールドビットは、4基ずつが十字に重なり、強力なビームを
放った。

ロックオン「お前らをぶちのめせば、アニューがどこの誰だろうが
！」

ケルディムはアロウズ部隊に突撃した。

シン「クッ！ いい加減にしろッッ！！ アンタらは、俺が薙ぎ払ってやる！！ ハイパーモード！！」

デステイニーはハイパーモードを起動し、アロウズ部隊に突撃した。

リボنزは脳量子波でヒリングとリンクしていた。

リボنز「ダブルオーが出撃している？ いいさ、君に任すよ、ヒリング。」

リボنزはヒリングとのリンクを切った。

リボنز「ヴェーダの予測では、彼の細胞異常は致死レベルに達している筈。ツインドライヴが関係している？ まさか、変革をはじめたというのか…刹那・F・セイエイ。」

ダブルオーRはルイスの機体を捜していた。

刹那「沙慈、彼女の機体は？」

沙慈「どこにもいない！」

刹那「よく捜せ！」

沙慈「やってるよ！」

ピピッ！

沙慈「はっ！ あれは！」

沙慈はプトレマイオス2に近づく隕石に気付いた。
だが、そこにヒリングのガラッゾが接近した。

刹那「来る！」

ヒリング「借りは返させて貰うよ！ ブリングとデヴァインの分も
ねー！」

ガラッゾがダブルオーRに攻撃し、唾競り合いを行った。

沙慈「刹那！ 母艦に近づく隕石が2つ！」

刹那「な、何？」

ヒリング「戦闘中に余所見なんて！」

ピピッ！

ヒリング「！？」

シン「刹那！ 沙慈！」

デステイニーはガラッゾに攻撃した。

刹那「シン！」

ヒリング「チッ！ コイツうー！」

デステイニーとガラッゾは唾競り合いを行った。

シン「コイツは俺がやる！ 刹那達は行ってこい！ そして取り戻してこい！ 沙慈！」

沙慈「あ……！」

刹那「了解！ トランザム！」

ダブルオーRはトランザムを発動し、プトレマイオス2に向かった。

ヒリング「逃がすかあ……！」

シン『ハッ！ それは此方のセリフだッ……！』

ヒリング「脳量子波っ……！」

シン「食らえッ……！」

デステイニーはガラッゾの顔面にGNバルカンの雨を浴びせた。

ヒリング「ハッ……！ メインカメラ！ クソッ！ コイツッ……！」

シン「ハハッ、イノベーターが形無しだぜ……！」

ヒリング「うう……！ この前の貸しを返させて貰うよ……！」

シン「出来るもんならなッ……！」

デステイニーとガラッゾの戦闘は、終始デステイニーが優勢だった。

ハレルヤ「ヒヤハハハハッ……！ この加速粒子ッ！ オレらの脳量子波にギンギン来るぜええ！ そうだろお……！ アレルヤアアアアアアアアアッ……！」

アレルヤはトランザムライザーの影響でハレルヤに豹変し、アリオスは飛行形態からGNビームシールドを展開し、それでアヘッドを噛み千切った。

一方、プトレマイオス2に接近していた2つの隕石は偽装用のダミーであり、その中から2機のMSが出てきた。

ミレイナ「隕石からMSが出てきました!」

スメラギ「そんな手、二度は食わない! ラッセ!」

ラッセ「了解! ミサイル一斉発射!」

刹那& a m p・沙慈『やめろおおおおおおッッ!!!』

刹那と沙慈は量子空間で手を広げ、立ちはだかった。

ラッセ「何?!」

スメラギ「声?」

マユ「これって…」

ミレイナ「今は…?」

フェルト「刹那、沙慈。」

アンドレイ「あの光は…また幻聴が。」

ルイス「まさか…」

そう、プトレマイオス2に奇襲を仕掛けたのは、アンドレイのアヘッドと、ルイスのアヘッドスマルトンなのだ。

沙慈「ずっと待ってた、会いたかった!」

刹那「兵器ではなく、破壊者でもなく、オレと、ガンダムは変わる!」

沙慈「ルイス!」

ルイス「はっ!」

アンドレイ「ガンダム！」

アヘッドはトランザムライザーにGNビームサーベルで攻撃したが、弾き飛ばされた。

沙慈「ルイス…ルイス！」

ルイス「はっ…！ 沙慈？」

沙慈「そうだよ、僕だ！ 沙慈・クロスロードだ！」

ルイス「沙慈。」

フェルト「あの光は…」

ミレイナ「粒子放出量が、通常の7倍を示しています！」

アニュー「あれがツインドライヴの…」

ラッセ「ダブルオーの光。」

マユ「あ…」

スメラギ「聞こえたわ、刹那。あなたの声が…あなたの思いが。」

ヒリング「あああああッッ…！」

ガラッゾは両肩をデステイニーに破壊された。

シン「よし！ このまま捕まえて…ハッ？！」

デステイニーは粒子ビームを躲した。

シン「クッ！ 何！？」

シンはこちらに接近する機体を見付けた。

シン「ッ！ あれは……！」

シンはリフターにガデッサらガシリーズの追加ブースターを付けた
紅いMSがデステイニーに接近するのを確認した。

シン「あの機体……ジャステイス……！」

シンがそう叫んだと同時に、∞ジャステイスはリフターの追加ブースターを切り離した。

シン「アスラン・ザラ……！ この傷と利き手が変わった事に対する『礼』でもさせようか？！」

アスラン「……………」

シン「チツ、また黙りかよ！ ったく、やっぱりイノベイターに何か弄られました？ アンタ？」

アスラン「……………」

∞ジャステイスはGNビームサーベルを取り出し、デステイニーに攻撃をした。

シン「コイツ……！」

デステイニーはGNビームブーメランをサーベルモードにして取り出し、唾競り合いを行った。

シン「邪魔すんじゃないよ……！」

デステイニーは∞ジャステイスを弾き飛ばした。

シン「いや…今此処でアンタを葬れば、少なくとも、もし、イノベ
イターとの『最終決戦』があった時に此方が有利になる筈だ。だか
ら此処でアスラン・ザラ、アンタを薙ぎ払うッ!!」

デステイニーはGNバスターソードを引き抜き、鋒を∞ジャステイ
スに向けた。

アスラン「……まえが……」

シン「ん？」

アスラン「…お前が…カガリを…」

シン「…!」

アスラン「お前がカガリを殺したあああああッッッ!!」

アスランは雄叫びを上げ、∞ジャステイスはデステイニーに突撃し
た。

シン「はん! やつと喋ったか!」

デステイニーと∞ジャステイスは激しい戦闘を行った。

リボンズ「…やれやれ、まさか僕の掛けた意思のブロックが焼き切
れるとはね。まあいい、これはこれで面白い事になりそうだね。」

その頃、トランザムライザーはアヘッドスマルトンと接触し、沙慈
はルイスとの『対話』に挑んだ。

その『対話』は、上手くいくと思われたが、アンドレイの Ahead によって妨害された。

ガデッサはセラヴィーの砲撃を躲し、パンチでGNバズーカ？を破壊した。

セラヴィーはそのガデッサの手を掴み、残ったGNバズーカ？をガデッサに向けた。

ガデッサもGNメガランチャーをセラヴィーに向け、その砲口は互いの武器に向けられる形になり、そのまま砲撃し、GNバズーカ？とGNメガランチャーは破壊された。

セラヴィーとガデッサは爆煙から出て、GNビームサーベルによる唾競り合いを行った。

ティエリア「その機体、やはり接近戦が得意ではないらしい。」

リヴァイヴ「君の機体程じゃないさ。火力ばかり優先して。」

ティエリア「それはどうかな？ トランザム！」

セラヴィーはトランザムを発動し、そのパワーでガデッサを弾き飛ばした。

リヴァイヴ「ええい…！」

更に、セラヴィーは肩と膝のGNキャノンを腕に変形し、腕のと合わせて計6本ものGNビームサーベルを持ち、ガデッサに突撃した。

リヴァイヴ「はああああっ！」

ガデッサはGNバルカンでセラヴィーを迎撃したが、セラヴィーはGNフィールドでそれを防ぎ、尚も突撃した。

リヴァイヴ「くっ…！」

ガデッサはGNビームサーベルでセラヴィーの攻撃を受け止めるが、セラヴィーには計6本もの腕とGNビームサーベルがあり、対してガデッサは2本の腕とGNビームサーベルしかない。セラヴィーは余った腕とGNビームサーベルでガデッサを斬り付けた。

リヴァイヴ「ば…馬鹿な…！？」

爆発するガデッサからコアファイターが射出した。

ティエリア「逃がさん！ セラフィム！」

セラヴィーからバックパックが分離、変形し、セラフィムになり、コアファイターを捕獲した。

ティエリア「君には聞きたい事がある。答えてもらうぞ、イノベーター！」

リヴァイヴ「……………」

リヴァイヴは顔を俯いていたが、その口元は、何かを企むように少しだけ笑みを浮かべていた。

トランザムライザーはアヘッドの攻撃を躲していた。

刹那「トランザムの限界時間が！」

沙慈「ルイスうー！ー！！」

アンドレイ「准尉は渡さん！」

ピピッ！

アンドレイ「はっ？！」

刹那「GNティエレンか！」

セルゲイ「アンドレイ！」

アンドレイ「その声は…ハッ！ まさか！？」

GNティエレンとアヘッドはGNビームサーベルによる唾競り合いを行った。

アンドレイ「クッ！ クーデターに加担して、次はCBか！！ 何なんだ！ アンタはッ！！」

セルゲイ「……………」

アンドレイ「だったら、この手で引導を渡してやる！」

アヘッドは唾競り合いを解き、GNティエレンに攻撃した。

セルゲイ「甘い！」

アンドレイ「！？」

GNティエレンはGNビームサーベルを傾け、アヘッドの攻撃を受け流した。

アンドレイ「なっ…?!」
セルゲイ「フンッ！」

GNティエレンはそのままアヘッドの右腕を斬った。

アンドレイ「クッ！ 撤退する！ 准尉！」

アヘッドはアヘッドスマルトンを引き連れて撤退した。

沙慈「ルイス…」

セルゲイ「クッ…！ アンドレイ…」

ソーマ「あ…」

刹那「……………」

アスラン「うおおおおおおおッ！…！」
シン「クッ、うつ…！」

デステニーは∞ジャステイスの猛攻に防戦一方だった。

ピピッ！

アスラン「何！？ 撤退命令？！ クッ…！ シン…！」

∞ジャステイスは撤退した。

シン「なっ…何だ？ 撤退…した？」

アレルヤ「シン、大丈夫かい？」

アリオスがデステイニーの側に来た。

シン「まあ…何とかね。ソツチは？」

アレルヤ「ティエリアがイノベイターを捕まえた。」

シン「マジで？…だったら、色々と話が聞けそうだな。」

デステイニーとアリオスは、プトレマイオス2に帰艦した。

シン「ティエリア、コイツがイノベイターか…？」

ティエリア「ああ、そうだ。」

シン「パイロットスーツからじゃ分らないが、俺達コーディネーターと一緒に見た目はやっぱり普通の人間か…」

ティエリア「フツ、当たり前だ。……『イノベイターを直接見た』僕が保証しよう。」

シン「（…？）ああ、そうだったな。」

ロックオン「……………」

セルゲイ「（これが世界を裏から操る存在、イノベイターか…）」

シン達マイスターとスメラギ、セルゲイは現在、捕獲したりヴァイヴと一緒に部屋にいた。

プシュー

と、其処に遅れて刹那が入ってきた。

刹那「遅くなったな。そいつがイノベーターか。」

ティエリア「ああ、間違いない。」

スメラギ「ヘルメットを取ってもらえる？」

リヴァイヴ「……………」

リヴァイヴはヘルメットを脱いだ。

ロックオン「はっ……………」

そのリヴァイヴの目は、『ロックオンが何時か見たアニューの目と同じ金色の輝き』を放っていた。

リヴァイヴ「初めまして、CBの皆さん。僕の名はリヴァイヴ・リバイバル……イノベーターです。」

スメラギ「イノベーターについて、話してもらえるかしら？」

ロックオン「アニュー……………」

ブリッジでは、『異変』が起きた。

ラッセ「ん！？ アニュー、予定進路から外れてるぞ。修正を……………」

アニュー「……………」

アニューは無言でラッセに拳銃を向けた。

ラッセ「あ…アニュー！？」

そのアニューの目は、『金色に輝いていた』。

二人「あっ」

ミレイナ「はっ！」

フェルト「リターナーさん！？」

ミレイナ「何をするんですか！？」

アニュー「何をする？ そんな事決まってるわ。だって私は『イノベーター』なんだから。」

ラッセ「あっ…」

そう、アニューはリヴァイヴと同じ塩基配列パターンの遺伝子を持つイノベーターなのだ。

これまで、プトレマイオス2の位置が知られていたのは全てリヴァイヴがアニューにリンクを行った為である。

ロックオンがリヴァイヴの金色に輝く目を見て驚いたのは、アニューと一緒に部屋にいた時にアニューがリンク状態になったのを見たからである。

バンッ…！

そして、プトレマイオス2のブリッジに銃声が響いた。

第22話 イノベーターの影（後書き）

次回は『アニユ・リターン』だぜ…

第23話 アニュー・リターン（前書き）

CBはイノベーターの捕獲作戦を行い、そして、リヴァイヴの一人であるリヴァイヴを捕獲したが…

第23話 アニュー・リターン

リヴァイヴ「ヴェーダの所在？ さて、僕には判りかねますが。」

アレルヤ「イノベーターの君が知らないというのか。」

リヴァイヴ「仮に所在を知っていたとして、あなた方はヴェーダをどうなさるおつもりですか？」

ティエリア「奪還する。」

リヴァイヴ「フツ、ヴェーダは本来、僕たちが使用するために造られた物ですよ。」

スメラギ「だったら聞かせて。あなた達は、ヴェーダを使って何をしようとしているの？ イオリアがこの計画を立案した真意は？」

リヴァイヴ「来るべき対話の為です。」

スメラギ「来るべき対話？」

刹那「……………」

ティエリア「ッ……………」

アレルヤ「話が見えないな。」

リヴァイヴ「それが人間の限界ですよ。」

シン「限界も何も、いきなりそんな話をされても困るんだけだな。」

リヴァイヴ「フツ、それは自分達で考えてみたらどうでしょう？」

シン「…チツ、コイツ…。（出来ればこの場で血祭りに上げてやる。）」

ロックオン「てめえが万能だとは思えないがな。現にこうして捕まってる。」

リヴァイヴ「わざと……………」

皆「！……………」

リヴァイヴ「だとしたら？」

ロックオン「何ッ!？」

シン「落ち着けよ！」

シンはロックオンを抑えた。

ピピッ！

フェルト『スメラギさん！』

スメラギ「どうしたの？ フェルト。」

フェルト「リターナーさんが…」

ロックオン「アニユーがどうした？」

フェルト「ラッセさんを撃って、ミレイナを人質に…」

アレルヤ「なっ…なんだって！？」

フェルト「リターナーさんは、自分が、イノベイターだと。」

ティエリア「イノベイター？」

スメラギ「アニユーが？」

アレルヤ「どうして…」

ロックオン「クッ…！」

シン「まさかアンタ…！」

シンはリヴァイヴを見た。

リヴァイヴ「フッ。」

リヴァイヴは部屋から出ようとした。

シン「待てよオイ！」

刹那「動くな！」

刹那は拳銃を構えた。

リヴァイヴ「分かっているでしょう？　僕に何かあれば、人質の命は保証できませんよ。同タイプである僕とアニューは思考をつなぐ事ができるんです。わかるでしょう？」

シン「チッ！」

ティエリア「脳量子波…あっ！」

リヴァイブは悠然と部屋から出た。

ロックオン「クッ！」

。

スメラギ「ッ…」

スメラギはリヴァイブを止めようとしたロックオンを止めた。

リヴァイヴ「（アニュー、後は手筈通りに。）」

ドアが閉まった直後、電気が消えた。

皆「はっ！」

スメラギ「艦内システムが！」

ロックオン「くそっ！」

シン「ドア開けるぞ。」

アレルヤ「ああ。」

ロックオン「言われなくても！」

シン達は自力でドアを開けようとした。

アニューは拳銃をミレイナに突き付け、ミレイナはアニューの言う
とおりに作業をせざるを得なかった。

ミレイナ「リ、リターナーさん、止めないですか？ 今なら皆も…」
アニュー「黙って。」

ミレイナ「は、はいです。」

アニューはミレイナを人質にとりながら船内を進んでいた。

アニュー「あつ…！」

ソーマ「ここから先には行かせん！」

すると、二人の前にソーマが現れ、拳銃を向けた。

ミレイナ「ピーリスさん！」

アニュー「何故ここが…？」

ソーマ「脳量子波が使えるのが自分だけだとは思っな！」

スメラギ「艦内システムがウイルスに汚染されてる！？」

刹那「二手に分かれてミレイナを捜す。」

アレルヤ「スメラギさんはブリッジに。」

スメラギ「分かったわ。」

ロックオン「クソッ…！ アニューは何処に…」

刹那「こつちだ。」

ロックオン「お…おい！」

シン「いや、刹那の後を着けば…」
ロックオン「…分かった。」

シンとロックオンは刹那の後を着いて行った。

ミレイナ「ピールスさんが来てくれたです…助かったです…」
アニュー「ふっ、貴女が存在を失念していたわ。Cレベルの脳量子
使い…出来損ないの超兵…」

ソーマ「全ての元凶はお前達だ。これ以上は…」

刹那「やめろ！」

ソーマ「はっ！」

ミレイナ「セイエイさん！ アスカさん！ ストラトスさん！」

シン「クッ！ アンタ何を…！」

ロックオン「止めとけよ！ アニュー！」

アニュー「ライル…」

ロックオン「フツ、俺を置いて行っちまう気か？」

アニューはミレイナに拳銃を向けた。

ミレイナ「キャッ！」

アニュー「私と一緒に来る？ 世界の変革が見られるわよ？」

ロックオン「ふっ…オーライ！ 乗ったぜ、その話。」

アニュー「！？」

ミレイナ「ええっ！？」

ロックオン「オマケにケルディムも付けてやるよ。」

シン「（ロックオン…？）」

ロックオンが言っているのは、明らかな裏切り。
だが、シンはそんなロックオンを止める気にはならず、寧ろ『裏』
が有ると思っていた。

ロックオン「そういう訳だ、刹那。今まで世話になったな。」

刹那「……………」

シン「（どう出る？ 刹那…。）」

刹那「そうか…分かった！」

刹那はソーマから拳銃を奪い、ロックオンに撃った。

シン「！」

ミレイナ「キャー！」

アニュー「ライル！」

ロックオン「…くっ…ふっ！」

ミレイナ「キャッ!？」

ロックオンはアニューからミレイナを奪い返し、刹那はアニューに拳銃を向けた。

アニュー「はっ！」

アニューはそのまま逃走した。

ロックオン「くっ…！」

ミレイナ「うっつ…う…」

刹那「大丈夫か？」

ライル「当てる事ねえだろ…ったく。」

シン「…あ！ チッ、逃がした…！」

シンは頭を掻いた。

リヴァイヴはオーライザーを奪い、アニューは小型艇を使ってプロマイオス2から出た。

ダブルオーとケルディムは、先ずはオーライザー奪還に向かった。ケルディムはダブルオーの背中を掴み、トランザムを起動した。

リヴァイヴ「ハッ！ トランザムを使ったか！」

尚も逃げるオーライザーだが、ダブルオーとケルディムは二手に分かれ、オーライザーを囲んだ。

刹那「ここまでだ！」

リヴァイヴ「この機体を傷付けるつもりかい？」

刹那「俺達には優れた戦術予報士がいる。」

リヴァイヴ「何っ！？」

赤ハロ「トウ！」

赤ハロがシートの後ろから飛び出した。

リヴァイヴ「くっ…！？ 何だ…こいつ！ ええいつ！」

赤ハロ「イテッ！」

リヴァイヴは赤ハロを突き飛ばしたが、それで赤ハロは専用ポッドに収まった。

赤ハロ「オーライザー、ドッキングモード！」

リヴァイヴ「くっ…」

オーライザーはダブルオーとドッキングした。

リヴァイヴ「システムがダブルオーに？ くっ…コントロールが！」

ピピッ！

リヴァイヴ「はっ！」

刹那「ロックオンの言った通り、万能には程遠いようだな。」

リヴァイヴ「くっ…！ フッ…」

刹那「！」

リヴァイヴ「仕方ない、オーライザーは諦めるよ。でも、手土産の一つぐらいは…」

刹那「！？」

リヴァイヴは奪った銃を構え

リヴァイヴ「欲しいな！」

リヴァイヴはコクピット内で乱射し、オーライザーの機能を破壊した。

刹那「オーライザーの出力が…貴様！ あっ！」

オーライザーから出たリヴァイヴは、アニューが操縦する小型艇に乗り込んだ。

ロックオン「アニュー…！」

ケルディムはGNスナイパーライフル？を構えた。

アニュー『私を撃つの？』

ロックオン「あっ…！」

アニューの幻覚がロックオンに語り掛けた。

ロックオン「戻れアニュー！ アニュー・リターナー！」

ケルディムの照準が小型艇を捉えた。

ロックオン「撃てよ…狙い撃てよ…！ 俺は何の為にここにいる？

何の為に…カタロンに…CBに…！」

ロックオンの脳裏に浮かぶは、アニューとの日々。

ロックオン「はっ…！ うわあああああ！」

ロックオンは小型艇を撃つ事が出来ず、コンソールパネルを叩いた。

ロックオン「なんて情けねえ男だ…ライル・ディランディ…！ 俺

の覚悟はこんなもんか…こんな…！」

刹那「ライル・ディランディ…！」

其処に遅れてデステイニーが来た。

シン「ッ…」

シンはロツクオンを見て、『嫌な既視感』を覚えた。

シン「（何なんだ…？ この嫌な既視感は…？ 嫌な予感がする…。
）」

シンはその考えを振り払う様に首を振った。

だが、その考えが現実のものになるとは思わずに…

スメラギ「フェルト、艦内システムの状況は？」

フェルト「航行、戦闘システム共に相当なダメージがあります。ウ
イルスの駆除は行いましたが、完全にデリートされたデータが34
56。イノベーターに持ち出されたデータもあるようです。」

スメラギ「再構築までの時間は？」

フェルト「最短で2210です。」

ミレイナ「スメラギさん、リターナーさんは…」

スメラギ「今は作業に集中して。敵が来るわ。」

ピピッ

スメラギ「イアン、オーライザーの修理状況は？」

イアン『コクピットはユニットごと取り替えた。だが、ライザーシ
ステムの調整に時間が掛かる。暫くダブルオーは出せんぞ。』

スメラギ「了解しました。」

ロックオン「アニニュー…何でだ…どうしてなんだよ!? くそっ…」

シン「ロックオン…」

刹那「彼女は、戦場に出てくるぞ。」

ロックオン「……………」

シン「ッ…!」

刹那「この機会を逃すとは思えない。」

ロックオン「分かっているよ。言われなくてもやる事はやる。相手は

イノベイターだ。俺達の敵だ。トリガーくらい…」

刹那「強がるな。」

ロックオン「ッ!」

刹那「もしもの時は俺が引く。その時は俺を恨めばいい。」

シン「刹那…?」

ロックオン「かつこつけんなよ、ガキが。」

刹那「お前には彼女と戦う理由が無い。」

ロックオン「ッ…! あるだろ!?!」

刹那「戦えない理由の方が強い。」

ロックオン「くっ…!」

刹那「……………」

シン「…刹那、マジで殺る気か?」

刹那「ああ。」

シン「ッ……………」

シンはそんな刹那を見ることしか出来なかった。

シン「(…とはいっても、刹那の言うことも分からなくはない…でも…出来れば助け出したいというのは…『あれ』の再現を見たくないだけなのか…?)」

シンはそう考えていた。

シン「（…それにしても、大丈夫なのか…？ まあ、訓練は受けているけどな…）」

シンは別の考え事をした。

ブリッジ

ティエリア「……………」

ティエリアはラッセの代わりに操舵席に座っていた。

ティエリア「（『もうそろそろ』か…）」

そう思っていた時だった。

ティエリア「！」

ティエリアの肩に手が置かれたのだ。

スメラギ「ティエリア、セラヴィーでの出撃準備を。ここは私がやるわ。」

ティエリア「スメラギさん…」

スメラギ「心許ないのは分かっているわ。だから、ガンダムで守って。」

「
ティエリア「いいえ、『もう直ぐ着ますから』。」
スメラギ「えっ？」

プシュー

マユ「ティエリアさん。」
スメラギ「マユちゃん？」
ティエリア「マユ・アスカ、トレミーの操舵を頼む。」
3人「えっ？」

スメラギとフェルト、ミレイナはティエリアの発言に驚愕した。

スメラギ「マユちゃんが…？」

ティエリア「自分の意思とシンの許可を受けて訓練はしています。」
スメラギ「でも…」

ティエリア「フェルトとミレイナはよくてマユは駄目なのか？」

スメラギ「彼女は…一般人なのよ…？」

ティエリア「言っただけです。マユは『自らの意思』で訓練を受けています。」

スメラギ「ッ……」

マユ「ティエリアさんの言う通りです。マユは自分の意思で此処にいますから。」

スメラギ「マユちゃん…」

フェルト「………」

ミレイナ「ッ………」

ビーンッ！　ビーンッ！　ビーンッ！

皆「ッ!？」

フェルト「Eセンサーに反応！ 速度から、敵部隊と予測されます！」

ティエリア「頼んだぞ、マユ・アスカ！」

マユ「はい！」

ティエリアはブリッジから出て、マユは操舵席に座った。

3人「!?!」

シン「警報!? クッ! やっぱりか!」

シンと刹那は部屋から出た。

ロックオン「……………ッ。」

ロックオンは俯いていたが、覚悟を決めたように目を開き、顔を上げた。

ロックオン「アニュー…くっ。」

ブトレマイオス2にガデッサ、ガラッゾ、新型のMAとMSが接近していた。

ヒリング「艦のシステムはオシャカでダブルオーは手負い。残りのガンダムだけなら楽勝ね」

リヴァイヴ「ヒリング、我々の目的はダブルオーの鹵獲だよ。」

ヒリング「分かってるわよ。だから…あの子にも手伝ってもらわなきゃね。」

ヒリングは新型のMSを見た。

アニュー「……………」

新型のMS——ガッデスに乗るのは、アニューだった。

リヴァイヴ「悪趣味だな…」

リヴァイヴは新型のMA——レグナントを見た。

リヴァイヴ「ハレヴィ准尉。新造されたレグナント、初陣とはいえ期待してますよ。」

ルイス「了解。」

ヒリング「ガンダムのお出でよ！」

ルイス「あっ！」

ブトレマイオス2からデスティニー、ケルディム、セラヴィー、アーチャーアリオス、GNティエレンが出撃した。

ティエリア「敵は少数だが、MAがいる。前のとは違うタイプか…」
セルゲイ「次から次へと新型の機体が…」

アレルヤ「来る！」

ティエリア「！」

セラヴィーとケルディムはレグナントの攻撃を躲したが、ビームが軌道を変えて襲い掛かった。

シン「何だあれは!？」

ティエリア「粒子ビームが…」

ロックオン「曲がつただと!？」

再びビームが放たれ、セラヴィーはGNフィールドで防御した。

ティエリア「こ…この威力は!？」

だが、セラヴィーはビームの威力に耐えきれずに吹っ飛んだ。

シン「ティエリア! チツ、だったら…!」

デスティニーはレグナントに向かった。

アレルヤ「シン! 無茶だ!」

ソーマ「アレルヤ!」

アレルヤ「ハッ!」

アーチャーアリオスはガデッサの攻撃を躲した。

セルゲイ「コイツ…!」

ヒリング「あら? 太陽炉…GN粒子に対応出来る様に改良されたの? でもね、そのくらいでこのガラッゾには敵わないよ!」

GNティエレンとガラッゾは戦闘を開始した。

ロックオン「何処だ、何処にいる? アニュー!」

ハロ「敵機接近！敵機接近！」
ロックオン「ッ！」

脚部のブースターをパージしたガッデスがケルディムにGNヒートサーベルで斬り掛かり、ケルディムはGNビームピストル？で防御した。

アニュー「興奮しないでライル！　良い男が台無しよ！」
ロックオン「アニュー！」

ティエリア「アニューだと！？」
ヒリング「あつはははは！　はははっ！　劇的な再会よねえ、愛した女はイノベイターで自らの敵…まさに命懸けの恋ってやつだね！」
スメラギ「なんて事を…」

ケルディムとガッデスは戦闘宙域から離れいった。

シン「ロックオン？！　クッ、今はあれを…」

デステイニーはレグナントの攻撃を躲し続けた。

シン「そんな攻撃！」

デステイニーは攻撃を躲しながらGNビームライフルで攻撃した。だが、レグナントのGNフィールドはそんな攻撃を物ともしなかった。

シン「なんて頑丈な…！」
ティエリア「突破口を開く！　ハイパーバーストモード！　圧縮粒子、解放…！」

セラヴィーは最大の一撃を放った。

だが、レグナントのGNフィールドはそれを防いだ。

ティエリア「ば…馬鹿な！ ハイパーバーストが…?!」

シン「ティエリア下がれ！ バスターソードで叩く！」

ティエリア「…クッ！」

セラヴィーは下がった。

シン「うおっ?!」

デステイニーはレグナントの攻撃を躲した。

シン「何か知らないけど、『読める』んだよ！ 攻撃が！」

デステイニーはレグナントの攻撃を躲しつつ、レグナントに接近した。

シン「…ハッ！」

レグナントはエグナーウィップで攻撃した。

シン「ぐあああああ…!!」

デステイニーはエグナーウィップに絡まり、電撃攻撃を食らったが、デステイニーはGNバスターソード改でエグナーウィップを破った。

シン「ハア…ハア…！ 舐めんじゃねえ…！」

シンはレグナントを睨んだ。

ヒリング「クッ！ たかが1機に何やってるのよ!？」

ヒリングはレグナントに向かってそう言った。

セルゲイ「何処を見ている!？」

ヒリング「うつ?!」

ガラツゾはGNティエレンの攻撃を躲した。

ヒリング「なっ…何なのコイツ…?!」

セルゲイ「其処ッ!」

ヒリング「ッ!？」

GNティエレンはGNビームライフルからGNビームサーベルを出し、ガラツゾの左足を斬った。

ヒリング「ぐうつ?! 嘘?! 押されてる!?! 私が?!」

ピピッ!

ヒリング「ハッ!」

ガラツゾはGNフィールドでビームを防いだ。

ヒリング「あれは…!」

ティエリア「イノベーター…!」

ガラッゾに攻撃したのは、セラヴィーだった。

ヒリング「コイツら…!!」

ヒリングはギリリと齒軋りをした。

セルゲイ「援護をさせてもらう。」

ティエリア「了解した。」

GNティエレンとセラヴィーはガラッゾに攻撃を仕掛けた。

リヴァイヴ「墜ちろッ!!」

アレルヤ「当たるか！」

アリオスはガデッサの砲撃を躲した。

ソーマ「そこッ！」

リヴァイヴ「クッ！」

GNアーチャーはGNミサイルを撃ち、ガデッサはGNバルカンでGNミサイルを迎撃した。

リヴァイヴ「付け入る隙が無い…?! クッ！ イノベーターの足下にも及ばない超兵ごときが！」

だが、ガデッサはアリオスとGNアーチャーの連携の前に手も足も出なかった。

アレルヤ「これで！」

リヴァイヴ「ッ！！！？」

アリオスはGNビームサーベルを降り下ろし、ガデッサは右腕をGNメガランチャーごと斬られた。

リヴァイヴ「クッ！ このッ！！！」

シン「一気に決める！ ハイパーモード！」

デステイニーはハイパーモードを起動し、レグナントに更に接近した。

シン「ッ！？」

シンは『悪寒』を感じ、デステイニーは後ろに下がった。

シン「なっ？！」

レグナントの腕の先、指に当たる部分が全て外れ、デステイニーに突撃したのだ。

指に見えた物は全てGNファンングなのだ。

シン「これは!？」

デステイニーは後退しながら両手にGNビームブーメランサーベルモードを持った。

シン「やるしかない!!」

デステイニーは目の前に向かうGNファングに突撃した。

ロックオンのケルディムとアニューのガッデスは、撃ち合い、唾競り合い、そしてGNシールドビットとGNソードファングによって激しさを増していた。

ロックオン「何故だ!？ 何故俺達が戦わなければならない!」
アニュー「それは貴方が人間で…私がイノベーターだからよ!」

1基のGNソードファングがケルディムの右脚に突き刺さり、爆発が起きた。
ケルディムは残った右脚のGNミサイルで攻撃をした。

ロックオン「くうっ! 分かり合ってた!」

アニュー「偽りの世界でね!」

ロックオン「嘘だというのは…俺の想いも、お前の気持ちも!」

アニュー「ッ…!」

ロックオン「ならよおッ!」

ケルディムは其処でトランザムを発動した。

ガッデスをGNシールドビットのビームで動きを封じ、接近した。ガッデスはGNヒートサーベルで攻撃したが、トランザムケルディムはそれを躲し、更にGNビームピストル？とGNシールドビットでガッデスを『撃破しない程度に』攻撃し、ガッデスは半壊した。そして、トランザムケルディムは全ての武器をガッデスに向けた。

アニュー「ライル……」

ロックオン「くっ……！」

シン「うおおおおおおおッッ……！」

デステイニーは両手のGNビームブーメランサーベルモードとGNバルカンを使い、レグナントのGNファングを次々と破壊した。

シン「ッ！」

レグナントはその隙を突いて攻撃したが、デステイニーはGNシールドで防御した。

ドカアアアアアアンッッ……！！

爆発が発生し、デステイニーはその爆煙から出た。GNシールドがレグナントの粒子ビームに耐えきれなかったのだ。だが、デステイニーには殆どダメージは無かった。

シン「くっ…！ やる！ だけど…！」

デステイニーはGNバスターソード改を持ち、再度レグナントに突撃した。

シン「これで…止めだ…！」

レグナントの攻撃を躲したデステイニーはGNバスターソード改の鋒をレグナントに向け、突撃した。

レグナントは迎撃が不可能と見るや、GNフィールドを展開した。

シン「トランザム！」

デステイニーはトランザムを発動し、ハイパーモードを掛け合わせた超加速を行った。

シン「んぐぐぐ…っ…！」

シンはそれによって起きる強大なGに耐えつつ、レグナントに突撃した。

シン「うおおおおおおあああああああッッッ！
…！！…！」

それは正に紅き流星となったトランザムデステイニーの突撃は、レグナントのGNフィールドに阻まれた。

だが、トランザムデステイニーの一撃は、レグナントのGNフィールドの防御力を上回り、GNバスターソード改の鋒がGNフィールドを侵食する様に突破しようとした。

シン「ッぐ……！！ はああああああああああッッッッ！！！！！！！！」

そして、その一撃がレグナントに届こうとした時だった。

ピピッ！

シン「え——」

突如有らぬ方向から来た極太のビームがデスティニーの右ウイングと右腕を消し飛んだ。

シン「ぐあああああッッ！！！！」

それによつて発生した爆発でデスティニーは吹き飛んだ。

シン「なっ……何……？！ ハッ！？ あれは……！？」

シンはビームが来た方を見て、驚愕した。

シン「……こんな時に……！ 何なんだ！ アスラン・ザラ……！」

其処にいたのは、GNドライヴ「T」を7基搭載（その内の4基は直列型太陽炉で機動用。2基はアームに搭載。1基は機体駆動用で予備）したGNミィティアを使用する∞ジャスティスだった。

アスラン「……クッ……！」

アスランはデスティニーを見て、今すぐ撃破したい衝動にかられていたが、その身体は半ばリボンスに操られているという状態であり、リボンスの『ダブルオーの奪取』の支援を行うしかないのだ。

シン「邪魔ばかりして…！」

∞ジャスティスはGNミーンティアのGNミサイルコンテナを開き、デステイニーに向けてミサイルを発射した。

シン「！？」

デステイニーは回避を行おうとしたが、ミサイルからエグナーウィップが射出し、デステイニーに絡み付いた。

シン「ぐっ…！ あああああああああ…！！！」

∞ジャスティスはデステイニーがエグナーウィップミサイルの攻撃を受けたことを確認し、他のガンダムらの所に向かった。

ソーマ「！？」

アレルヤ「あれは！？」

ティエリア「GNアームズ…？ いや、違う！」
セルゲイ「新型の追加装備か！」

∞ジャスティスはガンダム達の攻撃を躲しつつ、GNミーンティアのエグナーウィップミサイルをガンダム達に向けて大量に発射。
ガンダム達はエグナーウィップの餌食になった。

4人「うわああああああああ…！！！！」
ヒリング「頂くよ！ ダブルオー！」

ガラッゾとガデッサはエグナーウィップに絡め取られたガンダム達を尻目に、プトレマイオス2に向かった。

半壊したガッデスに武器を向けたケルディムだが、突如GNビームピストル？を捨てたのだ。

アニュー「な…何を…？」

ロックオン「決まってるだろ！」

アニュー「！？」

ロックオン「もう一度お前を…俺の女にする！」

ケルディムはガッデスの胸部装甲を剥ぎ取り、コクピットを露出させた。

ロックオン「嫌とは言わせねえ！」

アニュー「ラ…ライル…」

ロックオン「欲しいもんは奪う。例えお前が、イノベーターだとしても。」

アニュー「ああ…ライル…」

アニューは涙を流し、ケルディムを見た。

ケルディムはガッデスのコクピットの前に手を差し伸べた。

ロックオン「アニュー…戻ってこい。アニュー…」

アニュー「ライル…私…私は…」

アニューはケルディムの所に向かおうとコクピットから出ようとしたが、突然その動きが止まった。

アニニュー「愚かな人間だ…」

ロックオン「アニニュー…」

アニニューはコクピットに再び座り、ケルディムに襲い掛かった。

ロックオン「ぐっ！ ああっ！」

ガッデスはケルディムを弾き飛ばし、GNヒートサーベルでGNシールドビットを破壊し、更にGNソードファンングで攻撃した。

ロックオン「アニニュー！」

アニニュー「イノベーターは人類を導く者…」

リボنز「そう…上位種であり、絶対者だ。人間と対等に見られるのは我慢ならないな…」

リボنزはアニニューとリンクし、自分の放つ言葉をそのままアニニューに言わせていた。

リボنز& a m p ;アニニュー「力の違いを見せ付けてあげるよ。」

ガッデスはこれまでとは比べ物にならない程の動きと攻撃を見せた。

ロックオン「やめろ…やめるんだアニニュー！ ぐっ！」

ケルディムはガッデスの猛攻で機体の各部を損傷した。

だが、ガッデスの攻撃は止まらず、更に止めを刺そうとGNヒートサーベルの鋒をケルディムに向け、突撃した。

アニニュー「うおおおおおおお！！！」

ロックオン「アニューー！！」

だが、その攻撃はケルディムに届くことは無かった。
ケルディムに迫るガッデスを、他の敵機を退けたトランザムライザ
ーのビームが貫いたのだ。

それはほんの僅かな瞬間。

だが、其処だけはまるで永遠の様に感じられた。

ケルディムはそんなガッデスを受け止め、その2機をトランザムラ
イザーの放つGN粒子が包み込んだ

リボンス「こ…これは…」

リボンスはその状況が判らず、戸惑った。

量子空間でロックオンとアニューは裸で抱き合っていた。

アニュー「ライル…私、イノベーターで良かったと思ってる…」

ロックオン「何でだよ？」

アニュー「そうじゃなかったら貴方に会えなかった…。この世界の
何処かで擦れ違ったままになってた…」

ロックオン「いいじゃねえか。それで生きていられるんだから。」

アニュー「ふっ…貴方がいないと生きてる張りが無いわ。」

ロックオン「アニュー…。」

アニュー「ねえ、私達…分かり合えてたよね？」

ロックオン「ああ。勿論だとも…。」

アニュー「良かった……」

アニューはそう微笑み、その目を閉じた。
ガッデスは最後の力を振り絞り、ケルディムを弾き飛ばし、その直後に爆発した。

シン「あ…ッ。」

デステイニーはトランザムライザーがガッデスを撃った直後にその場に来ていた。

シン「（あれは…）」

シンはトランザムライザーの量子空間の中で抱き合うロックオンとアニューを見て、シンは自分とステラの邂逅を思い出した。

プトレマイオス2

ロックオン「うわあああああ！！」

ロックオンは刹那を殴った。

ロックオン「貴様が…貴様が…貴様がアニューを！！」

ティエリア「やめろ！」

ロックオン「黙れ！」

ティエリア「ッ…！」

シン「……………」

ロックオン「あいつは戻ろうとしていた。イノベーターではなく、人間として…俺達の元に！ 貴様のせいで…！」

ロックオンは何度も何度も刹那を殴り付けた。

だが、その拳が力を無くし、ロックオンは肩を震わせた。

ロックオン「貴様の…うつ…うつ…うつ…あ…あ…あ…アニー…うつ…うつ…うつわああああああ…！」

そのまま、ロックオンは泣き叫んだ。

沙慈「（分かり合ってるのに…なのに…いつか僕も…ルイスと…）」
マユ「あ…」

シン「マユ、今は…」

マユ「あ、うん。」

シンは刹那とロックオンを見た。

ロックオン「うつ…うつ…」

刹那「（声が響く…彼女の声が…彼女の、歌が…）」

刹那の頭の中にマリナの歌声が響いていた。

シン「ッ……………」

第23話 アニュー・リターン（後書き）

アニュー…はやっぱり無理でした。

とはいえ、アニューを生き残らせる可能性はあったけど、その代わり、ルイスが死にます。

まあ、アスランのお陰で助かったけどね。

この回、前半と後半に分けようと思いましたが、結末が一緒なので分けずに一纏めにしました。

そのお陰で1話で1万もの文字数になったww

後、後1話ぐらい出して、暫しの間、この物語の更新は完全に停止します。

理由は、この物語の『外伝的な物語』を書くためです。

キーワードは『義翼』です。

それじゃ、また。

第24話 革新の扉（前書き）

アニューの反乱により、危機的状况に陥ったCBだが、デステイニ
ーの奮戦とダブルオーRによつて危機的状况を乗り切つた。
データの流出とアニューの死を引き換えに…

第24話 革新の扉

第1格納庫

シン「……………」

シンは無言でデステイニーの修復に勤しんでいた。
此処でだが、前回の戦闘のダイジェストをお送りしよう。

ヒリング「頂くよ！ ダブルオー！」

ガラッゾとガデッサは、∞ジャスティス（GNミィティア装備）の手助けもあり、ブトレマイオス2に接近出来た。
だが、事態は急変した。

ドカアアアアンツ！！！！

ガデッサとガラッゾは突如ビームによって撃破された。
ブトレマイオス2はシステムが滅茶苦茶に破壊されている為、何も出来ないのだ。
では、何が2機を撃破したのか。

アスラン「あれは…『ダブルオー』！？」

そう、オーライザーの修復が完了したダブルオーRなのだ。

アスラン「クッ！」

∞ジャスティスはGNミューティアのエグナーウィップミサイルをダブルオーRに向けて発射した。

アスラン「なっ?!」

だが、ダブルオーRはそれを易々と回避、迎撃したのだ。

アスラン「ハッ!？」

ダブルオーRが直ぐ近くまで接近した為、∞ジャスティスはGNフィールドを展開した。

ダブルオーRはGNソード?を投げ、∞ジャスティスのGNフィールドに刺し、更に投げたGNソード?に向けてビームを撃ち、破壊して爆発させたのだ。

アスラン「ぐああああッッ!!!」

吹き飛ばされる∞ジャスティス（GNミューティア装備）。

ピピッ!

アスラン「ッ!？」

背後の斜め下からビームが迫ってきたが、アスランはそれに気付く

のが遅れ、∞ジャスティスはそのビームで下半身を破壊された。

アスラン「クソ…ッ！」

∞ジャスティスはコアファイターを射出し、爆散した。

では、その∞ジャスティスを撃破したのは何かということ――

シン「ハア…ハア…ハア…！　へっ…！」

デステイニーはエグナーウィップの電撃の中で、破壊されなかったGNバスターランチャーで∞ジャスティスを撃破したのだ。その後、デステイニーは自らエグナーウィップを破り、ダブルオーRは他のガンダム達を救出し、ガッデス撃破に繋がるのだ。

マユ「ねえ、お兄ちゃん。」

シン「……………」

シンはマユを無視するかのように作業を続けた。

マユ「…アニューさんって助けられなかったの？」

シン「…ッ。」

シンは一瞬だけその手を止めたが、直ぐ様作業を再開した。

シン「…多分、無理だな。」

マユ「え？」

シン「あの時のアニューさんは、『アニュー・リターナー』ではな

かった。」

マユ「???」

兄の発言にマユは混乱した。

シン「あの時、アニューさんは『何か』に取り付かれていた。」

マユ「……………」

シン「俺は刹那の判断は間違っていないと思う。」

シンは作業を止め、マユの方を向きながら喋った。

シン「ああしなきゃ、ロックオンは確実に死んでいた。」

マユ「あ……………」

フェルト『艦内のシステムチェックの為、一時的に電源をカットします。』

そのアナウンスの直後、プトレマイオス2の明かりが全て消えた。

マユ「…ッ!? お…お兄ちゃん…?!」

マユはシンを見て、驚愕した。

シン「どうした? 俺の顔に何か付いてるのか?」

そう言っているシンの瞳は、『金色の光』を放っていた。

マユ「あ……………」

マユはそれ以上何も言えなかった。

そして、プトレマイオス2の電源が入り、シンはブリッジに向かっ

た。

ブリッジ

プシュー

シン「ん？」

ブリッジでは、スメラギとティエリアが何やら話し合いをしていた。

ティエリア「ラグランジュ5へ行く？ ポイントしか送ってこなかった相手に、答えるというのか。」

スメラギ「気になるのよ。それに、刹那がどうしてもって…」

ティエリア「刹那が？」

イアン『ワシも賛成だ。』

スメラギ「イアン…」

イアン「ラグランジュ5では、避難したリンダ達が研究を続けている。上手くいけば提案していた新装備も手に入る。向こうに着くまでガンダムの補修も出来るしなあ。」

スメラギ「……………了解です。」

シン「…？ 何の話ですか？」

ティエリア「シンか。実は…」

ティエリアはシンにプトレマイオス2に送られた緊急暗号通信の事を話した。

シン「…成る程、確かに気になるな。」

ティエリア「君もか…」

シン「出来れば俺も行きたい所だけどな…」

シンはデステイニーの惨状を思い出し、そこで溜め息を吐いた。

「フフフフフツ…！」

何処からともなく笑い声が聞こえた。

シン「おい、何か聞こえないか？」

スメラギ「ええ、何処か損傷してるかも知れないわね。」

ティエリア「チェックを急げ。」

フェルト「分かりました。」

ミレイナ「了解です。」

イアン「…って、何だよ！　ワシだよワシ！！」

シン「ああ、おやつさんでしたか。で、何か用？」

イアン「酷い言われようだな。まあいい、後で『後部格納庫』に来てくれ。いいものを見せよう。」

スメラギ「後部格納庫…？」

ティエリア「『コンテナ』ぐらいしかなかったが？」

シン「はあ…、分かりました。」

シンと他数名は後部格納庫に向かった。

シン「…って、何で来てんですか？」

スメラギ「このトレミーの責任者として、確認はしないといけないわ。」

シン「えっ？　知らないんですか？」

ティエリア「恐らく、イアン以外は誰も知らないと思う。」
シン「報告の1つぐらいしとけよな…」

途中でマユやアレルヤ達と合流し、後部格納庫に着いた。

イアン「おお、来たか！…何か人数が増えてるが、まあいいか。」

イアンはそう言ってコンテナを操作した。

ウイイイイイイ…

シン「…は…？」

開かれるコンテナの中を見て、シンは先ずは驚きではなく、啞然とした。

「おお…！」

何人かは驚きの声を出してはいたが。

イアン「フッフ、驚いただろ？」

シン「これって…まさ…か…？」

イアン「そうだ、データを元に、ワシらが1から造った『インパルスガンダム』だ。」

シン「ッ…！」

コンテナの中にあるMSは、かつてのシンの愛機であるインパルスを元に造られた機体だった。

その機体構造はオリジナルのインパルスと同じく、コアファイター、チェストフライヤー、レッグフライヤーに分離出来、更にオリジナル

ルと同じ換装機能を持ち、既に複数の『換装バックパック』が開発されている。

コアファイターはオリジナルの物と違い、GNドライヴ（或いはGN粒子タンク）とGNコンデンサーを搭載する関係で大型化している。

更に、両肩にはデステイニーと同じGNビームブーメランが搭載されている。

詳しくは、『インパルスガンダム解説』を参照。

イアン「これから、GNドライヴの移設作業をやるから手伝えよ。」

シン「…分かりました。」

シン達はデステイニーからインパルスにGNドライヴを移設した。こうして、フォース装備のインパルスとダブルオーRはラグランジュ5の廃棄コロニー、『エクリプス』に向かった。

数日後

ラグランジュ5

エクリプス

シン「あれか。」

刹那「ここは手分けして捜そう。」

シン「了解。」

フォースインパルスとダブルオーRは分かれてエクリプスに向かい、シンと刹那は機体から降りてエクリプスに入った。

シン「さて、何が出るやら。」

シンは拳銃を持ち、周囲を警戒しながら探索していた。

シン「……………」

辺り一面、不気味なまでの静寂に包まれていた。聞こえるのはシン自身の呼吸音、床を歩いたり、蹴ったり、着地する時の音、通路に漂う物を退ける時の音だけだった。

シン「静かだな…」

そうして暫く奥に向かって歩いていった時だった。

ピピッ

シン「ッ！……ハア…、刹那、どうしたんだ？」

シンは通信の音に驚いた事を恥ずかしく思いながら通信を開いた。

刹那『ヴェーダの所在を記したメモを貰った。』

シン「えっ?!」

刹那「一刻も早くトレミーに戻るぞ。」

シン「あ…了解。」

シンは通信を切り、フォースインパルスの所に戻ろうとした。

キーン！

シン「——ッ！？」

シンの頭に電撃の様なものが走り、シンは頭を軽く抱えた。

シン「この感覚は…?! アッチか。」

シンはその一瞬の感覚を頼りに暗い通路を移動した。

その頃、刹那は機体の赤を白にしたマスラオがダブルオーRを人質にしているのを発見した。

刹那「あの機体…」

刹那は白いマスラオのハッチの上に立つブシドーを見付けた。
その顔には、何時も着けている仮面は着けていなかった。

ブシドー「『4年振り』だな、少年。」

刹那「あの男は…」

刹那は仮面を着けていないブシドーを見て、かつてのユニオンのフラッグファイトを思い出した。

刹那「貴様……」

ブシドー「少年、ガンダムを失いたくなければ、私の望みに応えて欲しい。」

刹那「何が望みだ!？」

ブシドー「真剣なる勝負を」

刹那「何ッ!？」

ブシドー「この私……『グラハム・エーカー』は、君との果たし合いを所望する!」

そう、ミスター・ブシドーの正体は、かつて刹那と何度も戦った、旧ユニオンのエースでフラッグファイター、グラハム・エーカーなのだ。

「ミスター・ブシドー……リボنزの差し金か。」

そう呟くのは、薄紫のCBの旧パイロットスーツを着たリジエネだった。

リジエネ「フ、まあいい。これから面白い事になりそうだな。」

リジエネはそう言って微笑み、ネーナが殺害した紅龍の死体を片付け、ドアの方を向いた。

刹那「そうまでして決着をつけたいか？」

グラハム「無論だ！ 私の空を汚し、同胞や恩師を奪い、フラッグファイターとしての矜持すら打ち砕いたのは他でもない…君とガンダムだ！」

刹那「ッ…」

グラハム「そうだとも。もはや愛を越え…憎しみも超越し…宿命となった！」

刹那「宿命?!」

グラハム「一方的と笑うか？ だが、最初に武力介入を行ったのはガンダムだという事を忘れるな！」

刹那「（この男もまた、俺達によって歪められた存在…）分かった。果たし合いを受けよう。」

グラハム「全力を望む！」

刹那とグラハムはそれぞれの機体に乗り込んだ。

刹那「沙慈、制御をこつちに。」

沙慈「戦う気？」

刹那「他に方法がない。」

グラハム「これが私の望む道…修羅の道だ！」

グラハムはヘルメットのバイザーを上げ、仮面を着けた。

刹那「ダブルオーR！」

ブシドー「マスラオ改めスサノオ！」

刹那「目標を…」

ブシドー「いざ、尋常に…」

刹那「駆逐する…！」

ブシドー「勝負…！」

ダブルオーRとスサノオの決闘が始まった。

シン「……………」

シンは真っ直ぐ通路の先——電撃の走った方を進んでいた。

シン「ドア……」

シンはドアを見付け、ドアの方に向かった。

シン「この先に……？」

シンは呼吸を正し、拳銃を構え、ドアを開けた。

プシュー

シン「！」

自動ドアの先には窓のある広めの部屋があり、その部屋には、『薄紫のCBの旧パイロットスーツ』を着た者がいた。

シン「アンタは……？」

シンは拳銃を構え、警戒しながらその者に接近した。その者の顔はサンバイザーで見えなかった。

シン「何なんだ、アンタは…？ それに、そのパイロットスーツは…。」

「さあ…？ 何者でしょうか？」

シン「ッ…！」

「まあ、僕がヘルメットを取れば、君は『誰か』の名前を言う事ぐらいは分かるね。」

シン「何…？」

そう言つてその者はヘルメットを脱ぎ始めた。

シン「ッ！」

シンは少し離れ、臨戦体勢を取つた。

シン「…ッ！？ なっ…？！」

「フ。」

シン「テイ…テイエリア…？！」

シンはヘルメットを脱いだその者の顔を見て、驚愕した表情でそう言つた。

シン「な…何でテイエリアと顔が…？！」

「それはDNAの遺伝子パターンが一緒だからだよ。」

狼狽えるシンにその者はそう言つた。

シン「遺伝子パターンが…？」

「フフ、僕の名はリジェネ・レジエッタ。『イノベイド』だよ。」
シン「…？ イノベイド…？ イノベイターとは違うのか？」

リジエネ「いや？ イノベーターなんて『現時点で出てきてはいない』からね。」

シン「いや、ちょっと待て。アンタが何を言っているのか全く分からない。」

リジエネ「なら、要約すると僕達イノベイドは、『いずれ出てくるイノベーターを元に、ヴェーダによって造られ、生まれた存在、といった所だな。』

シン「…じゃあ…なんだ？ イノベイドのくせにイノベーターを名乗っているわけか？」

リジエネ「その通りさ。」

シン「だったら、イノベーターは…？」

リジエネ「イノベーターは『造られる』のではない。『革新する』んだよ。」

シン「革新…？」

リジエネ「そう、イノベーターは君達人類の中から出てくるんだよ。」

シン「えっ…？」

リジエネ「そして、人類初のイノベーターはどうやら『君達』の中から出てくるみたいだね。」

リジエネはシンに指を差しながらそう言った。

シン「それって、どういう意味…？」

バチイイイイイイイ！！！！！

シン「！？」

窓の方に閃光が走り、シンは窓の方を見た。

シン「！ あれは…ダブルオー?! ……ハッ！」

シンは拳銃をリジエネに向けた。

シン「まさか、罠か?!」

リジエネ「いや？ ヴェーダの所在の書かれたメモは本当だよ？
ただあれはリボنزの差し金だけだね。」

シン「！ 何でアンタがそれを…?!」

リジエネ「フフ、あのメモは僕がやつとの思いで手に入れた物だからね。」

シン「ッ ……」

リジエネ「ダブルオーガンダム。」

シン「…?」

リジエネ「あれには『人間を革新させる力』があるみたいだね。」

リジエネは窓の方を向きながらそう言った。

シン「いきなり何を…?」

リジエネ「イオリア・シュヘンベルグは、何世紀も前から予見していた。『来るべき対話』を。」

シン「…!」

リジエネ「そして、その『来るべき対話』を行う、『新人類』の誕生を。」

シン「新人類…?」

リジエネ「イノベーターのことさ。」

シン「イノベーターが…? ハッ！」

シンは部屋に流れ込んできたGN粒子に何かを感じ取り、窓の方を

見た。

シン「このGN粒子は…擬似GN粒子…？」

リジエネ「アルケードライ。」

シン「えっ…？」

シンは取り敢えず窓の方を見た。

ダブルオーRとスサノオは激しい戦いを繰り広げた。

刹那「…?! あのGN粒子は…！」

刹那は高濃度に放出する『紅いGN粒子』に気付いた。

刹那「あの機体…スローネ!？」

沙慈「はっ! ルイスの家族を…」

刹那は高濃度のGN粒子を放出する『スローネらしき機体』を見付けた。

刹那「あっ…! あのMAは、ルイス・ハレヴィの…！」

沙慈「えっ…?!」

刹那は更に高濃度GN粒子の中にレグナントを見付けた。

ブシドー「全力だと言った筈!」

沙慈「うわっ！」

ダブルオーRはスサノオに弾き飛ばされた。

ブシドー「生きてきた…私はこの為に生きてきた。例えイノベイターの傀儡に成り果てようとも…この武士道だけは…！」

刹那「そうまでして…！」

沙慈「刹那…！」

刹那「戦いに集中する…！」

刹那は気を取り直し、ダブルオーRは再びスサノオと激闘を行った。

刹那「このままでは…！」

ブシドー「埒が明かぬ…！」

刹那「ならば…！」

ブシドー「さすれば…！」

刹那「トランザム…！」

ブシドー「トランザム…！」

ダブルオーRとスサノオはトランザムを発動した。

刹那「うおおおお…！」

ブシドー「うおおおお…！」

それは、緑色の光と緋色の光となり、更に激しい戦いを繰り広げた。

刹那「うおおおおおおおお…！！！」

ブシドー「うおおおおおおおお…！！！」

膨大な量のGN粒子がこの宙域に流れ込んできた。

シン「はっ…このGN粒子は…まさか…」
リジエネ「遂に、覚醒を…」
シン「……………」

グラハム「うっ…ここは一体…」

グラハムは量子空間の中で目を覚ました。

グラハム「私は既に涅槃にいるというのか…」

刹那「違う」

グラハム「少年…」

刹那「ここは、量子が集中する場所だ。」

グラハム「何を世迷い言を…」

刹那「分かるような気がする。」

グラハム「はっ」

刹那「イオリア・シュヘンベルグがガンダムを…いや、GNドライヴを造った訳が。」

グラハム「何っ!？」

刹那「武力介入はこの為の布石。イオリアの目的は人類を革新に導く事。そう…俺は、変革しようとしている。」

刹那はゆっくりと目を開いた。
その瞳は金色に輝いていた。

第24話 革新の扉（後書き）

リジエネの口から出ちゃったよ、某メカデザイナーの。ナ。ーがW
W W W W

そしてインパルスガンダムも登場だぜえ！！

後、第10話の最後らへんを変えましたので見直して下さい。

インパルスガンダムの解説

デステイニーのデータにあったインパルスのデータを元に、オーライザーとGNアーチャーと共に造られた機体である。

オリジナルと同じ分離合体機能を持ち、コアファイターさえ無事なら、チェスト、レッグ部分が破壊されても換装して戦場に復帰する事が可能。

最初からGNドライブ対応機として造られており、機体の各部にGNコンデンサーがあり、コアファイターの形状が異なる。

基本武装はGNバルカン、GNシールド、GNビームライフル、GNコンバットナイフ、GNビームブーメランである。

GNビームブーメランはデステイニーと同等の装備であり、更に一部武装はデステイニーと互換性を持つ。

オリジナルと同じ換装機能を持ち、オリジナルと同じ機能をGN粒子対応型として再現したフォース、ソード、ブラストの三種が確認されている。

ソードやブラスト装備時は、装甲の色が変わるが、これは装甲にあるナノマシンによるものであり、強度等に変化は無い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8621q/>

機動戦士ガンダム00 DESTINY 『灰色の運命』

2011年11月17日21時22分発行